

連塾・地域創生学研究所

地域創生論文集

第2号



平成19年3月

連塾・地域創生学研究所

地域創生論文集 第2号

目 次

【実践論文】

1. 真人生をめざして……………	有松 英昭	3
2. 「さつきが丘パラダイス」の実践 一主婦でもできるコミュニティ創生(2年目)一……………	安藤 鈴子	7
3. 人生を素敵にナイスセンスとナイスバランスで地域創生を！……………	伊賀 功悦	10
4. 「インド」と「ドバイ」そして「中四国州」……………	池田 弘	12
5. 「愛郷心」の涵養と教育面での一考察……………	板野 恒一	15
6. 観光カリスマに学ぶ地域創生……………	遠藤 千里	18
7. ホームステイを成功させるための英語教材作り……………	岡本 江美 木村 明美	21
8. 地域創生実践の第一歩……………	衣笠 宏	24
9. わが内なる地域創生 一美しい国づくりは、地域から一……………	近藤 治	28
10. 地域創生学における「地域」把握の一方法 ～タウン・ウォッチングからエリア・ウォッチングへ～……………	城之内 庸仁	31
11. 学校と地域をつなぐ「安全ネットワーク構築」による 安全・安心のまちづくり……………	角田 みどり	34
12. 地域創生における子どもの教育について 新聞発表を例にして……………	高取 宏樹	38
13. 地域における2次予防の重要性……………	滝澤 祥一	41
14. 地域の農業について考察……………	田口 琢磨	44
15. 生活共同体の形成について……………	竹内 弘海	47

16.	LET'S TRY	西村 恵美子	50
17.	「倉敷市真備地区」地域づくり／第2章	尾藤 寿実	52
18.	西大寺鉄道にみる地域遺産の伝承と地域創生	福田 祐一郎	55
19.	夢プロジェクト K<地域創生・人財塾>を目指して	藤井 清治	58
20.	「束子 TAWASHI」の実践活動	藤井 裕也	62
21.	地球温暖化と地域創生	松浦 省吾	65
22.	団塊の世代を呼び込み地域の再生を	守屋 基範	68
23.	地域創生における熱き想いのネットワーク	山本 敏明	72
24.	高校生による地域創生活動 －「Student Venture Project 商業高校の一枚一品運動」実践報告－	吉田 信	75

【中間論文】

25.	撫川城址周辺整備からはじまった撫川・庭瀬のまちづくり	太田 正孝	79
26.	中島屋大橋家と大橋家住宅観光	大橋 典晶	82
27.	奉還町商店街の再活性化	小野 員之	86
28.	地域創生、何にどう行動するか	千房 新太郎	88
29.	子供の声のする地域を目指して 地域創生は小さなひとりの意識から大きな Wave となって	難波 好江	92
30.	「男女共同参画フォーラム」への参加を通して	野島 淑子	96
31.	温暖化に歯止めを	藤原 忍	99
32.	すばらしい自然を愛して	三澤 初子	102
33.	地域の宝さがし探検隊 ～子ども達のパワーを地域行事に～	宮本 由美子	104
34.	「坪田譲治作品初出目録」の構想 －『坪田譲治書誌』への布石－	劉 迎	107

真人生をめざして

有松 英昭

1. はじめに

地域創生リーダー養成塾「連塾（実践コース）」を修了し、実践活動を開始するに当たり、現時点に於ける私自身の人生に対する考え方を整理し修了論文とする。何故かと言えば、私自身の人生に対する考え方の上に地域創生に対する考え方並びに実践活動がある。そして考え方が、整理され確立していることが、リーダーとしての重要な条件の一つであると考えからである。私の人生に対する考え方は、60年余の人生経験、その中でめぐり合った多くの人々及び感銘を受けた本等から少なからぬ影響を受けて形成されたものである。この論文では、それらの本の中でも中村天風氏の著書を通じて天風哲人の悟りに感銘し、十数年の時を経て私自身の考え方として形成されたものを中心に記述する。

2. 真我を知る（真の自己を知る）

真人生について考える上で出発点となる重要な事柄が、真の自己に対する認識である。ここに現実に存在する自己なるものは、どこから来たのか、そしてどこへ行くのか。また人生は如何なる考え方で生きていくべきなのか。真人生をめざすに当たり、その第一歩は、真我の自覚である。（真人生：真理に即した本来の生き方）

自己なるものは、肉体かそれとも心か。結論として自己なるものは、肉体でもなければ心でもない。それでは、ここに存在する肉体及び心は、一体何であると考えなのか。肉体は、生命の器であり、心は生命の中枢制御機能である。

肉体と心は、いずれも自己の本体が、生きる為に必要な道具である。自己の本体は、心身を超越した“あるもの”である。この“あるもの”とは、“永遠不滅の霊魂”である。霊魂とは、大宇宙の分派（分流）である。大宇宙の本源は、137億年前にビッグバンを起こした大宇宙の意志である。ビッグバンは、大宇宙の起源説として科学的に説明された定説である。しかし自己の本体である霊魂と大宇宙の意志なるものが、本源的に通じているという考え方は、哲学的な覚醒によるか若しくは、信念的に断定するしかない。もちろん、私の場合は、信念的に断定したものである。したがって、自己の本体すなわち霊魂は、ビッグバンに、はじまり今日に至る存在であり、生命の器である肉体の寿命により生命が減んだ後も、大宇宙と共に存在する永遠不滅の存在である。

このように真我の実在を認識することにより、自己を肉体本位に考えた場合に起こる健康面の心配ばかりでなく運命的なことに関しても、取り越し苦労をしなくなり、死の恐怖からも解放され、今ある生命を活かして意義ある人生を如何に生きるかと云うことに専念できる。（心は、自己の本体である霊魂が、人間としての働きをする上で必要な道具である）

生命を活かす鍵を握っているのは、生命の中枢制御機能であるところの“こころ”である。こころの持ち方、使い方、すなわちこころの活用法が、人生を大きく左右する。

3. こころの活用法（精神生命の活用法）

心の正しい活用法は、真我の本源である大宇宙のベクトルに合致した使い方をすることである。大宇宙のベクトルは、積極すなわち進化向上と調和（統一）である。精神生命を積極的に堅持し、統一して使用することが、正しいこころの使い方であり、大宇宙の意志に合致した使い方である。心を常に積極的に堅持し統一して使用する為には、心の訓練が必要である。

...(ベクトル：方向性を有するエネルギー。真の積極：尊く、清く、強く、正しい心の働き)...

4. こころの訓練法

心すなわち精神生命を積極的に堅持し、統一して活用する為に、私自身が実践している方法の内、代表的なものを紙面の制約上二つのみ述べる。

(1) 観念要素の更改法（潜在意識に対する対策法）

観念要素とは、こころの中に蓄積された思考の素材(認識、潜在意識)のことである。調理に使用され

る食材と同様に価値の低い固定観念からは、価値高い積極的な思考は生まれて来ない。したがって、実在意識から積極的な暗示を与え、潜在意識の中身を価値の低い固定観念（消極的な観念要素、例：人間は本来弱いもの）から、積極的な思考を発現する為に必要な素材（積極的な観念要素、例：人間は元来強いもの）へと切り替えることが必要である。

すなわち観念要素の更改である。

効果的な観念要素の更改法として代表的な暗示法について述べる。

<自己暗示法>

① 命令暗示法

- ・ 鏡を使用して就寝直前に行う効果的な方法。
- ・ 鏡に自分の顔を映し、眉間を注視し、二人称で「お前は〇〇になる」と希望することを念願する。
- ・ 一度につき一つのみ、集中的に命令する。小声で一回のみ真剣に強く命令する。
- ・ 就寝直前に与えた暗示は一晩中、潜在意識の中で活動し続ける。実現するまで継続する。

② 断定暗示法

- ・ 昨夜与えた暗示を確認し、潜在意識に定着させる方法。
- ・ 朝、目覚めてすぐ、鏡を使わず、一人称で「今日は、私は〇〇になった」と、それが成就したと言う観念で断定する。
- ・ 現状に関係なく、日に何回も繰り返し断定する。（鏡を併用しても可）

③ 連想暗示法

- ・ 就寝直前の気持ちを積極的にする。楽しいこと、嬉しいこと、明るく、尊く、強く、正しく、清らかなことを思いながら寝る。
- ・ 病がある場合は、ぐんぐん良くなって元気になった姿を想像しながら寝る。

<他面暗示法>

- ・ 周囲から積極的な明るい暗示を受け入れる。消極的な暗示には可能な限り拘らない。
- ・ 映画、新聞、雑誌、TV、講演等の中から積極的なものを選択して取り入れる。
- ・ 可能な限り明るく積極的な人と交際する。
- ・ 積極的な集団と交流する。

(2) 積極精神養成法（実在意識に対する対策法）

- ・ 積極精神は健康、繁栄、幸福を創り出す原動力である。生命自体が進化、向上のベクトルを有する積極的なものである。
- ・ 真の積極とは、いつも明朗で生き活きと勇ましく、何ものにもとられない心である。
- ・ また清く、尊く、強く、正しい心で、どんな場合にも積極心を失わない虚心平気な心の状態を真の積極と言う。（虚心平気：何ものにもとられず動じない平常心）

① 暗示の分析

- ・ 暗示は心の食物(栄養素)である。心に入った暗示により思考、言動が左右される。
- ・ 生命を萎縮させ、弱くさせ、傷つけ、暗くする消極的な暗示は排除する。
- ・ 生命を強く、明るく、豊かにし、勇気付け、進化させ、向上させる積極的な暗示のみを取り入れる。

② 内省検討

- ・ 今、心で思っていること、考えていることは、積極的かそれとも消極的かを評価し、積極的なものは、推進し、消極的なものは、見直し積極的なものに切り替える。

③ 苦勞嚴禁

- ・ 苦勞とは無駄な心の使い方である。心身ともに疲れさせる無駄な心の使い方はしない。
- ・ 過ぎたことを思い悔やむ過去苦勞、考えてもどうにもならないことを思い悩む現在苦勞、これからのことを悲観的に思い悩む未来苦勞（取り越し苦勞）はしない。

④ 言行の積極化

- ・ 気分を暗くするような消極的な言葉は断じて使わない。
- ・ 自分自身を鼓舞するような積極的な言動を行うよう常に留意する。

⑤ 対人態度の積極化

- ・ 他人に対する態度は、相手にとっては他面暗示となり、自分にとっては自己暗示となる。
- ・ したがって、他の人と交際する態度は、いかなる場合にも積極的な態度であることを常とする。

⑥ 正義の実行

- ・ 後ろめたい気持ちになるような行動はしない。
- ・ 実行すると気分を爽快にする行動、本心良心に即した行動を常とする。

5. 人生観（人生の目的）

まず人生の羅針盤とも云える信念をもつこと。ここで言う信念とは、自己の本体は、大宇宙の分派であることを確信し、宇宙真理は絶対的な存在であることを信じて疑わないことである。すなわち、因果律(善因善果、悪因悪果)を信じて疑わないことである。

このような信念に基づいて生きる為には、真理の探究を怠らないことが要訣となる。

人生の最期を向えた時、「生まれてきて良かった、すばらしい人生であった」と思える人生にする為には、生きていた間、自己の生命に出来るだけ多く喜びを味あわせることである。但し、その為に他人の喜びを妨げてはならないことは当然のことである。むしろ、大きな喜びを得ようと欲すれば、自身のみ喜びでなく、家族はもとより、自分の住む地域をはじめ、関係する多くの人々と喜びを共有することが不可欠である。

喜びを多く味わう為には、それに見合う力が必要である。強靱な体力、何事にも動じない胆力、真理に即した判断力、良いと判断したことを実行する実行力、肉体的にも精神的にも疲れを知らない精力、何でも器用にやりこなす能力。以上の六つの力を磨き強くすることが、より多くの喜びを味わう為に、不可欠の要訣である。また心を高めることを怠ると真の喜びを味わうことは不可能である。困難に向き合った時が、心を高め人格を磨くチャンスである。困難に立ち向う勇気を堅持しチャレンジする為には、六つの力が必要である。また六つの力は、困難にチャレンジし克服することによって磨かれ強化される。(困難：ここでは、受けて立つべきテーマのみでなく、むしろ進化向上を推進する為に、自らリサーチし、個人的または社会的ニーズを踏まえて特定したクリエイティブなテーマを指す)

人生とは、困難にチャレンジし、克服し、人格を磨くプロセスであり、真の喜びは、このプロセスを貫徹することによってのみ味わえる。(克服：ここでは成し遂げる意)

6. まとめ

日本人は、戦後の経済的困窮からの脱却を目指しひたむきに全力で経済的価値を追い求め続けて来た。その結果世界でも例を見ない経済成長を成し遂げ、国民一人ひとりの生活を向上させることが出来た。このことについては、大いに評価に値することである。しかし反面失われたものも少なくない。

脇目もふらず経済成長という一つの目標を追い求めて進んだ結果、精神的ゆとりを失い、他人との関係で大切な思いやり、親切さ、笑顔まで失い、今日のような息苦しく住みにくい社会になってしまった。精神的なゆとりを失い自己を見失った社会現象の極みが、親子の殺傷事件であり、いじめ、自殺等の病める社会的現象の多発である。

エリート層による利己追求の極限的な社会現象のひとつが、ライブドアや村上ファンドの事件である。彼らは、本来ならば弱者を含む一般市民の人生をリードする立場にある人たちである。

このような社会現象は、戦後の教育において人としてのあり方、生き方を教えられず、又このことについて考える機会に恵まれなかったことが大きな要因であると考えられる。

人としての真のあり方、生き方を真剣に模索し、正しい考え方を確立することが、地域創生活動に当たっても不可欠である。

実践コース修了に際し自分自身の人生における考え方を整理し論文としてまとめることを試みて見たが、紙面の制約を少しオーバーしたにもかかわらず、テーマに対して十分な内容には至らなかった。

地域創生リーダーとなる為には、自分自身が如何に力量不足であり、自己を磨き力量をつけることが不可欠であることを自覚する機会となった。

今後、地域創生リーダーとして活動する為に人格を磨き力量つけるべく研鑽する所存である。

又、遠くない将来、真人生（真理に即した人間らしい本来の生き方）を希求する仲間を集い共に学び世の中を多少なりとも明るくすることに役立つ活動をしたい。

- [参考文献] 中村天風、(1947年)、「真人生の探求」、(財)天風会
中村天風、(1963年)、「研心抄」、(財)天風会
稲盛和夫、(2001年)、「稲盛和夫の哲学」、PHP研究所
稲盛和夫、(2004年)、「生き方」、(株)サンマーク出版

「さつきが丘パラダイス」の実践

—主婦でもできるコミュニティ創生(2年目)—

安藤 鈴子

1. はじめに —私のめざす地域創生—

(今年度の取り組みは、昨年からの継続である。よって、理解を得るために第1号の論文内容と重複する箇所がある。)

人と人のつながりが希薄になって、孤独を感じて生きている人が多くなっている現代社会である。つながりを再生し、心豊かに生きられる社会を築きたい。子どもから高齢者まで誰もが、“生きるって楽しい”と感じられる社会、助け合って生きられる“共生の地域作り”を目指すのが私の地域創生のテーマである。

私は、長年職業として幼児教育に携わっていたので何といたって興味は子育て分野である。そこで、主に子どもの育成をベースにして、そこに地域の大人を巻き込み、“共生の地域作り”を実現していきたいと考えて昨年からの実践に取り組んだ。

この取り組みは、子どもの育成のみに視点を置くのではなく、大人同士のつながりもたいせつにしてコミュニティを構築していくことを目指す。地域協働の子ども育成に、地域の大人の力は不可欠だからである。

2. 「さつきが丘パラダイスの実践」

—地域の概要—

私の居住地域は伊島学区の西の端、さつきが丘町内会という。古い家で26~27年を経た、175世帯の団地である。小学生が18人に減少し、子どもが外で遊ぶ姿を見るのも希な状況である。町内会幼少年部の活動も、ほぼ前年踏襲プログラムを年に3回こなしている。

—2005年度の活動(夏休み宿題オタスケ塾)—

※地域創生論文集第1号参照

—2006年度の活動—

○夏休み中の三日間、前年同様午前10時から12時の2時間、町内の公会堂で行った。

- ・ 1回目、2006年7月24日は、竹の器と箸作り、器にソーメンを入れて箸で食べた。
参加人数・・・幼児(8人) 小学生(16人) 大人(19人) 計43人
- ・ 2回目、2006年8月5日は、岡山KEEP(岡山市京山地区ESD環境プロジェクト)の活動紹介のビデオを見て、代表者と公民館長の話を聞き、町内6年児童に国会訪問時の報告をDVDを見ながら聞き、子ども用環境チャレンジシートの作成について聞く。
後半は、スライム遊びを楽しむ。
参加人数・・・幼児(7人) 小学生(10人) 大人(24人) 計41人
- ・ 3回目、2006年8月27日は、ボランティアによる手品を鑑賞した後、手品を習う。
後半は、昼食としてトッピングおむすびを自分で作っておむすびパーティー、環境チャレンジシートの提出、3回開催のまとめの話を聞く。
参加人数・・・幼児(8人) 小学生(11人) 大人(15人) 計34人

全3回の活動の後に、活動の様子をカラー写真入りで“さつきが丘パラダイスニュース”として町内へ回覧してもらい周知した。また、今年度も「山陽新聞マイタウン岡山」へ記事を掲載してもらった。

3. 今年度“さつきが丘パラダイス”実践の成果と課題

○地域の人材を活用させてもらったことは大きな前進であった。退職後、植木職人をしている男性が竹の切り出し、下準備、当日の指導まで積極的に関わってくれた。地域の人材発掘をして活躍して

もらうことは今後のテーマにしたい。また、KEEPで活動している町内児童を取り上げたことも人材活用の一環であり、環境問題の啓発であり、憧れの上級生の存在アピールである。色々な技術をもった人、他人のために貢献している人、努力している人などとの出会いを設定して、夢や目標が持てるような価値のある環境を用意していきたい。

- トッピングおむすびパーティーでは「家では、こんなに食べないのに！」と、幼児の保護者が嬉しい驚きをしていた。以前は、ミスタードーナツやマクドナルドを喜ぶと思い、安易に購入していたが、子どもたちはおむすびを喜んで食べた。値が張っても美味しいお米を使った事も正解だった。準備に手間がかかっても子どもの喜ぶ顔が、大変さを吹き飛ばしてくれることを若いお母親たちにも実感してもらったことで、活動の意味をよく理解してもらえたと思う。
- 活動の後、子どもと道で出会って言葉を交わしたり、自転車の乗り方を注意したりする事ができるようになった。私以外の大人たちにもこういった関係を作ってもらうためにも、もっと多くの大人の参加を促す手だてを工夫したい。

4. 今後の活動上の留意点

- “さつきが丘パラダイス”の活動を通して子どもたちには、コミュニケーション能力だけでなく夢や目標、地域愛、生きる知恵、充実感など、より良く生きるために必要な力を獲得して欲しい。そのためには、意味のある活動を選択することがとても重要である。次のポイントを踏まえて活動を設定するとともに、様々なアイデアと情報を得る努力をしたい。
(活動選択のポイント)
 - ・ 地域の人材活用→生き方に影響を受ける事ができる。大人にとっても生きがいになる。
 - ・ 地域の成り立ちや歴史への関心→自分と地域のつながりを認識し、社会的な視野を広げる。
 - ・ 地域の大人との関わり→他人への信頼感を持つ。解放され、前向きになる。引きこもらない。
 - ・ 楽しい遊び→協調性、創意工夫、思いやり、リーダーシップなど多くの育ちにつながる。
- 今年度から町内会に新生老人会が組織され、2007年度4月から交流を進めるという話で一致している。最近では、スポーツ少年団や習い事など子どもたちが多忙なので、無理のない範囲で活動を設定して連携できるよう、十分に共通理解をする必要があると思っている。

5. 地域創生についての考察（“さつきが丘パラダイス”の関連において）

【地域の教育力を高める実践】

「国づくりは人づくり」とは、昔から言われていることである。その人づくりを直接担うのは、家庭と学校と地域であるが、その中で大切といわれながらも、理論的実践的に一番曖昧なままにされているのが地域の教育ではないかと思う。こういったことから“さつきが丘パラダイス”の実践は地域の教育力を理論的実践的に高めていく上で重要な役割を担っているように思う。

【組織を機能させるのは人である】

「どんな立派な建物を造っても、うまく機能していなかったらただの箱にすぎない。」と言われるが、それは既存の組織にも言える。それぞれの組織を機能させるのは“人”である。その“人”がどんな考え方をもっているかで、その組織の果たす役割、価値は大きく異なると思う。そういった意味からも町内会、子ども会、その他の見直しは必要である。私は、公民館のボランティアとして、学区愛育委員会の役員として、そして町内会幼少年部といった既存の組織に関わることによって、地域の子育て支援の分野の見直しを進め、有益な事業の実現を目指していきたいと思っている。

【子育て支援は町内会の範囲がベスト】

「グローバルに考えて、ローカルに行動」と教えられたが、私が考えるローカルは町内会程度の範囲である。登校時に出会って「おはよう」、下校時にも出会って「おかえり」、危険な遊び方を「危ないよ」など、同じ子どもに再々出会えて声かけができる範囲内での関わりである。つまり、個人と個人の関わりが根付きやすい町内会程度の範囲で取り組むのが望ましいと考えている。

【心を育んでくれる故郷を創生】

地域創生は、住民が幸せであるために行われる。現代、物や車や情報などが溢れ、その昔とは社会状況が変わってしまった。様々な事件が起こり、人の心も変わってきたと憂えても、文明を廃棄することも昔にもどることもできない。物によって人は幸せになるのだろうか。人の幸せはどこから来るのかを考えた時、“星の王子様”（サン＝テグジュペリ作）の中のキツネが王子様に言った言葉「大切なことはね、目には見えないんだよ」「目ではなにも見えないよ。心でさがさないとね」を思い出す。王子様は大切なものがそこにあると気付いて故郷の星に帰って行った。“心で物が見れる”“そういった心を育ててくれた故郷がある”そんな人は幸せだ。私はこの考えを、地域づくりの根底に据えておきたいと思う。

【地域創生リーダーの資質は地域の中で育まれる】

地域も国も県も人も連なっている。自分の居住する地域だけが良い地域であり得る事はできない。また、自分だけが幸せであり得ることもできないと私は思っている。政治や行政の責任を言う声がよく聞かれる。確かに行政の事業力は大きく、信用もされる。しかし、行政の事業は継続性に欠け、また、上から与えるという意味では今ひとつ住民の思いとはかけ離れており、心に届きにくいように感じている。地域創生の分野は地域住民の手で主体性をもって行うのが最も根付きやすいと考える。そのためには、リーダーとして地域プロデューサーの存在が必要であるが、その地域プロデューサーの資質の一つは、地域と自然と人間を愛することだと思う。地域創生の担い手は、幼少期に地域環境の中で温かい人々と交わり、十分に遊び育てられた体験を持つ人間の中から生まれる確率が高いのではないだろうか。私自身、幼少期にあたたかい地域環境の中で育てられたと感じている。

地球上のどこの地域で暮らすことになろうとも、自分が暮らす場所に愛着を持ち、大切に思う事ができる人間を育成することができたら未来は明るいと思う。

6. おわりに

2006年8月の京山中学校区地区懇談会で“さつきが丘パラダイス”の取り組みを報告した。しばらくの後、京山中の教師から電話が来て「さつきが丘パラダイスの取り組みを基に、文化祭で生徒に授業をしてもらえないか」と依頼があった。他の予定と重なったので断ったが、アピールをしているとこのように思わぬチャンスが訪れる事に胸が躍った。町内会や学区の中にも少しずつ知られてきている。私が水面に投げた石で、思わぬ所にまで輪が広がっていくことに驚きを覚えている。

私自身は、リーダーシップとコミュニケーション能力が今少し不足している。今回の取り組みを進めるにあたって、その足りない分人一倍の努力を要したとも言えるのである。そういった意味で、私にとって地域創生は地域への貢献であるとともに、自分探し自分創りの道程でもあった。

人生を素敵にナイスセンスとナイスバランスで地域創生を！

伊賀 功悦

1. はじめに

人生とは人が生まれて死ぬまでの間の、後戻りできない一度きりの時間を、どう生きたか、なにを経験し何を学んか、何に感動したかを探す旅のような気がします。

夢と目標を持って、愛と勇気とユーモア精神で喜怒哀楽人生を楽しめたらと思っています。

「夢のある人は目標がある。目標のある人は行動が有る。行動のある人は成果が有る。成果のある人は自信がある。自信のある人は、夢が有る。」

2. 建前と本音で話し会える会（仮称 舞遊伝倶楽部）

私は、2年間の連塾での、習い、教を何か実践的に形として踵わしたいと想い、価値観が共有ができ、建前と本音で話し会える仲間の会を作り、地域創生にむけて次の問題に議論をして、実際に行動を起こして行く所存です。

3. 食料エネルギー問題

日本の食料自給率40%が今問題化されており、せめて50%から60%ぐらいは自国で生産をと、熟年世代が立ち上がりはじめています。

私の中学から高校時代の、昭和40年頃の自給率は75%ぐらいあったと言われており確かに食べ物の大事さを何となく感じていました。この時代に戻したいのが私の願いです。無理かと思われませんが、今、自給率40%がクローズアップされていますが食料の廃棄処分が驚く無かれ約35%あるのも事実です、お金の換算して年間約11兆円分の食料を廃棄しています。廃棄処分が無くなれば、自給率75%になります。又、やがて廃棄物になる過剰な食料品を冷蔵庫に入れて保管する電気エネルギーも同様に廃棄しています。我々は年間18兆円の食料を輸入し12兆円の食料を生産し、自国生産の90%、約11兆円の食料を廃棄しています。昔は食料を廃棄することなど皆無に近かったと思います。今でも世界中の国の中には食料を廃棄する事など考えられない人々もいます。便利優先の食生活の維持のため、国レベルでは超無駄な食生活をしています。

もう一度、食文化の原点に立ち返り、食べ残し、コンビニの賞味期限弁当の廃棄を減らす方法を考え、耕作放棄地・休耕田を無くせば、農地の狭い日本でも十分に、安全・安心の食糧問題は解決すると信じています。

4. 自然環境の問題

自然環境問題はまず人が傲慢では無く生き活きと生きて行く事を考え無ければならないと思います。

経済と環境のバランスと舵取りを考えながら如何に自然環境に負担の少ないように経済を維持していくかを考えて行く必要が有ります。

今の世代の事だけの枠組みで経済を考えるのは甚だ危険です。自然環境についても、人類の始まりといわれている、9000年の縄文時代1000年の弥生時代からの、ゆるい時間の流れの中で自然とのバランスを取ってきた時代に較べて、ここ50年間の大量生産、大量消費による急激な経済発展に伴い、同時に、負の遺産として、大量廃棄等により、環境破壊も急激にすすんでいます。総論では誰しも、このままではいけないと思っていますが、核論になると、私も含めて、一度手にした、便利・快適な生活を放すことが出来ない負のスパイラルに入って後戻り出来ない状態です。

化石燃料（石油・石炭・天然ガス）に頼らず、自然エネルギーの水力・太陽熱・地熱・風車発電（個人的には構造上の安全性・美観上好ましく無いと思います。）を推進しても、現在の技術では、総発電量の20%位です。

地球的規模の環境問題の炭酸ガスの排出についての対策としては、発生側の抑制では個人的には安全上のリスクは有るが原子力発電（現在国内の総発電量の37%が原子力発電。ちなみにフランスは85%です。）を炭酸ガス排出問題と安定供給においては取り入れて行くしかないと思います。（将来的には、

本命は核融合発電です)

省エネ・リサイクル・リユースだけでは解決しませんが、先祖から預かった美しい自然環境を地道な活動で次世代に引き継いでもらうように行動をおこしていかなければならないとおもいます。

地球上の全ての鉱物及び天然エネルギーは地球上の全ての生物の共有物です。

個人的には、このままの人間本意の便利な世界を続けると天罰により人類滅亡の危機が有るのでと思います。

5. 粋とユーモアで活きに生きる

人間関係においてお互いの議論がぶつかり合ったり行詰まったりとき、その場の雰囲気を和らげるのにユーモアは必要不可欠です。

粋でない人を、無粋（きまじめで気が利かない人）といいますが、遊び心とユーモアと相手の話がちゃんと聴ける人が粋な人と思います。

活きに生きる人は、性格が明るく、おっちょこちょいで、思ったことを後先をあまり考えず行動に移す人

6. 美意識

日本人の感性としてわび・寂びのDNAがあると思います。色使い、デザイン、材質、使い勝手などシンプル イズ ビューティフルの精神打と思います。

町の灯りと、女性が綺麗に見える町とは、ファッションを楽しみたいと思える町とは、食を楽しめる町とは、活気のある町とは、楽しくて利便性がよくて安全な町とは、etc

7. 躰

子供の躰と道徳は非常に大事です。近頃躰の出来ていない人、道徳の無い人（子供だけでなく大学生・社会人においても）が増えており、学校においても会社においても、今更、躰から教える事も有ると思います。

数年前イギリスに旅行したとき、レストランの入り口に堂々と躰の出来ていない子供はお断り！看板がありました。もし日本でしたらお客の反応はどうでしょう？

イギリスでは本音とユーモア混じりのブラックジョークの心のコンテンツがあり、目くじらを立てるようなお客いません。

お客としての品格が問われる国です。昔の日本もそうでしたが、廉恥心はどこえやら！

8. 欲求と感情と理性

建前と本音の中身を研鑽したいと思います。

建前とは感情と欲求を理性で抑えきった人間的な姿で理想の形です。

本音は感情と欲求を優先させたこれまたある意味での人間的な姿です。理想的には、物事をやり遂げるには、欲求と感情と理性が相まってバランスがとれていればと思いますが、神様ではないかぎり、難しい事です。

9. 結 び

愛と勇気とユーモア精神があれば、ワンダフルワールド

結局は何が必要で何がいらないと結論づけれない、難しいことばかり考えていても何も出来ない。失敗の無い人生も考えられない、物事を全て疑ってかかると不幸な寂しい人生となる。人はそれぞれの境遇があるが、しっかりと人生を歩むには、人に対する愛情と自分を信じる勇気と、あまり型にはめて物事を考えないユーモア精神があれば、きっと、環境、境遇を越えた、自分の周りはワンダフルワールドな世界に変わって行くことを私ながらの経験の中から信じています。

「インド」と「ドバイ」そして「中四国州」

池田 弘

昨年、連塾で聞いた話の中で気になった2つのキーワードがある。「インド」と「ドバイ」である。インドについては現地で開発されている癌の画像診断装置について1期生の高橋義雄さんから伺い、なんとなく気になっていた。「ドバイ」については9月に健塾で講演した際に、健塾の塾生からドバイの紹介があり、砂漠だけの中東に何故あのようなものができたのか理解不能であった。最近、この二つの地域について情報をいくつか入手し、実は二つの地域が密接に関係していることを知った¹⁾。そして、これらの地域の発展は地域創生を考える上で重要なヒントを与えてくれると感じたため論文としてまとめた。

インドについて

文献1はインドの医療についての論文である。元々、インド人は欧米で医療スタッフとして浸透していたが、最近では本国に帰って高度な医療を行うようになり、欧米人がインドで医療を受けるメディカル・ツーリズムが増加しているとの内容である。さらに本レポートではインドでIT技術も高度に進歩し、世界のIT開発の外注先がインドに集中してきていることも報告されている。またニュースで知った内容だが、インドはIT分野のみならず医学にも力を入れており、新薬や医療機器の開発も活発になっているとのことである。この流れの一つが高橋さんのお話であったのである。

私が専門にしている医学でもインドの医療レベルのレポートを見ると驚異的で、分野によっては日本をはるかに凌駕している。しかも、医療に対する規制も厳しくなく、たとえば白内障の手術は24時間営業の病院で効率よく行われ、コストが日本の20分の1であったり、新薬の治験もスピーディに遂行されるために世界から治験依頼が増加しているのである。特に新薬の治験については、規制が厳しく治験のスピードが世界の中でも最も遅く、新薬がなかなか承認されない日本の現状と比べると大きな落差があり、結果的に医療レベルの差にもつながるのではないかと危惧する。

現在、経済発展では中国が最も注目されているが、インドも中国に次ぐ経済成長を達成している。インドの経済成長は、中国の安くて豊富な労働力を武器に海外より技術を供与されて安い製品を大量に生産するモデルと違い、IT、医療などの知的生産分野で大きな収益を上げている特徴がある。したがって、インドと経済協力するに当たっては、相手側にも高い知的水準がなければ協力の意味がないと思われる。中四国地域とインドの関連については後程考察したい。

ドバイについて

インドとヨーロッパを結ぶ接点にドバイがある。ドバイはアラブ首長国連邦(UAE)を構成する一酋長国であり、石油なき後の国の産業として、観光、各大陸を結ぶハブの役割に力を入れており、大規模開発が進行中であることが、最近TVでも紹介されるようになってきている。ただし、これらの情報は観光面が強調され、ドバイの開発の全体像が明らかにされていないものが多い。

前述したレポート¹⁾の中でインド人医師を招聘し、欧米からのメディカル・ツーリズム客を想定した医療センターをドバイに設立中であることが紹介されている。さらに、本レポートでは、もともとインドからは宝飾品が、ドバイからは石油などの輸出があり、両国はお互いに最大の交易相手国になっており、ドバイからはインドの15都市に直行便が飛んでおり、非常に密接な関係であることも報告されている。

しかしながら、現在のドバイの発展はインドとの関係だけによるものではない。ドバイには地政学的なアドバンテージ(ヨーロッパ、アフリカ、アジアの接点に位置する)があり、それを上手に生かした上に、規制緩和などで世界の資本を集めて開発を行っていることで大規模開発が可能となっているのである³⁾。さらに、現在大きく発展しているインドがドバイを介して西欧諸国と結びつくことでさ

らなる大きな経済圏が成長していく流れができつつあるのである。

ここで注目すべきは、ドバイは UAE を構成する一酋長国にすぎず、日本でいえば九州あるいは北海道といった一道州が世界を相手にビジネスを展開しているのである。さらにドバイの住民はベドウィン族だが 120 万人の人口の 10% を占めるに過ぎず、インド人が 40%、イラン人が 20% と海外からの出稼ぎ者を上手に使うことで地域の発展を行っているのである。こういったモデルを見ると、道州制のメリットが実感できるとともに、道州制に移行した際に本当に必要なもの（①その地域の優位性、②優位性を引き出す上での問題点、③その問題点の解決法）が見えてくる。

現在の日本人は隣の中国でおこっている安価な製造コストによる経済成長に目が奪われがちである。そして、対抗策が思いつかないまま沈滞ムードになっているのではないか。インドやドバイの成功事例をみると、頭を使った成功モデルの可能性がみえてくる。そして、この道こそ日本的な手法が最も生かされる道ではなかろうか。

地域創生と中四国州

この 2 年間、連塾で地域創生を考えてきたが、世界でおこっているダイナミックな動きをみると、今後、日本の地方が生き残る道は中国とコスト競争したり、日本の中での位置づけ（特に東京との関係）で方策を考えるのではなく、海外の発展している地域と密接な関係を結ぶことでさらに自分たちの地域の価値を高めることではないだろうか。

こう考えると、中四国は一つの単位（中四国州）で動かなければ、世界と対等につきあえないし、海外の人々を引きつける魅力を提供することも出来ないと考える。そして、キーになるのは中四国州内の交通網の整備と世界に対応できる人材を養成するシステム作りと思われる。

まず人材についてみると、中四国州は人材育成の潜在能力があると思われる。藤原正彦は「国家の品格」で日本は情緒のある国であり、人材が輩出される自然環境はあると指摘しているが、中四国州はその自然風景の複雑さ、多様性から人材を輩出する風景があるのではなか。私が関係している医学の立場から見ても、中国地方は古代から出雲地方を代表とする薬草学が発達するとともに、幕末には津山の洋学者、足守の緒方洪庵などの蘭学者も輩出し、医学関係の業績が多いように思われる。

岡山が教育県と呼ばれるのはこういった背景があるように思われるが、残念なことに多くの人材が県外に流出している。林原健氏はその数を 60 万人と想定しており、大変な数である⁴⁾。これだけの数の人間が流出しては地元が沈滞するのも当然といえる。それでも岡山にはバイオの世界では林原があるし、教育の世界ではベネッセと知的レベルが要求される企業が育っている。

インドが力を入れている IT を始めとするサービス産業は新しいものを発想する力を必要とするが、良い発想はゆとりのある環境、はっとするような美しい自然の中で思いつくことが多い。そういった知的生産の開発場所として中四国州は魅力ある地域ではないか、もともと多様性のある地域ゆえに個性のある人間が集まりやすいところに、インド人というさらに異質な才能が結集すると思われぬ発想が生まれる可能性もある。一方で、このような開発拠点に望ましい土地は中四国でも僻地に存在することが多く、交通網の整備も重要となる。中国地方ではすでに高速道路や国道がかなり整備されており、あとは利用に便利な交通手段を整備すれば、これらの地域へのアクセスはかなり便利になると思われる。中四国全体をみても鉄道、連絡橋、高速道路で地域間の距離がかなり縮まっており、多様な自然環境を短時間に移動できるメリットがある。研究に疲れたら、それらの交通網を使って別の地域に行ってリフレッシュすることも可能である。これは研究者だけに限らず、一般のサラリーマンも利用してもいいと思う。

岡山では週末は別荘という発想はなかなか定着していないが、美しい地域とのアクセスがもっと良くなり、利用しやすい施設があれば、週末は別荘でスポーツ、農作業などを楽しむ人が増えるのではないか。現在、景山詳弘先生が主宰する農業塾に参加しているが、自然の中で体を動かすことで心もリフレッシュされるし、畑の手入れを行うことで周りの風景も次第にきれいになっている。このような活動が広がれば、平素の仕事にも張りが出るし、過疎地の再生にも貢献できると思われる。

そして、そのような環境整備が広がりを見せれば、その地域に域外からの観光客を対象とした滞在

型観光施設の設置を考えてみてはどうだろうか。現在、中国、インドにもリッチな階層が増えていると聞く。このような階層をターゲットに日本の良さを風景、食事など多方面で存分に味わって頂くのはいかがだろうか。

特にインド人は英語が得意なので、観光に来て頂くと迎える側の日本人も英語の勉強になって良いのではないかと。英語教育の重要性がいわれて久しいが、日本では動機付けに乏しいことが十分に習熟できない理由の一つと考える。英語しか話せないお客さんが大挙押しかけて宿泊し、観光し、買い物をすることになれば、アルバイトとなる高校生以上の人間はいやでも英語の勉強をしないとイケないだろうし、うまく対応できて給料が増えるような経験をすれば、そのことが英語をもっと学ぼうという動機付けになるのではないかと。

岡山には高級果物が多いが、日本での販売に苦戦していると聞く。最近では台湾や東南アジアに販路を求める活動を行っているようだが、もっとリッチな人間が集まる場所での販売を考えてもいいのではないかと。前述したドバイは欧米からの観光客が殺到しており、高級果物の需要もあると思われる。ドバイは関空から10時間前後かかるので、さすがに岡山からの直行便は難しいが、関空経由で十分輸送可能ではなかろうか。ドバイで欧米の舌の肥えた観光客に岡山の高級果物をPRするうちに、一部の客は実際にその土地を訪れてみたくなるのではないかと。そのような客に関空経由で岡山に来てもらう。そして山陰、山陽、四国と変化に富んだ地域を巡るツアーで存分に日本の良さを味わってもらうのはどうだろうか。

2年間の学習を通じて、一見関連のないことが実は深いところで結びついたり、新たな関係をつくることで大きく飛躍することを知った。今後も結びつきや思わぬ出会いを大切にして問題解決にあたっていきたいと思う。

参考文献

- 1) 大前研一. (2006). 「産業突然死の時代の人生論(第21回) 日本人よ、インドの経営者の志に学べ」.
<http://www.nikkeibp.co.jp/sj/column/a/23/index.html>
- 2) 伊藤洋一 (著). (2007). 『ITとカーブ・インド・成長の秘密と苦悩』. 日本経済新聞社
- 3) アフシン・モラビ. (2007). 「砂漠に咲いた夢 ドバイ」. ナショナルジオグラフィック日本版 2007年1月号
- 4) 林原 健(著). (2003). 『独創を貫く経営一私の履歴書』. 日本経済新聞社

「愛郷心」の涵養と教育面での一考察

板野 恒一

1. はじめに

戦後教育の落とし物がある。それは物質的と精神的なもののバランスを欠き、教育が是正する力を持たなかったことである。履き違えた自由と個人主義が幅を効かせ、いたわり、おもいやりを美質とする日本人の生き方が崩壊しつつある。中でも公德心の弛緩と地域に対する人々の思い、家族の絆の希薄化が社会の活力をスポイルしてきたと言える。

改めて百年の大計「教育改革」の重要性を痛感せざるを得ないが、昨年12月に教育の憲法とも言われる教育基本法が改正施行され、教育目標の中に「伝統と文化を尊重し、それらを育んできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」が盛り込まれた。

人という資源の国づくりを考え、地域社会の教育機能を高めるため「郷土愛」の涵養に着目したい。人々がその地域を誇りに思い、育んできた伝統文化に関心を持たすアプローチがいるが、中でも先覚者の生き様、功績を“生きた教材”とし学校教育の中に据えることが大切である。

そのためには小学校における総合学習の時間を活用し、外部委託のボランティア講師をリストアップし相互派遣のネットワーク化検討したい。それも単なる編年体的な郷土史ではなく、先覚者の英知と汗を主体にした学習機会の提供が大きな意味を持つてくる。そこで本稿では、日本のふるさと観を遠景に「人輝く岡山」を考察する。

2. 今、なぜ「郷土愛」なのか

公德心の欠如は、計算で表せない価値の大切さを忘れた政治、教育の弊で、青少年の犯罪、陰湿ないじめなどの増加を、短絡的に「社会の病理」と片付けるにはあまりにも要因が重層的である。

戦後教育は「こどもの自由に」が“本当の教育”という錯覚が、ナルシズム的な人間に育ててきたと言える。この甘やかし教育を正し、自分の力で生き抜くことを教えることを柱にしたい。

これまでの学力教育は、歴史で言えば年表や出来事、人の名前をやたら覚え込まず記憶中心になり勝ちで、その歴史上の人物が果たしてきた意義や苦難の足跡、生き様についてはあまり重きをおかず郷土史においてもしかり。

もっとも世界史、日本史の履修漏れが問題になったように、受験で敬遠される歴史は学ぶ機会が少なく、まして郷土史となると小中学校でのカリキュラムになく、多くの若者は生まれ育った地域の歩みはおろか、郷土に輝く先覚者の名前すらろくに知らない。

「分権化時代」は地域の復権が叫ばれるが、まず地域のことを知る前提がなければ誇りももてまい。豊かな自然景観、史跡、伝統文化は優れた観光資源になり得るが、その地域の歩みやどんな先覚者が活躍してきたかの相互理解と、発信も大きな“含み資産”になろう。

その価値観を共有することで「郷土愛」が生まれ、新たな活性化のエネルギーになる。中国5千年の歴史書の中で、司馬遷の「史記列伝」が一番面白いと答える人が多いが、時代の風を体現する人物を活写するからで、身近な郷土史も人物評伝を主体ならば、子どもたちの歴史への興味も増すかと思う。

ふるさと興しには二つの手法がある。雇用の場の確保など安住化につながるハードと、愛郷心に訴えるソフト手法だが、ここではソフト面に絞って日本人のふるさと観をふまえながら「郷土愛」涵養を考えたい。

3. ふるさと意識の変化

室生犀星の詩に「ふるさとはと遠きにありて思うもの

そして悲しくうたうもの よしや うらぶれて異土の乞食

になるとても 帰るところにあるまじや」

がある。

ふるさとと言う郷土・故郷は常に語られ続けてきたが「故郷という物語—都市空という故郷」（成田龍一著、吉川弘文館刊、1998年7月）に「1930年前半はそのひとつの時期で、郷土教育が論議され関連図書が出版された。各地の小学校で郷土教育が実践され、郷土が試みられ郷土教育連盟の機関紙・郷土（後に郷土科学、郷土教育と改題）には郷土教育への提言や実践例が報告されている」と記されているように、戦前には一部ではあるが、郷土教育に取り組む動きが見られた。

ふるさとは生みの母と同じで、底には選択の余地がなくそれだけに論理を超えた強さで迫ってくる。親しんできた山河、地名、親戚、友人と交わってきたときの感情で、どこか甘酸っぱく泥臭い風土のにおいでもある。そこに郷愁を覚えるのは、原始の時代に魅力を感じるのとどこか似ている。

日本の場合には明治期に大きく動いた。行政組織をしての新しい村が、住民自治の自然村の上に大きくかさぶり、自然村を分断したり合併で新しい区分が作られた。明治21、22年の「明治の大合併」がそれで、家族から国民国家という近代化の波だが、根底にはふるさとを山川草木の自然に求める願望があった。

ふるさと志向の波動が何度か生じ、資金では竹下首相提唱の「ふるさと創生事業」がある。一律一億円の交付金を各自治体に交付したため“ばらまき”との辛評もあったが、自らの手で地域の活性化を考えるいいきっかけになったのも事実。

歌の中には「ふるさと」「故里」「故郷」「望郷」などの単語が再々出てくるし、自らを語るときはほぼ例外なく生地を出発点におき、自伝はそこから書き起こしていくパターンが多い。

故郷が盛んに語られる時期は大きく4つに整理できる。

最初は上述した明治の国民国家成立期。次いで戦前の愛国心高揚期、戦後の復興期をえて1960年代後半から始まった高度経済成長期、さらに社会が成熟化し長期安定志向に入った今である。いずれも人々の意識が大きく変わる時期で、高度成長期に生地を離れ田舎から都会へで、移動に伴い生地やそれまでの居住地が故郷になった。

学校教育では主として消化で故郷が歌い継がれてきた。「夕空はれて秋風吹く、月影落ちて鈴虫なく」の「故郷の空」（1888年）「旅愁」（1903年）「故郷」（1914年）のように、恋しさと懐かしさを繰り返す消化を子どもたちに教えてきた。

故郷は懐かしく誇りに思う追憶の対象だが、石もて追われた石川啄木などにとっては“呪詛（その地）”で、絶えずその人の体験の文脈で語られてきた。このため、ふるさは回帰の場所ではなく、新たな出発地の場所として考えることもできる。

4. 郷土に輝く人々に学べ

ふるさと観は時代とともに変容するが、そこにいろんな分野で卓越した先覚者がいればなお心強い。歴史の英雄はいずれも“努力の天才”で、大変な苦難と立ち向かい千載に名を残している。その生き様の素晴らしさが人々の感動を呼び、生きるための大きな励みになる。岡山においても地域、分野それぞれに素晴らしい先人が多彩な光を放っているが、残念なのはそれが十分教えられず“市民権”を得ていないことだ。

岡山においても昭和32年5月に日本文京出版刊の「郷土にかがやく人々」（全5冊）があり、53年1月に改訂版が出されている。子ども向けに郷土の先覚者の人物伝がコンパクトにまとめられていて、今読み直して大人も興味深く読める。

評伝はとかく交渉的なものになり勝ちだが「郷土にかがやく人々」をどんなモノサシで選ぶかだが、同書にこだわらず私なりに列記すると、地域バランスも考慮すれば約40人ぐらいははずせない。

▼後楽園造園など「知行合一」の執行官 津田永忠▼内科医学の開拓者 宇田川玄随▼不滅の彫刻魂 平櫛田中▼行財政改革の旗手 山田方谷▼世界への花むしろ 磯崎民眠亀▼津高のマスクット大森熊太郎▼大空に情熱の表具師 鳥人幸吉▼二天一流の剣聖 宮本武蔵▼戦後科学の礎築く 仁科芳雄▼話せばわかる 犬養毅▼津山の洋楽の泰斗 箕作阮甫▼気骨で皇統守る 和氣清麻呂▼浄土宗開祖 法然上人▼水墨画の画聖 雪舟▼塩田王 野崎武左衛門▼児童福祉の先駆者 石井十次▼文化勲章受賞文学者 正宗白鳥▼岡山発大正ロマン 竹久夢二▼近代史の完成車 薄田泣菫▼学者右大臣吉備真備▼白樺派の歌人 木下利玄▼漢文学の大家 三島中州▼童話作家の重鎮 坪田譲治▼清浄の

境地 良寛▼西洋医学の先駆者 緒方洪庵▼保険業界の父 矢野恒太▼臨濟宗開祖 栄西禪師▼昭和備前中興の祖、金重陶陽▼女子陸上会の先駆者 人見絹江▼千屋振興に燃えた 太田辰五郎▼黒住教開祖 黒住宗忠▼救世軍 山室軍▼金光教開祖 金光大神▼大原美術館創設 大原孫三郎▼江戸の三名君 池田光政▼陽明学者 熊沢蕃山▼児島湾干拓の父 藤田伝三郎らである。

これらの先覚者と向き合うとき、彼らの苦闘の歩みと果たした役割の大きさにふさわしい評価と顕彰がいる。だが、先覚者が果たした数字で計算できない価値の大切さという面では必ずしも顕彰が十文とは言えない。

一例を挙げれば全国屈指の機械化農業モデル地区、岡山市藤田、興除地区などの児島湾干拓地は、明治の大財閥・藤田伝三郎が手がけた。戦後は国・岡山県が引継ぎ完成させた5千600町歩の大沃地は世田谷区に匹敵するが、当初、県の懇請を受けた伝三郎は「泥海の中に金を入れよ」ですかと断ったが、日本農業の近代化のためにと決起した。

戦後の農業改革で藤田組はすべての農地を取り上げられたが、児島湾干拓の正規のビッグプロジェクトは、伝三郎の当初からの採算を度外視した「男ありて」の事業である。伝三郎は長州萩の出で大阪商工会議所を創設し、紡績、硫酸、建築土木請負、鉄道、日本一の銅山の経営などに手を広げた。

岡山においても干拓にとどまらず山陽鉄道（現 JR 山陽本線）の建設や、柵原鉱山などを経営し、産業の近代化のために大いに尽くしたが、顕彰は藤田地区にある藤田神社の顕彰碑、干拓幹線道の愛称ぐらいで、藤田地区以外では大恩人に対し思いが薄すぎよう。

5. 総合学習の時間の活用

先人の偉業を学ぶ場としては公民館などの活用も方法だが、ベストは小学校の総合学習の時間の活用である。02年から教育課程の改定で小、中、高校に「総合的な学習の時間」が設けられ、時間数は小学3、4年で105時間、5、6年で110時間。中、高校もほぼ同程度の時間が割り振られている。

だが、解釈もまちまちで学校判断で「何でもあり」の様相を呈している。地域を再発見し理解を深める系統的な学習が重要だが、地域を学ぼうとするとならまず関心を持たせることが先手になる。

かつて子どもは地域の中で多くの事柄を学び、その機会もあった。自然の中では細かい観察能力や発見力を養ってきたが、親子で語り合う時間が減ったことも地域の歴史や、先人の事績などに関する関心の薄さ、理解力低下の一因かと思う。

豊かな心と社会力育成の柱は「地域に学ぶ」だが、中でも柱は先覚者の人物伝という考えが有効だ。その場合、小学校の3-6年生を対象に、各学期ごとに2-3時間を郷土の学習の時間に割り当てたい。

加えて小学校区の垣根を越えた先覚者の紹介を学校間で相互に実施したい。岡山市内の小学生ならエリアの小学生以外の伝三郎翁や、津田永忠、石井十次、緒方洪庵らとともに学ぶ機会を設けることが大切だ。

また、教える側は学校の教師に頼るのではなく、広く地域に人材を求める「人材バンク方式」でボランティア講師を登録し、必要に応じて学校間で相互に派遣し合うことにたらどうか。登録に当たっては「郷土史検定」（仮称）などを実施し、一定レベル以上を有資格者とし、検定の実施主体を当塾とすることも含めて検討したい。

6. 終わりにあたって

先人に学び「愛郷心」の涵養に努めることが、トータルな意味での地域の教育力を高める。今、わが国はさまざまな面での自信の喪失、モラルの欠如如社会を招いているが、豊かな自然と吉備文化が薫る「郷土岡山」は、長い歴史と伝統文化に裏打ちされた貴重な文化遺産が少なくない。即ち多彩な光を放ってきた文字通り「郷土に輝く人々」がいたからである。地域との絆をいかにとり戻すか——先人に学びながらわれわれ大人も“謙虚なる自信”の回復に努めたいと思う。

観光カリスマに学ぶ地域創生

遠藤 千里

1. 住みたいまちと訪れたいまち

本格的な人口減少社会の到来と少子高齢化の進行、地方分権の潮流を背景に、都市間の競争が激しくなっている。都市の活力の源は、まず定住人口である。企業誘致、産業振興も、経済活性化と雇用創出の側面から取り組まれている。

一方、これまで、住民よりも、他地域からの観光客の増加に重点を置いてきた観光行政は、イベント型、団体旅行型から、体験型や自然、食による癒しなどの穏やかな楽しみによりリピーター客を呼び込む方策に力を入れる方向に変わってきているようである。

一度訪れたいまちを目指していた観光地と、ずっと住みたい、住んでみたいと思われるまちを目指しているす現代の都市は、その目標とする都市像が似通ったものになってきているのではないだろうか。また、人が集まることは、その土地の魅力の現れであり、それが住む人の誇りや愛着を高め、さらに良いところになっていくという好循環にもつながると考えられる。

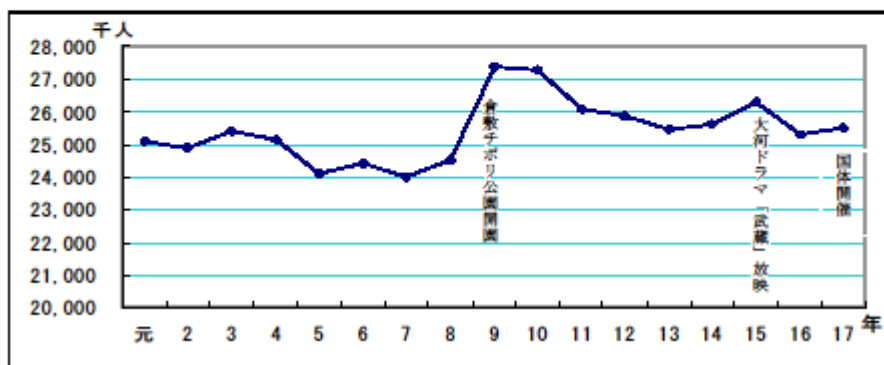
2. 岡山県の観光入り込み客数

1 総観光客数

平成17年の総観光客数は、25,504千人であり、対前年比で100.7%の微増となった。

区分	平成17年	平成16年	対前年比
総観光客数(千人)	25,504	25,321	100.7%

〈総観光客数の推移〉



岡山県観光物産課のHPから、なお、「この調査は、岡山県の観光地への総観光客数等を、県内観光地での実地調査及び有料観光施設の入場者数調査等をもとに、延べ人数で推計したものです。」との注あり。数値の実態としては横這いに時のイベントが上乘せされた状況ではないかと考えられ、体感的には、岡山県のイメージや良さは、他県の中でまだ十分には発揮されていないように思える。

3. 観光カリスマ

(1) 観光カリスマの存在

「観光カリスマ百選」の存在を知ったのは、観光地振興で名をはせた①伊勢神宮内宮門前町の「おかげ横町」と②由布院の地域活性化を通じてであった。

なお、具体的には、

- ① 1980年代の門前町の往来者が年間20万人と低迷していたところ、赤福の濱田社長が社運を懸けたまちづくりを断行、1993年に「おかげ横町」を誕生させた。いまでは年間300万人を超える観光客。
- ② 1952年のダム建設計画反対運動から始まり、玉の湯の溝口会長らを中心に40年をかけ、住民参加で自然景観を大切にしながら温泉保養地づくりに成功。いまでは年間380~400万人が訪れる。「最も住み良い町こそ優れた観光地である」

(2) 観光カリスマとは

平成14(2002)年6月、経済財政諮問会議の「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2002」が閣議決定された。それを受け、生活産業発掘分野の活性化における具体的推進を図るため、経済財政諮問会議の下、生活産業創出研究会(座長:島田晴雄内閣府特命顧問)が発足、「観光産業の活性化」および「健康の産業化」等について、今後取り組むべき政策課題についての検討がなされた。同年12月26日「生活産業創出研究会報告書」がまとめられ、その中で観光カリスマが提案された。そして同日、第1回観光カリスマ選考委員会(委員長:島田晴雄内閣府特命顧問)が開催され、11名の観光カリスマが誕生した。委員会事務局は、内閣府、国土交通省、農林水産省の三府省により組織・運営された。その後、委員会を重ね、平成17(2005)年2月23日第八回選考委員会において、100人の観光カリスマが認定されるに至った。(社)日本観光協会 古賀学

(3) 活動の内容

選考委員でもある古賀学氏が所属する(社)日本観光協会の編による、「観光カリスマ 地域活性化の知恵」(2005.6.20発行)がある。

そこでは、1 地域資源の発掘と観光商品化、2 魅力ある体験型観光、3 地域が一体となった宿泊環境づくり、4 国際交流と観光、5 快適な移動環境づくり、6 行政と観光地づくり、7 新しい観光の芽生え、の各分野のカリスマを紹介している。

全体を概観すると、各カリスマの役職は、市町村長や自治体職員、旅館経営者、観光連盟や商工会議所関係者、農場関係者などが連なっており、活動では、雪や海、エコツーリズムなど自然を活かすもの、そば、農産物、ハムなどの地域ブランド確立による活性化、温泉や伝統技術、町並み再生による誘客など、いずれも、紹介文を読むだけで、個性を感じさせ、ぜひその土地に行ってみたいと思わせるものである。

なお、2004年11月現在の資料では、全国87件のうち、岡山県は空白県となっていたが、最新データでは、真庭市に「美しい自然や文化遺産等をグリーン・ツーリズムに結び付けるカリスマ」が存在していた。近県では、神戸市のフィルムコミッション、境港市の水木しげるロードといった有名、兵庫県では温泉の城之崎、皿そばの出石、広島県では、ワイナリーの三次市、呉市(蒲刈町)の焼き塩などがある。

余談ではあるが、手元にあった2004年の資料と2006年の資料を見比べる中でも、地域おこしでは小規模な自治体がんばっているせいか、いわゆる平成の大合併により地名が変わっているところが多かった。実生活で、岡山県内の再編も把握できていない状況であり、全国的に地名の混乱が生じていると思われる。

(4) 観光カリスマの能力

前出の古賀学氏は、観光カリスマに共通する能力を次のように検証している。「観光カリスマ 地域活性化の知恵」一部要約して紹介すると、

① 多様な分野の能力を生かす

観光振興における卓越した能力とは、何でもいいのである。要は、自分が好きなことを貫き通し、それをさらに好きになるように観光振興というものを考えていくのが、良い観光推進の手順なのである。

② 何事においても情熱を持ってあたること

観光カリスマは、情熱がある。地域の話語り始めると止まらない。相手に情熱を感じるのは、相手が自信を持って話している時であろう。情熱は、自分の行動に対する自信から生まれる。

③ 地域に根づくこと

観光カリスマは、当然ながら地域に住んでいる人である。しかし、時として地域の人に、外部コンサルタントや学者への過信や押しつけが見え隠れすることがある。観光カリスマは、地域にしっかりと根を下ろして仕事をしていることが基本である。

④ ネットワークをつくれること

これからの観光地づくりは、ネットワーク型の組織づくりが重要である。ネットワーク型に相対するのは、ピラミッド型。観光カリスマは、頂点にいて指示するのではなく、地域のまとめ役として、

個と連携し、常に全体を見ながら動いている。

⑤ 多様な人材と交流をする

観光カリスマは、地域の内外に実に様々な人材のネットワークを持っている。多くの観光カリスマは、観光カリスマ制度ができる前から、互いに見知っている人も多い。観光カリスマは、その幅広い人脈で得た人材を問答無用にこき使う。しかし、使われた人はそのことに満足しているから不思議である。カリスマの情熱がそうさせるのである。

⑥ 地域内流通システムに関心を持つ

観光カリスマは、常に地域の流通について考えている。観光振興は、地域産業の集積から成り立つものであり、他産業との連携は不可欠である。したがって、多くの産業に観光への理解を深め、新たな経営対象として観光産業への取り組みを促していくことが重要となろう。もちろん、新たなマーケットに対応するため、小さくとも地域にふさわしい産業の起業も忘れてはならない。

⑦ 真似をしない

観光カリスマの強さは、その独自性にある。これからの観光振興には、地域の生活が生み出した地域文化をさらに磨き上げ、独自性を出していくことが必要である。情報収集は、知識を収集し知恵の糧にするもので、真似をするためのものではない。真似では、決して観光によるブランドづくりはできない。

⑧ 先を考える

観光カリスマは、今の事業を推進しながら、常に次の事業の素材を見出そうとしているから、次から次へと発展的に事業を考えられる。したたかに先を見ながら人を巻き込めるのも、カリスマたる所以である。観光カリスマは、時の人ではない。観光カリスマとは、その人の歩みの中での様々な経験と、これからの果てなき想いに裏打ちされたまちづくり人生に与えられた称号なのである。

4. まとめ

観光カリスマの選定は終了し、現在は観光カリスマ塾など、その知恵と経験に学ぶ機会が提供されている。「観光振興を図るには、地域のオリジナリティが不可欠であり、そのためには観光カリスマの活動を形だけ模倣するのではなく、「考え方」を理解することが重要です。(国土交通省 HP)」とあるように、事業の真似ではなく、自分の地域ならではの活動が求められる。

観光カリスマの経歴や実績を見ると、「よし、自分もやってやろう」と思う人と、「とても無理」という人がいると思う。しかし、どちらの人にも大小あれど、地域創生を担う力が備わっているのではないか。リーダーを目指す人には、まだ行動はなくても、地域をよくしたいという気持ちのある人々をうまく活かし、役割を与えてほしい。

ベネッセの島おこしで、世界から人が訪れる直島にも、島民の生活があり、人柄が息づいている。ソフトクリーム屋のおばあさんは、お客さんの若い女の子と「ようきてくれたなあ」と会話している。それはおそらく楽しい記憶の一部になることだろう。

岡山にも、後樂園だけではなく、蛍や里山、果樹園、オリエント美術館や国吉康夫作品の寄託を受ける県美術館、夢二、林原の恐竜、吉備文化など、ここにしかない地域づくりの鍵があり、発見されていない、これから育てる魅力もあると思う。さまざまな素材を活かし、それらに加えて、人との気持ちのいい触れ合いができる、思い出の残せるまちになってほしいと思う。そして、私も、そこに小さな力を足すことができればと願っている。

参 考 国 土 交 通 省 HP

ホームステイを成功させるための英語教材作り

岡本 江美／木村 明美

1. はじめに

最近、外国人を街で見かけることが多くなりました。そして、私の住んでいる地域でも大学が近いせいか、外国人留学生の姿をよくみかけます。その姿を見るにつけ、その一人一人を誰がケアしてあげているのか、又、彼らはホストファミリーと、ちゃんとコミュニケーションがとれているのかなどとても気になります。

1983年に「21世紀初頭には当時のフランス並みの留学生受け入れを行う」という目的を掲げたいわゆる「留学生受け入れ10万人計画」が始まってから、早、24年余たちます。今の現状はどうなっているのでしょうか。

2. 留学生受け入れの現状

(表1) 国費、私費、外国政府派遣別在籍状況

	国費留学生	私費留学生	外国政府派遣留学生	合計
2002年	9009	85024	1517	95550
2003年	9746	98135	1627	109508
2004年	9804	105592	1906	117302
2005年	9891	110018	1903	121812

独立行政法人日本学生支援機構「留学生受け入れの概況（平成17年度版）」より作成

2003年度には留学生は10万人を超え、さらに増加しているのが、現状です。これは、本当に喜ばしいことなのですが、逆にこれは必然的に私たちと、留学生一人一人との関わりが増えるということです。

「娘の学校に留学生が来るんだけど、ホストファミリーになると申し出ようかしら。」とか「塾でお世話になっているネイティブの先生をどこか観光にご案内したいのだけど。」という声をよく耳にします。英語が堪能で留学経験があるご家族なら、何のためらいもないのですが、あまり英会話に自信のないご家庭だと、コミュニケーションをとりたいたいと思ってもあんまり話せずに伝えるべきことさえも伝えられないまま、沈黙、そして黙認してしまうことも多いようです。そこで、本当に役に立つ英会話教材を作ろうと、企画することにしました。

3. 誰にどんなことを教えたいのか

まず、教材の具体的な像を考えることを話し合いました。そして、誰にどんなことを教えたいのか具体的に考えることにしました。

誰に⇒外国人留学生を受け入れるホストファミリーに

どんなことを⇒外国人に伝えたい日本の習慣や守るべき生活の規則

4. どのような英語教材が必要なのか

今、巷には、たくさんの英会話教材があふれ、外国人のための観光ガイドなどたくさんのが出版されています。私自身も何冊も自宅にもってありますし、確かに参考にはなるのですが、実際、目の前にネイティブの人が現れたときには、そのような高度ないまわしや知識などすっかり頭から跳んでしまって、何も話せなくなる、という状況を幾度となく、体験しました。

そこで、一番必要な教材とはなんだろうかと考えてみることにしました。

教材設計マニュアルの著者である鈴木克明先生によれば、教材作りにおいて必要なことは「独学を支援する教材」を作ることだそうです。では、それはどんな教材なのか、鈴木先生の本を参考にして、具体的に教材をイメージしてみることはじめてみることにしました。

5. 教材の4条件

「独学を支援する」とは誰かが自分独りで、たとえば私たちの作ろうとする英語教材を相手にして自学学習できるようにすることを意味します。つまり、私たちが先生になって直接誰かに教えるときに使う補助資料をイメージするのではなく、教えたいことのすべてを教材に託して、私たちのいないところで自分で学ばせるガイドブックをイメージすることにしました。

鈴木先生によれば、教材を作るためには、まず次の4条件をクリアしなければならないそうです。

(表2) 教材の4条件

I	自分が良く知っている内容か？
II	教材作りの協力者が得られるか？
III	短時間で学習できるか？
IV	個別学習教材で、教材が「独り立ち」できるか？

この4条件に沿って、作る教材を考えてみました。

I 自分が良く知っている内容か？

ホストファミリーとなった自らの経験を参考に、実際使った、具体的な日常の会話を書きとめる。

担当 (木村)

又、実際、外国へホームステイした経験を参考に、そこで行われた会話を思い出し、再現してみる。

担当 (岡本)

II 教材作りの協力者が得られるか？

(協力者とは、教材が完成した時に、それを使って私たちが教えたいと思っていることを実際学ぶ必要がある人のことです。つまり、その教材が使いやすいものかどうか、試してくれるひとのことです。)

実際今仕事で教えている、生徒の皆さんに使ってもらい、試してもらおう。

連塾のメンバー (英会話初心者に限定) に実際使ってもらい、わかりやすさをチェックしてもらおう。

III 短時間で学習できるか？

(短時間とは一回完結で1時間以内のことです。教えたいすべてのことを教材に詰め込むのではなく、独学で1時間程度を費やせば身につけられる内容を考えることにします。)

使う地域を限定する。(岡山に住んでいる人にターゲットを絞る)

知識の多さよりも、一日の生活の流れをイメージし、日常会話の流れを重視する。

IV 個別学習教材で、教材が「独り立ち」できるか？

(独学を支援する教材を考えるときの最大の難関は、「独学」という点にあります。つまり、作成者が手や口をまったく出さずに、学習者が一人で教材を見ながら学習を進めることができるようなものになるかどうか、重要な点になります。)

短いスキット形式で作成し、記憶しやすい会話にする。

ネイティブの人にスキットを読んでもらい、CDに吹き込みを行い、独りでも学習できるようにする。

以上のようなことを話し合い、教材を必要とする人をイメージしながら、スキット作りにとりかかりました。

6. 終わりに

ホストファミリーとなる体験した人、ホームステイを体験した外国人のほぼ9割がホームステイは異文化を理解し、友好関係を築くのに役立つよい経験であったと語っています。(聞き取り調査による)

しかし、そのためには双方にお互いを理解しようとする意識、コミュニケーションをはかろうとする積極性がかかせません。今回の教材づくりは実際に日本語がわからない外国人のホストファミリーとなったときの経験をもとに、ホームステイでのコミュニケーションが円滑に行われ、ホストファミリーの体験が有意義になり、また岡山から世界に向けて、local から global への発信材料になるようにとの願いをこめて作成いたしました。作成に当たり現在ホームステイ中の Maricel さんに監修のご協力いただきました。

地域創生実践の第一歩

衣笠 宏

1. はじめに

1990年より日本は地価が下がると共に、治安悪化、学力悪化、国の借金増加、地域力悪化の傾向である。日本の家族、国、社会、地方、教育が大きな曲がり角に差し掛かり、時代は地域創生実践を必要としている。そのため、地域創生の為には、熱意、日々の勉学、時間、地域住民の支援、ネットワーク情報、資金力、政治力、家族の協力等が継続して必要になる。今、地域創生は実践が特に大切である。連塾の勉強は、単に学問の為の地域創生であってはならない。「連」の概念は抽象的理論より実践を重要視した理論のほうが、社会的価値が在る。又地域創生の企画、実践、継続するサイクルが、社会的意義がある。そして、どのような主体が、どのように地域創生の取組みを進めていくのかの観点から、地域創生を一考察したい。

2. 地域創生で大切なこと3点

連塾で地域創生を2年間学びそして実践し、地域創生を実践する際に次の3点が大切であると考えている。

1点目は、「連」である。松畑塾長が常に主張されている連携である。一人一人が出来ることを、少しづつでも連携していけば、世の中を動かし変えていける。「連」は実践面を重視した概念であり「大河の1滴」に通じる思想である。しかし、思想が良くても自分だけで、世の中は動かさない。この世に生存している限り我々は一人では生きてゆけないし、歴史上一人で世の中を変えた人などいない。又我々が目指す地域創生などできるものではない。しかし、連携は大切と考えていても、実践では困難な場合が多い。組織、時間と活動資金との問題点が完全に見え出して、動こうとする場合が多いからである。街づくり関係者で、組織、時間と資金を十分持って実践している人は少ない。又個々に主義、主張が少しづつ違ったり、実践を行って成果がすぐに見えないケースが多く、継続して連携しにくい場合が多い。しかし、その実践において社会的意義があれば、自ずと道は開かれる。より今、理論も大切であるが、実践が特に重要である。例えば、17年7月に訪問した笠岡の真鍋島の島作りでは3名の女性が協力し皆のリーダーになり、島全体で特産づくり、島弁当を製造し、笠岡らしさの地域情報を全国に発信している。(1名でなく熱心な3名を中心に連帯で島作りをしているというのが大事である)

2点目は、「出来る所から1歩ずつ、頑張りすぎず、諦めず」である。思想も大切であるが、今日本はあらゆる面で危機であり、今すぐ出来る所から実践しなければならない。例えば50名の塾生が出来ることから少しでも実践できれば大きな力となる。できることから実践しよう。しかし、頑張りすぎは駄目である。そこで行動、思想、実践を止めるからである。諦めず行動しなければ、社会的意義のある実践に結びつかない。

3点目は、地域からの全国情報発信である。世の中を動かす為には、日本全国に我々の思想と実践を発信しなければならない。そのことが、我々の志と共鳴できる地域のNPO活動家との連携に発展してくる。私が事務局している駅西地域街づくり協議会は、全国都市再生モデル調査実施団体と連携して行く為、2006年都市再生本部が中心の情報ネットワークに加盟した。日本の各地で街づくり活動が行われている情報がメールで着信してくる。全国で様々な活動が行われている。今後、駅西地域街づくり協議会、旧山陽道歩く会の情報を全国発信したい。2007年5月20日第三回旧山陽道歩く会(JR清音駅～矢掛本陣)はJR西日本と岡山県の観光キャンペーンに入れていただき、全国に報道していただく予定だ。又2007年11月2～6日に岡山で全国生涯フェスティバルが開催される。11月4日に旧山陽道歩く会で、ももたろうウオーク(鬼ノ城コース)を実施する予定で企画を行っている。地域密着の「岡山らしさ」のももたろうウオークを全国発信したい。

3. 地域創生の課題

1点目は、日本の家族崩壊である。留学生の「日本は病んでいる」との言葉が何時も頭の片隅にある。

親が子供を殺したり、子供が親を殺したり、又子供が友達を殺したり、毎日小説より怖い事件の報道が伝わってくる。離婚件数約30万件、離婚率2.8%で10年間増加傾向である。又親との同居は少数派であり、児童虐待約12000件。家族機能が個人機能に移行し、家族の解体化、家事の外部化が進みファーストフード、コンビニが増加傾向である。例えば、親が子供の弁当を作る機会は少なくなっている。

2点目は、米国化と日本文化の衰退である。戦後日本の家族は大家族から核家族になって行った。

その為家族間が冷めた関係が多くなり、それに比例し、日本文化は衰退して行き米国化が進んだ。食物は日本食から洋食が増加した。日本文化の原点は米作、米食、農耕民族であり、狩猟民族の米国化は日本文化の衰退と正比例となった。別の視点で考えれば、共存共栄社会から弱肉強食社会へ移行していった。政治制度、経済制度、会計制度、不動産制度は米国化の傾向である。米国化の思想は、アメリカが全て世界で1番の思想だ。この思想は、日本の国益に反するし、日本人のDNAには合っていない。

その為、日本人の精神構造がパンクする。

3点目は、東京の文化思想が独自の地方文化の良さを殺している。明治時代より地方は全てミニ東京化され中央集権化されている。人、物、金、情報が国際都市東京に集中し、地方との格差が拡大している。経済の観点から考えた場合、東京の大手企業が、地方の小企業を支配抹殺する傾向である。日本のバランスの取れた地域を考えた場合、国際都市東京と地方地域と分けて政治、経済、文化を進めていった方が効率がよいし、無理がない。

4点目は、日本国の制度で現実には地域創生の主体は官僚であって、地域住民ではない事である。よって、地域創生が広く地域住民が出来にくい。街づくりの資金、行政権限は全て官僚が握っている。しかし、法律上は地域の主体は住民である。そこに日本国の制度の振れ現象が起きて、陳腐化している。我々塾生は、これらの課題に対して連携し、日本国の文化そして、中核の家族の絆を強くする活動と、地域住民の為の地域づくり、文化づくりを実践し、日本国制度に風穴を開け、地方に居ても生活を楽しめる環境にしなければならない。

4. 実践地域づくり

第一に、実践地域づくりでは、「らしさ」が重要である。岡山であれば、岡山らしさである。岡山は、瀬戸内海と中国山地に囲まれ、3大河川があり、雨の日が少ないにも係わらず水不足はなく、自然に恵まれた果物、農業県である。連塾では、中国学園と連携して岡山産の無農薬野菜、地鶏、雉を入れた「岡山らしい」食べ物「もたろうなべ」を作ってみた。新聞報道され、試食された方に好評である。従来のミニ東京の延長の発想では、特徴がないし、発展性もないし、地方文化、食が育たない。その為には岡山の歴史、文化、自然、食、産業、農業を再認識し、自分の目、足、体で確認し「岡山らしい」食物を増やし、歴史、文化を広げることが大切である。例えば、岡山の歴史で「吉備国」のことは意外と我々が知らない事が多い。大和国に比べ記録書が少ないのが原因だといわれている。その為、2007年1月に松畑塾長が「吉備学会」を立ち上げられた。「岡山らしい」吉備国研究である。会員にさせて頂いたが、今後の研究、実践に期待したいし、旧山陽道を通じて私自身研鑽したい。

第二は、旧山陽道歩く会である。私は1年前より事務局をさせて頂いているが、旧山陽道の歴史探索ウォークと禪ウォークが特徴であり、「歩こう 連(つな)ごう 旧山陽道」がキャッチフレーズである。2006年5月14日に岡山市奉還町～吉備津神社のウォーク、10月29日に吉備津神社～JR清音のウォークを実施した。各地の町おこしの方々の手厚いもてなしを受け、180名～550名の参加者も満足されたと思う。私は、このウォークの中に次のメッセージを参加者に大切にして頂き、理解、そして再確認してほしい。人と人との連(つな)がり、人と歴史との連(つな)がり、人と自然との連(つな)がりの3つの連である。

人と人との連がりであるが、人の連がりが崩壊しだし、家族が内部分裂しだした。それに正比例して、地域力が低下しだした。本来、人は家族がまとまり、集落ができ、町ができ、国が出来ている。家族崩壊は、国の崩壊につながる。歩く会は人と人との連がりを特に重視している。各地の方にボランティアをして頂き、吉備津神社では三味線餅つき、備中国分寺では暖かい豚汁、手と手とつなご

う音楽コンサート、清音ではお汁粉と、歩き会の参加者はご馳走になり、奉還町から清音の各地の人の温かさを感じた。参加者の中に自閉症の若者に2回参加して頂いた。彼は、歩きながら知らない参加者と話をしだして、話が出来ようになり第3回目旧山陽道歩く会を楽しみにしている。彼と参加者、そして自然、そして江戸時代の旧山陽道の歴史道が彼の心を開かせていったのだと思う。ウォークは人間の体、心によい。

次に、人と歴史の連がりである。我々は、意外と地元の歴史は知らない。奉還町商店街が旧山陽道であった事は、地域住民でさえ40%しか知らない。明治になって武士が奉還金で商売を旧山陽道沿いにしだしたのが、奉還町商店街の始まりである。その地域の歴史を知るとは、郷土愛につながり、そのことが町おこしのエネルギーとなる。江戸時代の旧山陽道沿線は名跡、旧跡が多く、歴史が散りばめられている。古代より地域発展と道は深くつながっている。

次に、人と自然との連がりである。日本人は、森の民であり、農耕民族である。自然と共に生活し、鎮守の森を大切にし、山を開墾し、田を作り農業を営んでいった。自然の神に米の豊作を祈り感謝し各地の祭りができた。江戸時代の人は旅行では1日に4里(16km)以上歩くのだから江戸時代は意外と治安が良かったのではないか。この様なことを考えながら旧山陽道があるいて頂きたい。新しい発見ができると思う。今後襷をつないで又孫と手をつないで広島神辺まで行ってみたい。又将来国土交通省の公認の夢街道に旧山陽道をする運動を各地で興してゆきたい。

第三に、田原の百楽塾であるが、景山岡山大学農学部名誉教授が塾長をされている。景山塾長は岡山大学退職後農業をする目的で田原の土地を購入された。岡山産の木材を利用、雨水を地下タンクに蓄積等建物は凝っている。塾は草木無農薬野菜の伝授、耕作放棄田の再利用を行い、農村再生し、楽しく農業を行うのが目的である。平成18年7月より入塾し、耕作放棄田等を畑にし、無農薬野菜を数名で作っている。耕作放棄田の土手の草を刈り堆肥を作ることから始めた。18年5月には20名で田植え、10月に手で稲刈り、12月に芋会で昼食。雨が降れば休み、晴れば農作業。自然の中で、汗をかくことは、楽しい。

私はこの塾でロシアのダジャーである家庭農園が出来よう学んでいる。ある方は、そんな私に農業はそんなに楽しいものでない、簡単に出来るものでない、と忠告される。現実はそのようですが、私は今の日本農業は問題が多すぎると考えている。既得権を守る農地法、低すぎる自給率(40%以下)、耕作放棄田の増加、補助金付け農業、意外と多い農薬使用等、景山塾長の言葉「日本は世界で最も農業が適している国である」が何時も頭にある。又今、自分たちの体、食、健康を守ってくれるのは国ではなく自分たちである。私の出来る所から農業を学び、実践をする価値は十分ある。

第四に、駅西地域街づくり協議会である。

平成15年9月駅西地域の都市計画変更において、同志を募り、平成16年2月駅西地域街づくり協議会を5名の世話人で立ち上げ、駅西地域の都市計画の変更を実施した。平成17年10月には奉還町3丁目の空交番を利用して災害に強い街づくりの為、奉還町街づくり防犯防災センターを立ち上げ、山陽新聞 NHK OHK で報道された。平成18年3月に全国都市再生モデル調査で「奉還町いきいきプラン」を作成し発表する。18年10月岡山城ロータリーの「キャッスル賞」を受賞する。11月奉還町商店街は経済省から「がんばる商店街77」に選ばれる。

5. 地球温暖化と災害－奉還町街づくり防犯防災センター

住明正東大教授によれば、地球の温暖化が進めば、日本は夏の猛暑が厳しく梅雨が長引き集中豪雨や超大型台風が増加すると予想されている。又日本は亜熱帯気候に東北までなったという学者もいる。今の社会インフラでは、集中豪雨、大型台風での災害を防ぎ切れない恐れも出はじめた。

平成16年に発生した災害の中で主な風災害で死亡した者は219名で、その内7割以上が65歳以上の災害弱者であった。10年前の阪神、淡路で、倒壊した家屋に閉じ込められて助かった人の内消防警察自衛隊に救助された人は2%以下で、家族の救出された人は32%、近所や居合わせた人に救助された人は28%であった。これを踏まえ岡山市駅西地域を考えてみた。人口約3800名(昭和54年の半分)65歳以上31%(岡山市平均18%)30年以上の建物58%(岡山市平均23%)道路幅4m未満が地域の中心部に多い。以上のことから検討すると、岡山市の中でも災害リスクが高くなった地域と言え

る。そのため地域安全安心ステーションとして旧交番を奉還町防犯防災センターとして開所した意義は大きい。AED、消火器、無線機、リヤカー、発電機、電池、救急箱等を揃えた。又奉還町商店街通りの5町内会に自主防災会を作って頂いた。今後は消防、警察、および各種の組織と連動して地域の災害リスクを下げていきたい。又駅西地域の社会インフラの整備も重要になってきた。古い建物が多く、道幅が狭い地域の大火事への備えが特に大切である。大火事が発生すれば大災害になり、歴史ある奉還町商店街がなくなる可能性さえある。10年前の阪神大震災を例にみると、大災害を受けた地域には災害後10年経過しても70%の住人しか戻っていない。駅西地域にとって、社会的インフラ整備が特に必要であると考ええる。

6. キャッシュフローと活動資金

社会的意義のある事業でも、継続性が認識されていないものは、社会的使命も短命で終わる。継続する場合、特に資金が回って行く事が、大切である。その為には、理念そして実行する為の計画、実行、精査のマネジメントとキャッシュフロー管理が必要である。平成18年7月4日都市再生都市本部にて、下記のことが決定された。街づくりの担い手のネットワーク化、地域の担い手の連携、助成・支援団体等との交流の場の創設の実現である。今後、都市再生本部とのネットワークを太くし、活動資金は今までは行政の補助金が多かったが、支援企業、助成団体にも支援して頂ける様広げる必要がある。又地域の小さなNPOが集まって「コミュニティ・シェアーズ」で地域企業や市民から活動資金を支援してもらう手法が注目されている。多くの地元企業に出資意向を調査し、興味を示した企業に対してNPOの活動をプレゼンテーションする機会を設け、地域活動家と資金の出し手となる企業のマッチングを図っていく方法である。今後「コミュニティ・シェアーズ」を研究し対応して行きたい。アメリカの寄付市場は24兆円、日本は7200億円で30倍の開きがある。

7. おわりに

塾長のまちづくりは、人づくりと言われたことが、何時も頭の片隅に残っている。私は「出来ることから一歩ずつ、頑張りすぎず、諦めず」を基本方針で街づくりを今後して行きたい。駅西地域街づくり、旧山陽道歩く会の活動が、地域各種団体、行政、大学と連なり力強い活動に生まれ変わり、市町村国を動かし、人間らしく協働できる吉備の国になれば、私にとって「BEST SERVICE」である。

わが内なる地域創生

- 美しい国づくりは、地域から -

近藤 治

I はじめに

連塾第1期生として、平成17年4月に入塾して以来、約2年が経とうとしている。昨年2月には、平成17年度の研究のまとめとして、「地域創生についての理論的一考察—近代的パラダイムの転換を目指して—」と題する論文をまとめた。

基礎コースから実践コースに移った今年度の末には連塾を修了することから、本論では、地域創生を「地域住民が地域固有の豊かな文化や歴史、自然、景観等を受け継ぎながら、個人の幸福と社会全体の利益が調和し発展する社会を目指す営み」と定義し、IIでは、私の考える美しい国づくりに向けた地域創生論を、IIIでは、今後自分が、何をどう実践していくかを、決意表明も込めて論じてみたい。

II 私の地域創生論

1 地域創生の背景

(1) 鎖国システムから近代世界システムへ

産業革命後の英国を中心とした資本主義体制「近代世界システム」は、世界規模でのフロンティアの存在を前提とした富国強兵路線を伴っていた。一方、当時の日本は陸地自給圏であり、独自の鎖国システムのもと、小さな国土の中ですべてを自給していた。明治以降、日本は近代国家化を目指し、自ら近代世界システムの中に入り、富国強兵路線を選択したが、「強兵」路線は、第2次世界大戦で挫折し、輸出市場を広げる「富国」路線は、諸外国との深刻な経済摩擦により行き詰まった。また、地球上のフロンティアを前提にして更なる資源を探し求めるという世界資本主義の在り方は、地域紛争をもたらすとともに、地下資源の枯渇や生態系の破壊という地球の有限性の壁に阻まれている。(川勝, 1995)

(2) 地域共同体の崩壊、生態系の破壊、人間精神と地域文化の喪失

M・ウェーバーは、近代の本質を「合理化」が貫徹する時代と捉えた。近代国家の道を歩み始めた明治以降、日本人は合理的思考を身に付け、それまでの時代とは比較にならない「自由」を得るとともに、工業化による貧困からの解放や議会制による民主的な社会を得た。しかし、その代償として、日本各地の地域共同体が崩壊の危機にある。

地域共同体の崩壊は、無意識的に人々を不安に陥れる。人々はその不安から目をそらすために、快適、便利、安逸な生活を求めて、ますますホモ・エコノミクス（経済人）となっていく。これがまた、物的に豊かになることと人間の幸福とを同一視する経済至上主義のイデオロギーを強め、その結果、生態系の犠牲のもとで、一層の工業化、市場主義経済が進展していく。もともと日本各地の地域共同体と四季の自然の織りなす景観と暮らしが、長い年月をかけて、多様性に満ちた豊かな地域文化を形づくってきたが、地域共同体と生態系双方が衰退もしくは破壊されることにより、それらの上に築かれた日本人の精神文化と地域文化の喪失が同時に進行している。(田村, 2001)

2 今後求められる方向性

(1) 地方分権化の推進

経済至上主義のイデオロギーは、伝統的な地域共同体の崩壊とともに、社会の普遍意志（公共善）にも影を落としている。

個人が自由な意志に基づきながらも、常に社会の普遍意志を考慮し行動することが、本来の「自由」の在り方である。個人は、家族、地域共同体、それに国家という共同体とは無関係に、独自の価値観や人間としての判断力を身に付けることはできない。個人が個人であるためには、社会の普遍意志に従い行動し、常に自分自身と社会の在り方を問い続ける必要がある。つまり「私」はまた同時に「公」的な存在でもある。(佐伯, 2003)

日常の中で社会の普遍意志を意識するためにも、また、支配者と被支配者の同一性の維持という本

来の民主主義を守るためにも、地域を構成するわれわれ自身が、社会の普遍意志を常に意識しながら、自分の利害を行政等の他人任せにせず、これに関心を持って自ら自治に参画する社会、参画していると実感できる社会（ステークホルダー社会）をつくる主体となることが求められる。

(2) 幸福や豊かさに対するパラダイムの転換

近代化に伴う経済至上主義のイデオロギーを克服するためには、幸福や豊かさに対するパラダイムを転換する必要がある。換言すれば、従来の「幸福＝物的充足度」という物差しを乗り越え、より快適で美しいものを尊ぶ価値観に転換することが求められている。

J・ラスキンは、社会の富を「価値ある物」と定義し、「価値」には2つの属性があるとす。一つは本有的価値であり、もう一つは実効的価値、つまり、物が人間にとって有用になったときの価値である。この物を有用にする能力を、ラスキンは「受容能力」と呼んでいる。(池上, 1991)

「受容能力」は、教育や教養、さらに自らの努力によって鍛えることができるものであり、物の価値を決めるのは、それを用いる人間の能力であるという点が、ラスキン独自の価値理念である。

富の価値が人間の能力に関係(依存)するという見解は、A・センのケイパビリティ論にも見られる。センは、人間社会の経済的厚生がGNPで一律に計量されることに疑問を持ち、人間が物を利用することによって何になりうるか、何がなしうるかという可能性が、経済的厚生基準であるべきだと主張する。センは、人間が物を利用して自由を獲得できる能力をケイパビリティと呼んでいる。(セン, 1988)

「豊かさ」とは単に物の量で表されるものでなく、その物を有用にする(生かす)人間の能力にかかっている。そこに、量から質へ、豊かさから美しさへと価値の転換を目指すわれわれにとって、これからの教育の在り方や可能性を見いだすことができる。

(3) 多様な地方文化の独自性を生かしたまちづくり

江戸時代の日本は、260余りの国(藩)が地方自治のもとで創意工夫を凝らしながら棲み分けており、また、小さい島国で自給していたので、物を大切にしないといけないという「自足」の理念や環境サイクルが大切にされていた。(川勝, 1995)日本が近代国家に踏み出した際捨ててしまったこの鎖国システムは、21世紀の今まに見直されなければならない。

地域の持つ多様な文化性を高めるためには、まず、それぞれの地域の自己認識が必要となる。それは、柳田民俗学の言う日本人の「自己内省」と称されるものであろう。経済のグローバル化や東京一極集中が進行する中、それぞれの地域が、自らの歴史、民俗、祭祀などの伝承文化を掘り起こし、吟味し、再評価すること、換言すれば、われわれの住む地域あるいは岡山の「誇り」とは何か、アイデンティティとは何かをしっかりと認識した上で、それぞれの独自性を生かしたまちづくりを進めることが求められる。

III 私の地域創生実践—いのちのバトンを受け継ぎ次代につなぐ—

1 地域のバトンを受け取る

(1) 地域の歴史・民俗・伝承等の聞き書き・発掘(オーラルヒストリー)

昨年8月末、岡山市中心部から、生まれ育った西大寺金田に居を移した。そこは、岡山市の東部を流れる吉井川が児島湾に注ぎ込む新田地—延宝2年(1674年)に開発された金岡新田—である。父が定年退職後、公民館活動として、金岡新田の歴史や風俗、伝承を記録誌に残すプロジェクトに加わり、平成4年4月に『ふるさと金田』が完成した。(金田ふるさと調査研究会編集、岡山市立上南公民館発行)

330年以上の変遷を経た田園が広がる地域共同体の中で、両親、家族と生活を共にしながら、今後、両親や地域の人々から地域の歴史等を聞き、記録として残していきたいと考えている。そして、『ふるさと金田』の編纂にかかわった父と同じように、先祖からのいのちと歴史、そして文化のバトンを受け取り、次代に伝えていきたいと考えている。

(2) 地域の自然(生態系)の保護・育成

平成21年の春には、地元西大寺地区をメイン会場に、都市緑化に関する意識の高揚と知識の普及等を図ることを目的とする第26回全国都市緑化おかやまフェアが開催される。岡山の自然、人、物の交流をはじめとする岡山らしさあふれる様々なまちづくりの取組を全国に発信するこのフェアに、ボラ

ンティア、スタッフ等として参画するとともに、東京のような「経済中心の国土軸」ではなく、大地にしっかりと根を下ろした花と緑の豊かな美しい地域として、西大寺から「花と緑の国土軸」の可能性を、全国にアピールしていきたいと考えている。

2 地域の新しいバトンを作り出す

地域では、寄り合いや祭りに参加する担い手が絶対的に不足している。いわゆる働き盛りと言われるわれわれの世代が、一人でも多く故郷回帰することにより、一番身近な自治組織である地域が再生していくことを信じたい。

私の住む地域には、おしめまい（先祖祭）や百萬遍などの伝統行事が残っている。このような親世代から子世代に継承されてきた行事等を次世代に伝えていきたいと考えている。ただ、伝統は長い時間のうちに形骸化する傾向がある。私たちの世代が協力して、地域におけるエンパワーメントとネットワークを生かしながら、「旧伝統の新しい形態での復興」（市井,1977）の中心になり、地域における自治とボランティアな自助・共助関係（人のぬくもりの「連」なり）を維持・発展させていきたい。

3 次世代に地域のバトンをつなぐ

歯止めのない少子・高齢化が進展する中、私の住む地域でも、高齢化が進み、子どもの数が少なくなっている。次代の地域社会を支える心豊かな子どもたちを育てるため、学校、家庭、地域が相互に連携し、「地域の子どもは地域で育てる」気運を高め、地域ぐるみの子育てに取り組むことが求められている。地域の持つ教育力を結集し、異世代間の交流や、生活体験、社会体験や自然体験などの様々な体験活動の場や機会を提供するとともに、子どもたちが自主的に参加し、自由に安全に遊べ、安心して過ごすことのできる居場所を地域の中につくっていききたい。それは、大人自身の自分づくりや居場所づくりにもつながると考える。

IV 結語

美しい国づくりのためには、今までの日本が取り入れてきた外来の学問や文化からだけでなく、自国の中に学ぶこと、つまり、国を構成している一番身近な共同体である自分たちの住む地域のことをよく知る、そして自らの手で美しいものにするところから始めなければならない。

個人の自由（経済）と国家的規範（法、政治）だけでは、秩序は成り立たない。自由を原理とする経済と、正義（平等）を原理としてこれを規制する政治、これらを内面的に統一する基盤としての共同体がなければならない。権利（right）はもともと正しいという意味だが、人間にとってする権利があるということは正しいことだけだ。しかし、正しいことは人間にとってそうしなければならない義務でもある。このような相互律的な考え方に基づき行動することにより、初めて人間は、権利・自由と責任・義務との双対性を回復することができ、自分の社会（の秩序）を自分で守る意識と行動力を持った「市民」となり得る。

そのような市民からなる自律的な地域づくりから、美しい国づくりは始まると考える。それは、どのくらいの人たちをどれほど幸せにできるか、その徳こそが真の豊かさとなるような社会への転換と言えよう。

参考文献

- 川勝平太. (1995). 『富国徳論』. 紀伊國屋書店
- 田村正勝、野尻武敏、山崎正和、ハンス・H・ミュンクナー・鳥越皓之. (2001). 『現代社会とボランティア』. ミネルヴァ書房
- アマルティア・セン. (1988). 『福祉の経済学—財と潜在能力』（鈴木興太郎訳）. 岩波書店
- 佐伯啓思. (2003). 『成長経済の終焉—資本主義の限界と「豊かさ」の再定義』. ダイアモンド社
- 市井三郎・布川清司. (1977). 『伝統的革新思想論』. 平凡社
- 池上 惇. (1991). 『文化経済学のすすめ』. 丸善

地域創生学における「地域」把握の一方法

～タウン・ウォッチングからエリア・ウォッチングへ～

城之内 庸仁

1. 地域創生学における「地域」の考え方

はじめに従来の学問研究における『地域』概念を検討する。地理学辞典によると「地域 (region, area) は、一般に地表の広狭さまざまな部分を地域と称している。地表上、自然が類似する地域を自然地域と呼ぶように、地域を単なる任意の区域の広がりとしせず、個性的な内容を有する広がりとして理解されている」¹⁾。

また、社会学辞典は次のように規定している。「政治、経済、社会、文化等の諸過程、諸契機に基づいて相対的に自立した一定の空間的領域をさす。経済圏、交際圏、婚姻圏や地区などが具体例である。これらの場合、たんに空間的広がり (地域性) をさす場合が多い。この空間的広がりには社会的連帯 (共同性) が認められ、上記した諸機能が相互に重なり相対的統一性をもつ場合、言い換えれば一定の共通性をもつ部分社会となっているとき、それを地域社会 (コミュニティ) ということもできる。したがって地域とはたんに機能的な範囲をさすが、後者の場合それらが重層しかつ他の空間とは区別される共通の特質をもって存在する。

また、かなり広い地域が社会的、文化的に個性をもって現れる場合、こうした地域を地方 (リージョン: region) とよぶ。普通、リージョンはコミュニティより地域的 (空間的) 範囲は大きい。地域と地方自治体との関わりは、行政区画として地域的 (空間的) 範囲を明瞭にもつ自治体に対し、地域、地域社会等はそれらの範囲が重なることもあるし重ならないこともある。つまり、社会的交流の集積の場 (空間) としての地域や地域社会の範囲と行政区画とがずれることがある」²⁾。

中澤氏は、地域について以下のように言及している。「最近、地理学以外の分野、とくに財政学、社会学、歴史学などの分野でも『地域』という言葉が盛んに使われるようになってきた。しかし、地理学で『地域』という場合、土地の区域、区画された土地を意味するのに対し、他の分野ではほとんどこういったことは問題にされない。財政学や政治学では都道府県や市町村という行政上区分されたものが地域である。歴史学では『地方』という言葉とほとんど変わらない。また、社会学でいう『地域』とは町内会とか集落をさしていると思われる。これらの分野ではほとんど『土地』は問題にならない」³⁾。

このように、「地域」は様々な学問分野で、様々な意味を附与されて使われている。地理学では空間的な広がり (土地) が注目され、社会学ではそこでの社会的な営みに注目している。では、地域創生学においては、地域をどのように規定するのか。その一つの手がかりとして、本論文では、エリア・ウォッチングの手法を提案する。

2. 地域創生学における「地域」把握の一方法ーエリア・ウォッチング

(1) 従来の「地域」を把握する方法

地域を知る方法には様々な方法がある。主な方法として、「野外調査 (field work)」「巡検 (excursion)」「地域調査 (regional research)」「地域診断 (regional diagnosis)」などが挙げられる。

野外調査は、研究者が研究地域に出かけて、直接、研究資料を収集する調査のことであり、研究地域に出かけて正確な資料をいかに能率よく収集できるかが重要である。野外調査には、観察・観測および聞き取りが三要件である。

巡検は、指導者または案内者が中心となって現地へ赴き、地理的事象の観察・観測や現地住民からの聞き取りを学生などに習熟させるか、案内者を中心として現地討議を行う場合を指す。研究者自身らが、自己の研究のために行う野外調査とは、この点で区別される。

地域調査は、特定地域について野外で具体的な調査をすること。地域調査を野外調査と言い換えてもよいが、地理学においては、地域調査は上級概念であり地域調査の下に純粋な意味での野外調査が、

文献調査や室内調査と並んで含まれる。

地域診断は、医者が患者を診断するように、地域の健康を診断することが地域診断である。地域診断には、商工業の立地のコンサルトや自然環境の調査、総合的広域的な地域開発・都市計画を進めるに当たり要請される場合がある。

中澤氏は、野外調査について、「野外の実態調査にあたっては、はっきりした問題意識をもち、作業仮説をたてて行わなくてはならない。ただ、興味本意に漠然と行われるべきではない。そのためには、常日頃から書物や論文を読んで問題意識を深めておかななくてはならない。(中略) 調査にあたっては、徹底的にわかるまで調べるという態度が欠かせない。それだけに野外調査は、決して楽しい、甘いものではないことは十分に肝に命じておくべきである」⁴⁾と述べている。

(2) エリア・ウォッチングと地域創生学

これらの地域を知る方法は、学問研究を中心としたものであり、研究者が主に行うものである。これらの方法を、そのまま地域創生学に取り入れることはできない。というのは、第一に地域創生の主体はその地域の住民であり、その地域に関わっている全ての人であり、特定の人だけが利用可能な方法は適切ではないからである。誰でもがその方法を利用することができ、誰でもがその方法を利用することで地域をよりよく理解できなければならないからである。第二に、分析のためのデータ収集ではなく、地域での人々の意識・実践・関係の全体像を把握する方法でなければならないからである。人々の暮らしの全体像を把握する民俗学的な手法が求められる。

そこで、地域創生学において地域を規定(知る)ための方法の一つとして「エリア・ウォッチング」が有効と考えられる。

「タウン・ウォッチング」という言葉はどこかで耳にしたことがあるだろう。市民団体や子ども会などがレクリエーションの一環として行うことがある。「タウン・ウォッチング」は、「まち」を「みでみる(ウォッチング)」ことであり、換言すれば、「まち歩き」である。人が生活を営む場所には、大なり小なり「まち」が形成される。「まち」は「もっとも身近な環境」であり「もっとも身近な社会」といえる。そのためレクリエーションなどを通じて、身近な環境・社会を再発見する目的で実施されることがある。しかし、地域創生学の対象は必ずしも「まち」だけに限定できるものではない。いわゆる市街地だけを対象とするのではなく、全ての地域(エリア)が対象になりうる。また、地域創生を目指したものであり、レクリエーションの範疇で実施できるものでもない。その対象は、山村部であったり、海岸部であったりとありとあらゆる場所が対象となる。そこで、一般的には、「タウン・ウォッチング」という言葉に馴染みがあるが、「エリア・ウォッチング」は、その対象範囲の違いやレクリエーションで実施できるようなものではないという観点から「タウン・ウォッチング」とは区別される。この「エリア・ウォッチング」の概念は、本論文がはじめて世に送り出した概念であり、地域創生学において大きな貢献をもたらすものと思われる。

エリア・ウォッチングの手法について具体的に記述する。エリア・ウォッチングは、ただ「みる」だけでなく、五感を十分に活用して歩くことである。ウォッチングする「テーマ」を決めても「目的地」を決めてはならない。目的地を目指して歩くのではなく、自由気ままに歩くのである。勿論、ウォッチングするテーマを決めなくてもよい。自然にテーマがみつかったり、興味関心が定まったりする。これもエリア・ウォッチングの醍醐味である。

地域歩きの心得として、①のらネコ、のらイヌ風に歩く、②ルールやマナーを守る、③その地域を楽しむ・面白がる(「地域の施設で遊ぶ」ではない)、がある。①を補足説明すると、目的地を決め、より早く到着することに主眼を置くのではなく、好奇心を刺激するもの、面白そうなもの、美しい景色などに足を止めてゆっくりのんびりとウォッチングすることである。松畑氏は、「スピードを上げれば上げるほど、見失うものも増えるだろう。飛行機が極みだ。雲しか見えない。スピードを下げれば下げるほど、見つけるものが増えてくる。自転車よりも歩きが一番。健康までも、同時に見つけることができるんだから。」⁵⁾と述べているように、スピードは下げて歩くことがコツである。コースを定め、競争するかのように地域を巡るのではない。②は、基本中の基本である。地域をよりよく創生したいのに、これが守れないと地域創生どころではなくなってしまう。③においては、その地域そのも

のを楽しみ、面白がるということである。

「地域を創る」「地域を築く」ことは、まず「どんな地域か気づく」ことである。エリア・ウォッチングは、「地域」を「探検（たんけん）」することである。その「探検（たんけん）」は、「発見（はっけん）」につながり、今まで気づかなかったことに気づき、「ほっとけん」という状態（認識）につながっていく。このことが地域創生の重要なはじめの一歩ではないだろうか。今後の研究課題としては、エリア・ウォッチングの手法を用い、様々な地域で事例研究（case study）を行い、地域創生学における地域の規定を進めていきたい。

- 1) 日本地誌研究所編『地理学辞典』、二宮書店、1981年
- 2) 森岡清美、塩原勉、本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣、1993年
- 3) 中藤康俊編著『現代の地理学』大明堂、1990年、17～18ページ
- 4) 中藤康俊編著、前掲書、19～20ページ
- 5) 松畑熙一『英語教育人間学の展開－英語教育と国際理解教育の接点を求めて』開隆堂出版、2002年、151ページ。

学校と地域をつなぐ「安全ネットワーク構築」による 安全・安心のまちづくり

角田 みどり

1. はじめに

近年、子供を取り巻く環境は決して望ましい方向に進んではいない。下校中に何者かによって誘拐された子供が、捜索中に無惨な遺体となって発見されるという事件が、奈良市(2004年)、広島市に(2005年)相次いで起きた。朝、元気に笑顔で登校した子供が、冷たい亡骸となって帰宅すること程残酷なことはない。幼い子供がかげがえのない命を失う事態に対し、遺族だけでなく、その成長に関わった全ての人が、深い悲しみの淵に落とされる。

こうした時代背景のもと、全国各地で「地域の子供は地域で守ろう」と、「子供救援隊」や「子供見守り隊」など、地域が自主的に安全パトロール隊を結成し、地域ぐるみで子供の安全を確保していこうとする動きが活発となっている。私の勤務する岡山市立福浜小学校においても、学校と地域をつなぐ「地域安全ネットワーク」を構築し、「安全・安心のまちづくり」推進に向けて、積極的に取り組んでいる。その事例を、ここで紹介したい。

2. 不審者の出没

子供の安全が脅かされる時代を迎えた現在、実際に岡山市内でも、早朝、女子中学生が登校中、刃物を持った不審な男に切る付けられる事件も起きている。不審者と思われる人物を見かけたり、不審者から声をかけられたりした情報は、子供あるいはその保護者を通して教職員に伝えられる。学校現場で不審者情報をキャッチすると、直ちに警察や市教育委員会に通報し、対応することになる。また、学校独自の取組として、子供たちや近隣校園から入手した不審者情報を印刷物「見て 見て、聞いて 聞いて」にして全保護者に配布している。この情報紙は、情報入手後、その真偽を確かめながら、不審者が現れた「時刻」「場所」「不審者の特徴や言動」などを記し、保護者に配布することになっている。と、同時に地元の福富交番、南警察署にも連絡を取り、連携してその対応に当たっている。今年度になって、昨年(2014年)の4月以降、この不審者情報連絡はすでに40枚を越している。

警察からの情報によると、不審者や変質者の出没は、「季節の変わり目」の3月、9月頃が多く、特に、冬から春に向かう「木の芽立ち」の季節が最も多いと聞いている。また、時間帯にすると、登校中よりも下校中が多く、曜日は1週間の中日である水曜日が一番多いということである。不審者の年齢は幅広く、行動としては、単なる「声かけ事案」から「わいせつ行為」「つけ回し(ストーカー行為)」などがある。寄せられた不審者情報を細かく追跡調査をすると、近所の高齢者が子供可愛さに近寄り、声をかけただけで、子供が過剰な反応を示したために不審者と勘違いしたと分かり、ホッと胸をなで下ろす場合もあった。反面、登校時にいつも特定の同一人物と思われる不審者が現れ、警察にパトロールをお願いする事案もあった。危険を感じた保護者が自主的に立ち当番をして、子供の登校を見守ることもつながった。現在も不審者情報は数多く寄せられ、その度に「見て 見て、聞いて 聞いて」を発行している次第である。

3. 福浜っ子サポート隊の結成

本校では、昨年度に「福浜っ子サポート隊」を結成した。これは、地域に住む高齢者や自営業者、保護者が登録し、子供の下校時間に合わせて、肩から「福浜っ子サポート隊」のたすきをかけ、通学路の危険と思われる箇所立って、子供の安全を見守る活動を行う組織である。中には、1年生児童が下校する時刻に合わせて、毎日のように横断歩道で子供たちが安全に横断ができるように、見守り活動を続けてくださる方もおられる。また、昨春、孫が入学したとい



【福浜っ子サポート隊の活動】

うおじいちゃんは、孫が下校する頃を見計らって、定位置に立ち、サポート隊の仕事をしてくださっている。

4. 地域安全ネットワーク構築の働きかけ

子供たちの安全が脅かされる社会となった今日、子供たちだけでなく、幅広く地域住民の安全・安心を確保するために、それぞれの地域にある各種団体や組織を結束し、より強固な一つの「安全ネットワーク」を構築していくことが、岡山市全体の課題となってきた。そこで、この安全ネットワーク構築を、福浜小学校校区にある各種団体や組織に呼びかけた。

小学校区を一つの単位とするエリアには、それぞれに町内会が存在し、地域の自治組織としては一番の権威を持つ。その他に、婦人会、老人クラブ、社会福祉協議会、体育協会、民生委員会、消防団などが続く。それぞれの所属する人数に差はあるが、それぞれ定期的な会合を持ち、地域にある問題や課題を協議し、地域改善につないでいる団体ばかりである。

昨年9月、「安全・安心」を共通のテーマの一つの組織を立ち上げることを理解していただくために、まず連合町内会長への依頼から始まり、町内会の定例会に出席をし、資料をもとに本学区の現状や市全体の動き等を説明した。「そこまで大きな組織として広げる必要があるのか」「小学生の孫がいる人が中心となればよい」「時期尚早なのではないか」「子供会組織を見直す方が先なのでは」など厳しい意見が出る中、不審者情報の多さを訴え、「何が重大な事件が起きた時に、早急に対応できる組織づくりをしておくことが重要」と訴えた。

度々の働きかけにより、町内会長さん達が中心的な仕事を請け負わないことを前提に、ネットワーク構築に向けてのご理解をいただいた。町内会としては、時代の流行とも言える施策に振り回されるのは困るという懸念があり、華々しく組織を立ち上げ、それが持続可能なものとなるのか、見通しがつかないという危惧を持たれたようだった。しかし、この町内会の思いも理解できるものであり、地域の様々な取組は、地道に、しかも根気強く取り組む体制づくりが重要であり、いかに長続きさせるかが課題であると言える。

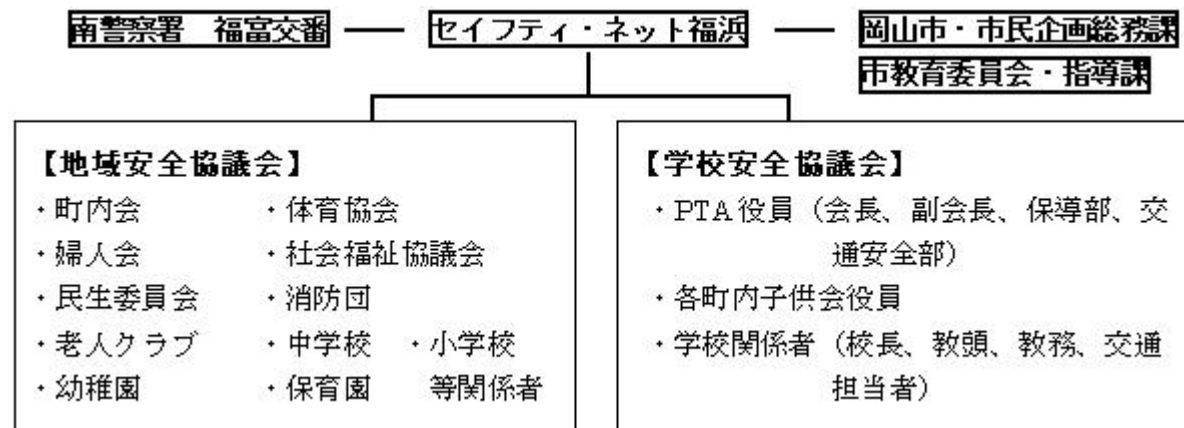
5. 「セイフティ・ネット福浜」の発足

町内会長のご理解とご了解をいただき、本格的に「地域安全ネットワーク構築」に向けて動きだした。組織を「地域安全協議会」と「学校安全協議会」と2つから構成し、それを束ねて「セイフティ・ネット福浜」と命名した。特に、「地域安全協議会」には、次の通り福浜小学校にある殆どの組織・団体の長を会員としている。また、「学校安全協議会」は、PTA や保護者、学校関係者を中心に組織されている。



【「セイフティ・ネット福浜」発足式】

1月25日(木)、本校の中庭において、関係者や低学年児童が参加して「セイフティ・ネット福浜」



の発足式を行った。セーフティ・ネット福浜会長より「安全宣言」に引き続き、児童代表より「安全の誓い」を行い、地域を挙げての「安全・安心のまちづくり」への気運を高めた。

式後は、平素子供たちの見守り隊として活動をしてくださっている「福浜っ子サポート隊」や「わんわんパトロール隊」の皆さんが、子供たちに連れ添って下校して下さった。

「安全宣言文」

安全宣言

私たち福兵小学校区「セーフティ・ネット福浜」は、福浜学区住民の安全で安心な生活ならびに幼児・児童・生徒の安全な登下校を確保するために、地域住民や学校関係者と協働して、安全で安心なまちづくりを推進することを、ここに宣言いたします。

平成19年1月25日
「セーフティ・ネット福浜」会長

「安全の誓い」

あんぜんのちかい

わたしたちは、こうつうじこにあわないようにあんぜんに気をつけてつうがくします。

また、じけんにまきこまれないように、じぶんのあんぜんはじぶんでまもれるようにがんばります。

平成19年1月25日
じどうたいひょう

6. 「地域安全ネットワーク会議」の開催

「セーフティ・ネット福浜」の活動の核になるものとして、「地域安全ネットワーク会議」の開催がある。この会議は、会員の出席のもと、地域住民の生活や子供たちの登下校の安全・安心確保のために、様々な活動を計画し、実践に向けての協議を行うことを目的として開催する。

これまでに3回のネットワーク会議を開催し、協議した内容としては次の通りである。

- ◆第1回（1月25日開催）—— セーフティ・ネット福浜の目的、構成
不審者メールの受配信（ぷらぼ）
- ◆第2回（2月27日開催）—— 「安全パトロール中」の表示（自転車かご）について
学区 SOS&安全マップについて
- ◆第3回（3月9日開催）—— 研修「不審者対応」
講師：奥村俊治警部補（岡山南警察署）

7. 「わんわんパトロール隊」の発足



岡山県警察署・鑑識課の取組の一つとして、「わんわんパトロール隊」がある。これは、愛犬家の地域住民が、一日一回愛犬を散歩させる時間帯を子供たちの下校時間に合わせ、散歩と見守りを同時にしようという一石二鳥の取組である。

本学区では、シェパード犬、マルチーズ犬など、4頭の犬の飼い主の方が、「わんわんパトロール隊」として登録されており、毎日の下校時間に合わせて、見守り活動を続けてくださっている。犬を連れた方々が子供たちに寄り添って歩いてくださることで、不審者の撃退につながるのでは

ないかと思う。更なる登録者の拡大を願っている。

8. 不審者メールの受配信

本校が入手した不審者情報を出来るだけ迅速に保護者に連絡するために、携帯電話あるいはパソコンを通して情報を受配信するシステムを導入した。特定非営利法人「ぷらぼ」に加入し、不審者情報を入手した後、「ぷらぼ」に通報すると、登録した保護者にメール配信を速やかに行ってくれるのであ

る。保護者全員に連絡文書を配布し、任意での登録を紹介した。学校全体の登録希望数は、低学年で63%、中学年で71%、高学年で51%で、低・中学年ほど、登録数が伸びている。やはり、幼女に対する犯罪が多いことも関係していると思われる。

9. 行政からの支援

岡山市が今年度、特に力点を置いた施策の一つに、この「安全・安心のまちづくり」推進が挙げられる。小学校を中心として、教育委員会の主管で取り組まれた「地域安全ネットワーク構築モデル校事業」(助成金20万円)と、町内会を中心として、市民企画総務課が取り組んだ「安全・安心ネットワーク構築支援事業」(助成金25万円)である。どちらも小学校区を一つの単位としており、どこが主体となるかの違いだけで目指すところが共通であることから、非常にさび分けしにくい酷似した施策であると言える。市議会において批判も相次いだことから、次年度より1本化して、市教委の取組は今年度限りの施策となった。

助成金の支援があることから、いずれかの事業指定を受けた小学校区では、安全のまちづくりを推進するための「登り旗」、安全パトロールのための「ジャンパー」、自転車かごに取り付ける「安全パトロール中」のステッカー、等々に活用し、地域々々での取り組みを充実させている。

10. おわりに

学校と地域をつなぐ「セイフティ・ネット福浜」の安全ネットワーク構築によって、安全で安心なまちづくりに向けて、地域住民の意識の高揚は前進したと思われる。しかし、重要なことは、打上花火で終わることなく、この安全に対する意識と意欲が継続され、持続可能な取り組みとして、地域住民に浸透し、定着していくことではないがと思う。何か大きな事件や事故が起こってからの事後対応でなく、常に機動性を発揮し、迅速に地域住民や子供たちの安全・安心を確保できる「セイフティ・ネット福浜」であり続けることが重要であると考えられる。

地域創生における子どもの教育について

新聞発表を例にして

高取 宏樹

1. はじめに

持続的な地域創生活動を行うに際し、優秀な人材の育成という課題が挙げられる。現在様々な地域において、青少年を地域創生活動に参画させる動きがある。しかし地域創生活動が成功し、発展していくためには、常に新しい企画力が要求される。その企画力というのは、長い時間と経験にて養われるものであって、すぐに身につくものではない。様々なものを体験し、吸収した状態からさらにそれを再構築し、相手に提示させる形になって初めて企画力となるのである。

以上のように企画力を養うためには、多くの体験を吸収し、相手に表現することが必要である。今回はその手法の一つとして、今回私が経営している学習塾（志高塾）で実施した合宿を題材にした新聞作成活動を例に、子どもの「体験から表現」の過程を紹介し、企画力の育成方法を紹介していく。

2. 今回の新聞作成に至った経緯

毎年志高塾では合宿を企画している。毎年ただ合宿して終わりではなく、何らかの教科に関連したテーマのもとに合宿を企画している。

年度	テーマ	教科	場所
2006年	広島から歴史と産業を見よう	社会	広島県(広島・呉・福山)
2005年	生きた英語を使って外国人とコミュニケーションを取ろう	英語	東京
2004年	地元の景色を見て絵を描こう	美術	八塔寺(備前市吉永町)

(2006年度志高塾合宿行程)

《1日目》

吉永発 → 福山自動車時計博物館 → 瀬戸内マリレビュー号(呉線) → 大和ミュージアム → 平和記念公園・原爆ドーム → 広島市内ホテル泊

《2日目》

マツダミュージアム → ちゅーピーパーク(中国新聞) → 宮島・厳島神社 → ひかりレールスター乗車(新幹線) → 吉永着

今年は上の表の通り、広島に行き、広島の産業と歴史を知るというものである。今回は見学する場所が多くなっているが、施設内で体験することができるという点も考慮した。さらに今回の合宿は、新聞作成やテレビ番組形式のVTR記録の作成といった、何らかの形にて合宿の記録を作成するというのも合宿の目的とした。すると丁度6月に下見をした際、見学コースの中にあつた中国新聞広島製作センター(ちゅーピーパーク)にて、「みんなの新聞コンクール」という小・中・高生を対象としたコンクールがあるのを知り、今回の合宿で新聞を作成し、それをコンクールに出そうという企画に至つた。

3. 新聞作成の流れ

A) 合宿までの活動

まず合宿前に子どもたちに予めどのようなことに対して知りたいのか、意見を出してもらつた。しかし、子どもだけでは十分な意見が出ないため、私の方でいくつか例を提示し、そこから意見を出し合つて決めた。今回中学3年生男子のグループは各見学する場所に関する課題を提示し、それを調べるという手法をとり、中学2年の女子のグループは広島のいい景色や風景をまとめるという内容になつ

た。

合宿中においては、子どもに新聞を作成するための取材の意識を持ってもらうように心がけた。中3男子の方へは、課題をプリントし、調べていくようにした。中2の女子に関しては、カメラ撮影や、気になる風景などの記録を指示した。また必要に応じて子どもにその都度アドバイスを行った。

また私自身が個別に指導はしていないが、ちゅーピーパークでは新聞ができるまでを係りの人から説明してもらった。そのため多少なりとも新聞の作成の方法を吸収できたのではと思う。

B) 合宿終了後から新聞作成

合宿終了後、今回新聞を作成するために収集した資料を整理し、合宿の体験などをまとめた。しかしどうしても内容的にまとまりきれない場合や、補足としてインターネットを活用していく過程において、テーマおよび内容の再構成を行った。そして記事にする内容の選定を行った。

内容が決まると、レイアウトの決定や原稿の執筆を行っていった。新聞の作成方法に関しては、中学校の社会科の教科書や国語の教科書にて触れているが、中国新聞のホームページに過去の優秀作品や新聞作成に対するアドバイスが出ていたのでそれを参考にしながら作成していった。

最後は極力見栄えのする作品に仕上げるために、色をつけ、見出しの文字・写真・図を工夫した。またそこでもレイアウトや色彩に関して気をつかった。

4. 新聞作成を通じての子どもの反応

私は、基本的な技術的指導を中心に行い、子ども達が考えたアイデアを積極的に取り入れるように心がけた。当初は子どもからの意見があまり出ず、私のほうから例示する場面が多かったが、新聞が出来上がっていくにつれて新聞作成上の意見がでるようになった。また中2女子、中3男子のどちらのグループも同時に作成していたので、お互いの作品の見せながら、競争意識や自分自身の作品の参考にしたりした。

今回の新聞作成を通じて、子ども一人一人の持ち味(例えば絵が得意であったら、絵のほうを担当したり、文章が書くのが得意な子は原稿のほうを担当したり)を生かした形で新聞が完成した。また真白紙の状態から、徐々に新聞が出来上がっていく過程に対して多くの子ども達が驚いていた。(新聞の編集後記でもその内容を書いている子が大半である)以上から新聞作りに対して興味を持ったように思える。また中には新聞に対する関心がわいた子もいた。

5. 今回の成果と課題

今回広島への合宿だけでなく、それを基にして新聞という形で記録を残したという点でも子どもにとって貴重な体験ができたと思う。また現在の入試傾向からも見て取れるように科目の枠を超えた知識の活用の実践という学習塾における活動の目的も満たされたと考える。

別の面では今回のコンクール出展が子どもたちの新聞作成に対する意欲増進に寄与しているように思われる。私も「出展するからには入賞させよう」とてこ入れを行った。今回中2女子のグループが岡山県知事賞(優秀賞)、中3男子のグループが入選した。この結果に子どもたちみんな大変喜び、中2女子のグループは「来年も出展したい」と意欲的で、時より次回のコンクールのテーマに関する意見も出たりもしている。

課題としては、関心の薄い状況においては、企画提案が乏しくなる点である。そのため今回は必要に応じてヒントを出す感じで方向性の提案を行った。企画提案に関しては、日ごろの関心が大きく影響してくるようになる。今後の塾での指導でも様々なものに対して関心を持つような指導方法を工夫しなければならないと考える。

6. 子どもたちの企画力の育成の手法

子どもたちの企画力に関しては、まずは多くの体験を積むことが必要である。多くの体験がなければ社会の視野が広がらず、多彩な企画力は生み出されない。次にそれらの体験を日頃の学習や日常活動に応用できるようしなければならない。例えば、買い物をした際に、金額を当てクイズ(これは算

数の概算計算の実践になる)を行うといった感じで、体験を学校で学んだ知識と融合させる工夫を大人たちが出していけばよい。またその子が趣味や関心と体験を結びつけた話を振っていき、子供関心の領域を拡大させていくのも有効な手段である。

さらに今回私は、本物に触れさせるということはかなり有効であるということを経験から学んだ。本物に触れることは関心やインパクトが強い。また今回は実際の新聞を見ながら、見出しやレイアウトの工夫の参考にした。本物に触れ、考察(「なぜ」という問いの答えを考える)することによって、自分の知識や技術に応用する力が生み出されるのではなかろうか。

この様に子どもの時から様々な本物志向の体験を行わせることが企画力を生み出す源のように考える。また私の塾の合宿をはじめ、指導方針の中にも本物志向の体験を組み入れた形を取り入れており、また今後も積極的に取り入れていきたい。

7. 新聞作りから地域創生活動への応用

新聞作りは地域の魅力の発掘や情報発信の手段として利用できる。魅力の発掘は取材によって得られるものである。そして新聞という形を通じて自分たちの考えていることを表現し発信することができる。

取材するためには、自分の地域に対してアンテナを張らなければならない。また同時に他の地域に対してもアンテナを張らなければならない。そのため取材は地域の魅力発掘の最前線に立つ役割を持っているのではなかろうか。また取材手法に関しては、自ら体験して記事を作成すると、記事の作成だけでなく、その体験から新しい視野が広がり企画力の養成にもつながってくるのではなかろうか。

さらに重要なものとして、新聞製作は人から情報を仕入れ、そしてそれを他の人へ発信するという、人と人のコミュニケーション、つまり「連」というものが非常に大切になるのではなかろうか。たくさんの人と接すればそれだけの考えに触れ、アイデアが生まれる。アイデアが多くなればなるほど取捨選択を行いよりハイレベルなアイデアが生み出されるのである。

8. おわりに

今回子どもの企画力の養成として、新聞作成を紹介した。企画力は常日頃から多くの体験を積み、それを今までの知識経験と関連させ、今後の生活に生かしてはじめて出来上がるものである。今回の合宿と新聞作成は子どもたちにとって新しい体験だったに違いない。しかしその体験を基に次回は地元のことに関して新聞を作成するなど、次のステップへの土台になってほしい。また今回は新聞作成だったが、VTR、番組、ホームページ、ブログなど新聞以外のさまざまなメディアの形式にて外部へ発信する経験させることも有効のように思える。

また大人は子どもに体験を与え、それを企画力として身に付けさせられるかどうかの鍵を握っている。つまり子どもたちの企画力良し悪しは我々大人にかかっているのである。そのためにも大人は子どもの企画力を育成できる環境を整備提供していかなくてはならない。

参考文献

中国新聞 2006年7月28日付

同 備後版 2006年10月29日付

同 「第5回みんなの新聞コンクール作品集」2005年11月

同 「第6回みんなの新聞コンクール作品集」2006年11月

地域における2次予防の重要性

滝澤 祥一

1. はじめに

健康であること。

私たちは、何をするにしてもそれを欠かすことはできません。

地域創生を行うためにも、それは最も基本的なことであるとともに、最も重要なことです。

現在は、少子高齢社会の到来は様々な問題を呈しています。

地域の安心のためにも、以前にも増して地域のひとりひとりが健康であることが望まれていると実感します。

地域を創生するため、自らが2次予防における健康づくりによる重要性をご理解いただきたいと思っています。

2. 少子高齢社会のひとつの答え（医師不足に対して）

ご承知の通り、少子高齢社会の到来は、当然ながら医師の数も足りないものにさせ、地域格差を生み出しています。

現在、この少子高齢による医師不足における画像診断に対するひとつの答えとして、岡山情報ハイウェイを利用した遠隔画像診断システムの活用があります。

すでに、秒読み段階に入っており、今春より開始される予定です。

このメリットは、①遠隔地で撮影したデータを双方で送信することによって、専門医である放射線科の診断が可能になり医療の地域格差の解消につながる②不足する医師そのものがその病院に移動しなくてすみ、それに伴う時間などを減らし、より医療貢献しやすい環境になるということです。

ITを有効活用することでその恩恵を享受することができます。

少子高齢社会の医療水準の維持や向上が、ITなどの技術による恩恵として享受することができます。

3. 従来の治療に対する先入観から

現在でもそうですが、病気であっても病院に行かない人がいます。

痛みなどの症状があるにもかかわらず。

なぜでしょう。

当然、生理的に病院を受けつけない人もいるでしょうし、医者なんて信用できない、という人もいらっしゃるでしょう。

病院＝苦痛を伴うところとして認識され、その幼少期より植えつけられた先入観を払拭できないがために病院へ足が向かないといった人もいらっしゃるでしょう。

また、3次予防としての治療では、本人が積極的に参加したくてもその治療に対して積極的に参加することが体力的に難しいこともよくあります。

さらに、体力面では問題が少ないはずであるにもかかわらず、精神的に積極的になれず治療に参加できないといった状況に追い込まれることも少なからず見られます。

3次予防（治療）から2次予防へ転換することが重要ですが、そのためには、健康状態が損なわれたときに医療行為を受け、負の位置にあった健康状態を少しでも正常な状況に戻そうとする際に使用するのみにしないことが肝要です。（真野，2005）

4. 予防への取り組み状況

欧米諸国では30年ほど前から国策として予防に力を注いできた。

たとえば米国では、1979年に「ヘルシー・ピープル」という方針が策定され、当時のカーター大統領自らが「全合衆国民が健康で生きるためには、治療だけでなく予防が大切であり、政府、民間団体、企業、学校それぞれに保健医療専門化が協同し、国民の健康実現に向けて努力すべきである。」と宣言した。

これにより、各州政府、地方自治体、学会、企業など 350 以上の団体が結集し、「すべての人が健康で長生きするための情報整備ならびに提供が行われてきた。

「ヘルシー・ピープル」では、中年期の死亡原因を、①医療の不備②好ましくない生活習慣③遺伝④環境の4つに分けて、それぞれの寄与割合を試算している。

それによれば、①医療の不備は 10%であり、②生活習慣は 50%、③遺伝と④環境はそれぞれ 20%であった。(U. S. Department of Health, Education, and Welfare, Healthy People: The Surgeon General's Report on Health Promotion and Disease Prevention, 1979)

このように、健康への投資、2次予防としての検診を受診し、健康状態を把握し、生活習慣の改善を行うことは非常に重要といえます。(真野, 2005)

4. 2次予防について考えてみる

2次予防における地域創生の最大のテーマは、(頭の中では)「わかっているんだけど」何がしかの理由を付けるなりして検診に行っていないという人を一人でも減らすことであると私は思っています。

さて、クラークとレベルの考えに基づく有名な疾病対策の段階別モデル(田中・岡田, 1972)において、2次予防とは、病気は既に発生しているもののいまだ症状が出現していない段階に、病気を早期に発見することで早期の治療につなげ、病気の進行を未然に防ごうというもので、種々がん検診や成人病検診による早期発見早期治療のことをいいます。

それでは、国のがん対策はどうなっているのでしょうか。現在は、厚生労働省と文部科学省による第三次対がん10か年総合戦略が国家プロジェクトとして2004年から開始されています。

この対策の要は、2次予防と1次予防への取り組みです。

このプロジェクトでは、がんにおける2次予防として、「がんになっても死なないこと」を目指しており、これには検診が最も重要としています。(垣添, 2006)

地域における“健康”の創出には、従来の治療(3次予防)中心の医療からの脱却を図るため、ヘルスプロモーション(健康づくり)へと転換する力を如何に生み出すかが重要なことと考えています。

ただし、当然2次予防には限界があり、その点について正しく理解していただける環境整備は必要不可欠です。

たとえば、5年ほど前からPET(ペット)検査がマスコミを通じて話題になり、過熱しすぎた報道などにより誤った認識をされました。

それは、「がんだったら何でも分かる。」という誤った理解をされたからです。

このPET検査は、従来の解剖学上の解析を得意とするCTやMRIといった画像診断と異なり、細胞の代謝の状態を調べることができるという画期的な画像診断です。

しかしながら、当然弱点もあり、どんながんでもたちどころに発見することができる医療器械として誤った認識をされたことが問題でした。

現在は、各医療機関において正しく活用していただけるためのご説明をさせていただいています。

とにもかくにも、2次予防における検診は、自らの意思で受診することができるという最大の利点があります。

自身が健康そのものであったり、いまだ無症状・無自覚の早期の病気の段階であるため、検診受診のための移動を行うことについても比較的問題なくご自身が希望される医療機関を受診することが可能で、医療における地域格差は縮小されます。

できる限り検査そのものが、非侵襲的な検査で、検査時間が短いなど検査そのものがより身近に感じられるようになっていくことも大切なことと思います。

昨年は、「メタボリック・シンドローム」という言葉が、流行語大賞を受賞し急速に認識されました。

3大疾患の予防のためにもより1次予防よりの2次検診が望まれます。できるかぎり早い改善を行うことができればより健康管理はしやすくなります。

地域においては、まずは身近な人とお互いの健康状態の確認や誘い合っただけで検診を受診するなど自身がより受診し健康管理しやすい環境づくりを行うことが大切になります。

5. あなたから

残念ながら医療の地域格差があることは事実です。

さらに、2次予防はすべてではありませんが、自らの意思と行動力によって積極的に健康管理を行うことができる2次予防は重要だと思いませんか。

従来の治療（3次予防）中心という医療から、2次予防、そして1次予防への変換へとあなたからつながりをもって広げていきませんか。

地域の活力にもつながることは当然のことですが、それが、大切な人を守ることにもつながります。

参考文献

1. 垣添忠生（2006）「国立がんセンター発がんを防ぐ」主婦の友社
2. 真野俊樹（2005）「健康マーケティング」日本評論社
3. 氏平高敏、近藤雄二、藤崎和彦、松田亮三編（1999）「健康づくりと支援環境」法律文化社
4. U. S. Department of Health, Education, and Welfare, Healthy People: The Surgeon General's Report on Health Promotion and Disease Prevention, 1979
5. 田中恒男・岡田晃（1972）「健康管理論」南江堂

地域の農業について考察

田口 琢磨

1. はじめに

現代社会において、農業の抱える問題は深刻化している様に思われます。

第一に、食料の自給率が40%という低い水準であること。穀物はもとより野菜類をも外国に頼らざるを得ない状況です。なぜ、この様に輸入に頼らないと日本の食料事情は成立たないのか。農業事情を見ると実に嘆かわしい事態である。

この様な地域社会において私達がどのような活動をし、いかに農業を考え、地域一体の活動を展開していくべきかを考えてみました。

2. 実践内容と成果

現代の農業は、機械化及び化学肥料の使用などにより簡略化してきたように思われます。

1950年代前半ごろまでは、まだ、水田等の耕作は、家畜により作業がなされていたように思います。また、化学肥料の使用も頻繁でなく、草木等による堆肥の使用など有機物による栽培が主流であったように思います。

まず、私たちが実行したことは、地域に残っている昔の農耕具を集めて地域の皆に見てもらおうと、地域の文化祭に出展しました。

写真(1)がその様子です。

農家の納屋に眠っていたものをそれぞれに貸してもらいました。

写真(2)は足踏み脱穀機を使つての大豆こぎの様子です。

これらの古い農機具に触れると、高齢者は、昔の農作業に話しが弾み、子どもたちは、昔の農作業の一端に触れる機会が出来たと思います。

このことがきっかけとなり、翌年小学校の農業体験学習の時間に牛を使つての代かきをすることが出来ました。

写真(3)がその様子です。

当日は、PTA並びに地域の人たちの見学もありよい体験となりました。当時の農作業は、重労働であったことでしょう。そして、農家には、必ず牛などの農耕用の家畜を飼っていました。しかし、現在ではこのような形態は皆無となり、耕運機やトラクターによる農作業となり、労力は軽減されるとともに時間的にも短縮され、当時の様子とは全く違った感を覚えます。

このような体験は、子どもたちにとって、とても楽しく田んぼに接することが出来て良かったと思います。一時、タイムスリップした感がありました。



写真(1)



写真(2)



写真(3)

次に、私たちが行動を起こしたことは、休耕田や耕作放棄地を再び農地として利用することが出来ないかということでした。現在、このような農地はいたるところで目に付くようになってきました。少子高齢化の今日、われわれの地域では過疎化も深刻な問題となっています。

このようになった原因は、農業経営者が高齢化し耕作出来なくなったことや後継者が育たなかったことだと考えます。私達が先ず手がけた農地は面積 35a です。これらの農地を借り受けた目的は、荒廃した農地をまた農地として、有効利用できないかと考えたことからです。また、この場所は幼稚園のまわりであり、地域みんなが目につくところでした。この様な場所が草木で覆われてはいけないうことからです。この休耕田や耕作放棄地に観賞植物のひまわりを植え付けました。

幼稚園のそばでもあり見事に咲き揃ったひまわりは、地域の人の目に留まったと思います。また、幼稚園児をはじめ小学校児童をも楽しませたと思っています。このことは、荒廃していた農地を農地として利用する第一歩となりました。また、別の耕作放棄地を借り受けることにしました。

面積は、15a です。この土地は、小作人が牧草地として利用していましたが、数年前から荒れ放題の農地です。この農地にはそばを作付けしました。

これら作業は、「田んぼの学校・ふくたに」という団体と一緒に進めていくこととしました。

「田んぼの学校・ふくたに」とは、地域のこどもたちを中心に農業体験をすることによって食農教育や環境について創造教育を実践している団体です。

そして、そばの収穫は手鎌での刈り取り作業そして、脱穀は昔使っていた足ふみ脱穀機を使いました。

また、自分達で収穫したそばを使い手打ちそばで食しました。とても盛況に行う事が出来たし、参加したみんなが楽しんでいたと思います。このように作付けから収穫、そして消費するといった一連の行動こそが、子どもたちに教えていくことが出来る食育ではないかと思えます。

また、小麦栽培を行っています。栽培面積は、15a です。当地区ではほとんど見られない小麦を栽培し、小麦粉を使って楽しむことが目的です。この作業も「田んぼの学校・ふくたに」と一緒に行いました。作業内容は、種蒔き、麦踏み、刈り取りの作業を子ども達といっしょに行いました。

収穫後の小麦粉で色々なものを作って食しました。手打ちうどん作り、ピザ、ナン、お好み焼き、そして中華麺といろいろな楽しみかたがあります。自分で作ったものを自分で料理し食することはとても楽しいことでもあります。1人1人が手打ちうどんのプロに、ピザ作りのプロに、中華麺作りのプロになることを仲間達と言って楽しく活動しています。

今年は、大豆を作りました。豆腐を作りたいとの意見があり、それでは大豆から作ろうということです。大豆を 3a、作州黒豆を 4a に植え付け豆腐作りをして楽しみます。

地域で休耕田や耕作放棄地を利用しての活動を楽しみながらやっています。

3. 考察

私達は、昔の農業を見てもようと思ふことから活動がはじまり、地域の休耕田に観賞のためにひまわり植え、手打ちそばや手打ちうどんを食したいがためにそばや小麦の栽培をしてきました。また、手作り豆腐が食べたいがために大豆を栽培しました。農業経営とは関係なく自分で栽培したもので作って食すという楽しみ方をしてきました。このことは、一種の食料自給率を上げるという手がかりになると考えます。私達の地域には、耕作放棄地も多くあり今後も増加していくでしょう。このことを考えるとちょっとした面積の農地でもよいから自分の好きなものを栽培し楽しむという食生活も良いのではないかと考えます。しかし、農地を持たない人はどうすればよいかと考えたときに耕作放棄地などを借り受けることができる組織があると簡単に利用できるのではないかと考えます。このような組織づくりも必要かと思えます。また、自分で農作物を栽培するという事は、食の安全・安心を考える上でも重要なことと思えます。

私達の地域の休耕田や耕作放棄地の増加の要因は、高齢化と過疎化によると考えます。今後、益々の少子高齢化により農地の荒廃は一層のスピードで進んでいくものと考えます。この現象は、農業に関係した事だけでなく環境にも悪影響を与えるものだと考えます。たとえば、降雨時これまでの保水力があつた農地に対して耕作放棄地等になったがために土砂崩壊等の災害を引き起こす原因にな

るでしょう。また、火災について考えてみたときに、荒廃し草木の生い茂った農地であると類焼となり大火災となることも考えられます。このように耕作放棄地等の増加は地域の自然環境に及ぼす悪影響とともに、私達の生活にも悪影響を及ぼすと考えます。

4. まとめ

私達の活動は、大きな拡がりとはなっていませんが、今後活動していく足がかりとして地道に進めていかなければいけないと思います。しかし、休耕田や耕作放棄地が増加の一途であることは地域の将来を考える上で一つの大きな問題点であると思います。現代社会の少子高齢化による農業の担い手づくりも真剣に取り組まねばいけない状況でしょうが、さらに、このような農地等の農業の現状も地域として真剣に取り組まなければいけない時だと考えます。子ども達に対する食育教育も大事な教育となっています。いかに食物を大事なものと思い、これらを育ち作っていく過程もとても大事と考えます。耕作放棄地等も視野に入れた取組みが必要であると思います。

これからの時代、農業は「集落営農」という全戸参加の集落ぐるみの組織とし、土地・労働力・資本を組替えて一つの経済収支の単位となろうとしています。このことが、私達の地域に即しているかどうかは別にして、休耕田や耕作放棄地が増加していることは事実です。早急に、この問題に取り組まなければいけません。これらの農地を再び農産物が栽培できる農地にすることの出来る資本力なり機械力がある業界は建設業ではないかと考えます。建設会社は、地域に密着しており、従業員もその地域に生活している者が多いと思います。また、これまでの工事の経験を生かし最小限で農作物の栽培できる農地に返すことができるのではないかと考えます。また、行政との協働もなくてはなりません。

小さな取組みから地域全体の取組みとなる活動をこれまで学んできた「連」で解決できればと考え実践していきたいと考えます。

註：私達の主宰する団体は、岡山市福谷学区「おもしろえ〜マップ」作成実行委員会です。

1999年5月より、ふるさとの身近な歴史や自然のようすなどを再発見再認識し、共に住んでいて良かったと感じ合おうを合い言葉に活動しています。

田んぼの学校・ふくたにとは、農村を1つのビオトーク空間と考えて、田んぼ、水路、ため池、里山などを遊びと学びの場として活用することで、農作業や農地・農業用施設への理解を深めるとともに、農業・農村が有する多面的機能について学ぶことにより、食料と農村環境に対する豊かな感性と見識を持つ子どもを目的に、岡山市立福谷小学校PTAや地域代表を中心に活動しています。

生活共同体の形成について

竹内 弘海

昨年の論文において私は、県の西南部に位置する私の生まれ育った片田舎の中山間地区の現状を拾い出し、今後の対策を考えてみた。実際、若者のいなくなった村は、高齢化と過疎で村自体の機能が徐々に保たれなくなって来て来るだろう。

ひとつ山に入った農村では、老人だけで生活できなくなった家は、都会に出ていった子供が親を引き取りに来たり、家で介護出来なくなった老人を介護老人ホームに移し、誰も住まなくなった家が廃墟と化し始めている。残っている家の大半が老夫婦だけの家が多くなり、村の機能を維持していくには、僅かに残った団塊の世代の中年達にその重圧はのし掛かって来ている。こんな中で、残った定年を前にした中年達は、地区をもう一度活性化させようといろんな事を考え、いろんな村おこしを試み少しでもみんなが住み良い村にしたいとがんばっているが、しかし、ここ数年で高齢化と過疎が進む農村地区はそれを止めることは非常に困難になって来ていると言える。

こんな現状で今後、村を維持していくには何をすれば良いのか、何をなすべきなのか考えてみた。テレビや新聞等のメディアは、団塊の世代は定年後生まれ育った田舎に帰り、第二の人生を楽しもうなどともてはやして言うてはいるが、実際自分の生まれた田舎に帰り農業をする人がどれほどいるだろうか、田舎に住むこと、ましてそこで農業をする事は、実際忍耐また、その覚悟が必要であると感じる。長い歲月住み慣れた都会の生活は便利で快適である。それに比べ田舎の生活は、何も考えずのんびりは出来るものの、刺激がなく何をすることも不自由である。歩いて行けるコンビニはなく、病気をすれば半日を掛けて出かけなければならない。マスコミに乗せられた中年達は、少しは田舎に帰る人もいるであろうがしかし、何人の人達が自分の生まれた田舎に死ぬまで留まり生活するだろうか。あまり期待をしてはならないと思う。

話がそれてしまったが、今、田舎に残って生活している中年達は何をすべきなのか。

ここで私は、今後この田舎で生活していくには、お互いが協力しあい助け合って生活をしていく生活共同体を形成していかなければならないと考える、地域を活性化し人を呼び込む事も必要であるが、そこに今生きている人達の生活を守っていく基盤を作っていかなければならないと感じる。高齢化が進む農村部では、今後介護福祉が不可欠であろう、しかし、介護保険で賄われている今の介護では、今後著しく進行していく農村部の高齢化に対応して行くことが出来るのか、近い将来農村部では大半の人達が介護を必要とする時代が来る。介護施設に人が集まり、誰もが介護を希望したらどうなるであろう。介護費用が増大し、また、多くの介護施設、老人ホーム、そして多数の介護士が必要となる時代が来る。重労働を強いられる介護士にどれだけの人が関わっていくだろうか。この先は、そんな事を考えると将来は安泰とは言えない。50才以上の中年以上しかいないような農村部では、もう二十年もすれば全ての人間が老人に仲間入りし、農作業はもとより、地域の維持までも出来なくなってくる事が考えられる。このことから、これからの自分達の生活をどのように守って行くのか、互い考え、協力し合い生きていく必要があると言える。

この生活共同体をどのように形成し、発展していくか。今後の農村部で重大な事と位置付けられる。生活共同体は、個人個人違った人間が互いに協力しあい生活すると言うことで、形成には非常に難しい事が有ると思われる。個人個人みな自分の生活があり欲望がある、また、それぞれに非常に強いプライドがある。気の合う仲間達だけなら互いに協力し合うだけならまだ容易かもしれないが、しかしそうそう気の合う人ばかりがいるものではない。田舎に生活して思うが、町内会の会合、冠婚葬祭、水利組合、そして地区のお祭りなどではみなそれなりに協力し合って生活しているが、いざ、個々の農作業などとなると、みな、一斉に土日百姓で我先にと農作業に励むのである。隣の家に人手が足りなくても、自分の家の農作業が済めば、余裕を持ったようにくつろいで誰しも、隣の家を少しでも手伝おうなどとは思わないのである。

昔に比べ、今の隣どおしは、ある程度の収入の格差が発生しており、それは家の門構えや庭作りに現れ、どこかしら、隣りどおしで張り合うこととなって来ている。昔ほどの隣組の親しみは無くなってきていると言える。

このように、今後生活共同体を形成していくことは、至難の業だと思えるが、しかし、今後の我々の住んでいる地域や個人の生活を守って行くにはどうしても必要な事だと感じる。

(1) 生活共同体の形成の進め方について

- ① 先ず、地区内で一人だけで農作業をし生活している、50～60代の団塊の世代の人がどれだけいるか調査する。
- ② その中から主旨に賛同してくれそうな人間を選り、声を掛ける。
- ③ 賛同を得た人達を集め、日々の生活の中の互いに協力の出来る部分を話し合うい探す。
- ④ その中から簡単に協力出来るものから、互いに協力して行く。
- ⑤ 一応の目安が出来た段階で徐々に協力出来る範囲を広げていく。

(2) 生活共同体の役割について

- ① 一人では管理出来なくなった田畑を集団で管理する。
農作業を一人でしていくことはとても辛く、大変なものである。ある程度的人数で一斉に農作業をすることが出来れば、その苦痛から解放されると思われる。しかし、多くの農地を管理する必要が生じ、労働時間そして個人の自由な労働は束縛される事となる。
- ② 個々の家庭で一人では出来なかった作業を手伝う。
家庭内の農作業用機械そしてタンス・冷蔵庫等重量物の移動・処分等の共同作業など
- ③ 町内会及び水利組合等集団での行う作業等で、作業に出られない人に変更し作業に出られる人が代役を行う。
- ④ 生活していく上で無駄な部分を出来るだけ協力し無くして行く。
衣食住、一人で生活するには個々の家庭で重複している部分を減らし出費を抑える。
- ⑤ それぞれの地区でのコミュニケーションを行い、地域全体の活性化を図る。
- ⑥ 次に続く者を巻き込み農作業等を一緒にいき育成する。また、地域の行事等に参加しその地域のしきたりや言い伝え等の文化の継承を図る。

(3) 生活共同体の形について

- ① 個々の家を守る必要があるため、極力家の事は、個人個人でする事を原則とする。
個々にその家の守るべきものがあると思う、個々の意見を尊重し、共同の中に引き込むのではなく手助けを行う。
- ② 共同体の協力は、個々の申し出から生活の一部分を手助け（手伝う）事から始める。
- ③ 食事など一人ですることが辛くなった人達の食事等を、集団で作製配達したり時には、みな集まって行う。
- ④ 徐々に集団で協力して出来る事を広げて行く。（洗濯、買物、風呂等）
- ⑤ 野菜等自給出来るものは、一箇所に集約し協力し有って集団で栽培し配達等を行う。
- ⑥ 一昔前の間借り生活の出来る家を作り、介護施設等に入れない様な人の中から共同で生活しても良いと言う人達を集め、一つの生活共同体の家を造る。先ず、昼間だけ生活を共にし夜は実家に帰るなど、個人個人の生活の場所は出来るだけ確保し、個々の家を守る。
- ⑦ 農作業しなくなった田畑を借り上げ農作業の拡大を図り、僅かでも収益を上げる事を進めて行く。
- ⑧ 会員制または、組合制とし年会費を徴収し、経費及び労働費に分け、労働奉仕時間により労働費を分配する。多く労働奉仕した人には、徴収した労働費の中から報酬を出すことし、無報酬のボランティアでないものとする。
- ⑨ 介護行政だけでは出来ない地域に住んでいる人を助けていく組織を形成する。

地域に住む我々は今後何をしていかなければならないか。地域の活性化を図って行くには、自分達の住んでいる地区のみんなの生活を守って行かなければならない。そこに住んでいる人が皆、精神的

に安定し住んでいて良かったと感じる地域を作る。個々の生活の基盤をしっかりと作り、そして次に、地域に住んでいる人が互いに声を掛け合い進んで協力し合う地域、誰もが頼れる地域にしなければならないと感じる。

互いに温かい心を持てば、互いを思いやる気持ち生まれる。そして、そんな周りからの心は、人の心をとぎほぐし、生き生きとした生活を呼び戻す。地域の活性化は、互いの人の心の中なら生まれてくるものだと思う。押しつけの、通り一遍の催し物や行事では、人は直ぐに飽きてしまい、新しいものに動いてしまう。地域の日々の生活の中で作り上げていくものでなければ、永遠に続いていくものではないと感じる。

LET'S TRY

西村 恵美子

会社名：司法書士 富阪幸子事務所

アピール・ワンフレーズ：依頼者に対して、私として考え得る最高のサービスを提供していきます。

社員数：4名（全員 女性）

代表者氏名：富阪幸子

プロフィール：岡山県庁に在職中、タイピスト日本一になり、NHKのテレビ番組「私の秘密」に出演。
岡山市中心部近くに位置する富阪司法書士事務所は司法書士の事務所とは思えない構えだ。3階建ての住居兼事務所の1階に事務所はある。富阪先生の大好きなピンクを基調とした壁、大きな窓は通りを歩く人から中のスタッフの仕事姿がはっきり見える。音楽好きなご主人のためか、音符をあしらえたテラスには目を見張る。

○ 宣伝、宣伝、宣伝、、、

N：「先生、岡山で初めての女性司法書士ですよ？先生が司法書士を取得した年のその日から5日後、私は生まれています。私の生きた分、先生は司法書士をされているわけです。どうして、司法書士になったのですか？」

T：「子どもの頃から、富と名声と孤高に憧れてたの。今と違って、昔はテレビなんかないでしょ？知識は本だけだったからかしらね。小学生の時に志を立てたの。『ひざまずけ、富貴よ。我の前に』この目標に向かって、何かをしたいと思って、とりあえず、年齢制限なし、学歴不問、経験不要のこの試験に挑戦して、合格。以来、35年間いつの間にか経ってたわね。」

N：「事務所を創業するとなると先生の時代は、まだ男性社会ですよ。苦勞も多かったのではないですか？」

T：「女性の感性はね、司法書士という仕事に向くのよ。女だというだけで信用してもらえなかった時代だったの。だから、宣伝、宣伝、宣伝。名刺を配り歩いたわよ。どうすれば、この事務所を知ってくれるのか？私自身のPR、事務所のPRに日夜、腐心しているわよ。なるべくお金をかけないで、会費の安い団体に所属してね、会費の安いイベントには小まめに顔を出してるわね。司法書士としての風貌を醸し出すにはどうしたらいいか？服装、態度には気をつけてますよ。」

富阪先生の宣伝力は凄い。JRの時刻表の裏面に事務所所在地を印刷して配布している。時刻表を使う都度、目にすることになる。と、同時に富阪先生はアイデアマンである。封筒に社名が入っているのは当然だが、クリアファイルにポケットを2つ以上つけて、ご自身の名刺、担当者の名刺を入れている。それだけではない！タッグシールに社名、住所をパソコンで印刷し、あらゆるものにペッタ。どうすれば、相手が覚えてくれるか？宣伝にかける執念には脱帽である。

○ 企業は人なり

N：「先生でも失敗や困りごとはありますよね？」

T：「ミスは付き物。失敗のない仕事はないでしょう。でもね、ミスはチャンス！損害金を自弁して、誠意を尽くしてフォローすればかえって信用度が増すの。困ったことは、良いスタッフを見つけることかしらね。」

N：「ココには佐藤さん（司法書士・不動産鑑定士）を筆頭に優秀なスタッフが揃ってますよね。人材確保も大変ですよ。」

T：「そうよ。良いスタッフがいれば企業は発展する。でも、これが一番難しいこと。職業安定所、学校、リクルート、新聞広告、いろいろな方法で人材を募集するけれど、やっぱりね、いい人は大企業にばかり行って、小さな事務所には来ないわね。そこであきらめない。根気よく、頭を使って人材を探せば見つかるものよ。」

富阪先生の人を見る目は厳しい。どの仕事にも言えることだろうが、商売は信用第一である。信用を確たるものにするために、やはり自分のポリシーを強く持つ事である。「経営コンサルタントの先生から、労務管理（人材を育成するのが経営者の仕事）と言われて一生懸命頑張ったの。それは、大企業の話、零細企業には無理だと悟ってね、コンサルタント先生のお説教なんて糞食らえ！！うちの事務所に合わない人はさっさと辞めてもらって、次の人を探すわね。今は人を見る目も培われて良い人材に恵まれているわよ。」

○ 好きこそもの上手なれ

N：「新しく創業される方に、メッセージをお願いします。」

T：「好きなことをするのが一番。好きなことは一生懸命になれる。いくらお金になるからだけで、仕事を始めても、好きでないと長続きしませんよ。創意工夫！人間の頭脳はすばらしいの。常にアイデアを求めて社会が求めているものは何か？他との差別化を図ることが肝要かしらね。」

○ 生涯現役

御歳73歳の富阪先生は今日も現役でバリバリ活躍されている。先生の厳しい声が事務所の中を通る。「生涯現役」それが、先生の仕事に対する強い思いだ。現役にこだわり続ける先生、今は後継者育成、若手育成にも力を入られている。終わりを見て仕事することほどつまらないことはない、「生涯現役」そう言える創業者を応援したいとのことだった。

○ コメント

仕事は大変厳しい富阪先生だ。いつも前向きに建設的である。人との出会いが、人を成長させると先生がよく言われる言葉だが、その通り先生ご自身は軽快に出て行かれる。違う畑を見よ！そういうことらしい。

今回、原稿を執筆させて頂きましたサクセス館・進学塾の代表西村恵美子です。私は、現在、小学生、中学生、高校生の進学・学習指導および大学生・一般に対する公務員指導、不登校生徒に対する学習補助など教育サービスに携わっています。今年の4月で、創業7年目を迎えることとなりました。様々な経営者（今回は女性創業の方）の方とお話をさせて頂いた中で、創業における失敗、困りごとは資金繰り、人材確保・育成に尽きていました。丁度、7年前私が創業を決意したとき、私の手持ち金は5万円でした。当時、SOHOという言葉も知りませんでした。今考えれば「無茶をしたな。」とつくづく思います。あれから、7年、失敗や反省も連続でしたが、「私が教育を変える！」その強い思いだけで突っ走ってきました。大手ではない、サービス。自社の強みは何か？小さい事でも、誠意をもってあたる。お金は後からついてくる。そう自分に言い聞かせながら、今日までやってきました。スタート時、机もボードも全ては中古。教室に使ったのは、当時の教え子のお母さんの物件の長屋。家賃は少し待っていただき、ゼロからのスタート。

創業を決意するには、時間はかかりません。タイミングは自分で決めるものです。後は、「自分がやる！」創業者は自分自らが動かないと始まりません。失敗の責任は代表が取る。失敗は次のステップへの教訓です、頭を下げたり泣いたり笑ったり。ただ、熱い思いは、無くしてはいけないと思います。サクセス館では経営理念、教育理念、教育信条を明文化し、スタッフと共有しています。やり方、感じ方は違って、思いは同じベクトルをむいていることが大切だからです。今、創業を考えられている方は、「今、ここで」始めてください。人の意見はあくまでアドバイスです。判断は自分でするかありません。不思議なもので、必死に形振り構わず頑張れば誰かが助けてくれます。大丈夫！創業支援も完備されています。さあ、LET'S TRY!!

「倉敷市真備地区」地域づくり / 第2章

尾藤 寿実

1. 「空海」をキーワードに・・・地域リーダー像を探究／後援会活動の支柱づくり

昨年度の修了論文は、「日本史上最高の地域リーダーは空海」と唐突に述べ閉じた。勿論比喩であるが、私としては本塾の創設主旨が「地域リーダー育成」にある故に当然の帰結であった。また、昨年度、地域に密着する多種多様の組織に関わり得た集約的結論でもあった。地域リーダーに必要な資質は何か。それは、大上段過ぎるが「空海の教養人」と至った。

補足する。一ところで、こんな訴訟をご存知だろうか。動物が原告という訴訟。国の特別天然記念物第一号、奄美大島に生息するアマミノクロウサギが原告となって、ゴルフ場の開発許可の取り消しを求めた訴訟である。アメリカでは、1978年に「絶滅の危機に瀕する種の保存法 (ESA)」が制定され、市民は誰でも自然に代わって訴訟できるようになっている。これは、『『自然』にも権利がある』という発想である。空海の「即身成仏義」の有名な一文に、「六大無碍にして常に瑜伽なり」とある。六大とは、「地水火風空」の物質世界に「心」を加えたもので、宇宙は物質原理と精神原理から成立しているとする。そして、六大は互いにとけあってあらゆるものをつくりあげ、宇宙のどんな小さな場所にも六大が包みこまれているという、空海の真骨頂「相包の思想」を最も端的に示した言葉である。西洋哲学の潮流は、人間の道徳性の根源を肉体や肉欲から離れたところに求め、その結果創出された「理性」が善悪を分別するし、これこそが、人間を人間たらしめ、動物から分かちものとするにある。「相包の思想」にあるように空海は違う。心とからだは切り離すことができない。それを主体とする人間、そして人間の外にある動物・植物、さらに物質までが、大日如来のあらわれである。その意味で、自然界のあらゆるものには上下の差別などありうるはずがなく、互いにつながりをもって生存しているとする。簡潔に言えば、西洋哲学の潮流は『人間中心主義』であり、空海は『生態系中心主義』（地球的規模では）である。

前述の実例、『『自然』にも権利がある』は言うまでもなく後者の発想であり、何よりの環境保全の観点からの今や大正論である。ただし、空海的に考えればこうである。「人間以外の言葉を持たない生物や自然は、抗議もできず、その行為が不当かどうかを判断する知性もないから問われることがなく、つい最近までやってこれた。しかし、この世のあらゆる存在には仏教で言う『縁起』（＝物理学では因果関係）があり、その掟がある以上、自然に与えた損傷は、やがて必ず人間生活にも被害をもたらす。それが皮肉に、科学で予知できやっと分かってきた。ただ、被害の影響が、世代をこえて顕在化する場合が悲惨だ。現世代は、完全に未来世代の権利を踏みこみにしている。だから、所謂『倫理の権利』をもたねばならぬ。」と。

この『倫理の権利』の認識こそ、「空海の教養」のバックボーンと考えている。私たち(後援会)の学習の大半は、「空海」に費やされた。司馬遼太郎作「空海の風景」読書会にはじまり、梅原猛著「空海の思想について」夢枕獏著「空海曼陀羅」等、ときに佐藤純爾監督「空海」(映画)まで観賞した。いずれにしても、まず第1の本格的な実践活動とした。

2. 変貌する人々、地域活動・・・

①「まちづくり協議会」役員を意識改革

これまでの同協議会は、定年退職者の余技的趣味的活動の場としての、老後の楽しみのサロンとして存在していた。極端に言えば、何をやるにしても打ち上げ会(飲み会)が中心で、がために何かやるといった風であった。企画も恒例に倣う、総括などはほとんどなしであったが、変貌した。昨年来、真摯に質してきた態度をようやく熱意として受け止められたといえる。また、私たちの後援会が、公約どおり地域づくり集団としての活動や学習重視であることが認知されていったことにある。脱行政、自主的発想や自覚的論議がなされ、規約改正(役員の公選制、自主会費制導入)・経費の精選化・行事の見直し・仲良し会の自粛等、傍目にも変わったと言われるようになった。

②「社会福祉協議会」の刷新

H18年4.3事件一年度当初の予算書と年度末の予算書が違うことを糾弾。これは、市町村合併に絡ん

で補助金減額、いずれ消滅になるための活動費確保を策した結果であった。当初隠し金としたそれが、倉敷市から法的にまずいとされ決算で表面化しざるをえなくなったのだ。その顛末を隠匿し押し通そうとしたが、暴露しその独裁的体質を非難した。ついでに、名ばかりの研修旅行の実態も暴き体質改善の問題提起を図った。以後、役員の変替を含め、組織に刷新が進められている。

③「衛生改善組合」創設に、人員の配置

市町村合併に伴い新規に同組合が創設されたが、メンバーを多く配置し理想的な地域組織としての構築化を図る。今後具体的な活動を通じ、他の組織にいかに関与効果をもたらせるか楽しみである。

④「旧山陽道を歩く会」との連携

このイベントを、組織活性化、さらに組織拡大にいかに関与するか。また、現在、真備地区内の一部川辺地区内が中心の本後援会の活動を、他地区にいかに関与できるか。ある意味絶好の取り組みとして進めている。

⑤「原田龍五倉敷市議会議員」との対等連携

本後援会が原田龍五倉敷市議会議員の後援会である限り、同氏を支援するのが当然である。しかし、それは主と従の関係ではない。完全に対等であり、「次世代のための地域づくり」＝「1の項で述べた『倫理の権利』浸透」が共通命題の関係である。そう言う意味では、同氏はわが後援会の行政担当である。ただし、後援会に寄せられる行政絡みの相談事全てを闇雲に流すのではない。逆に、同氏に直接寄せられる場合もそうで、ともに前述の共通命題の濾過作業（議論）をし取捨選択する。また、「市長と語る会」（9/18 実施・於 マビーふれあいセンター）といった同氏の発案の政治活動であれ、この度の県議会選挙（高橋戒隆氏 旧真備、清音、山手選挙区選出）推薦もその濾過作業の上支援する。本来の後援会はこうあるべきだし、故に常に両者のなれ合いブレの修正を可能とする。そして、何より地域住民の信頼が獲得できると考えている。

⑥「後援会…学習会」の充実

月例で実施。学習内容は、1の項にある「地域リーダー像探究」＝「空海研究」が中心。他に、地域特定課題として「小田川治水」を3回取り上げた。また、発展的に次の3の項にあげた「真備文学塾」の創設を生むこととなる。

3. 連塾サテライト塾として「真備文学塾」の創設

後援会における学習会への参加者は、回を重ねるごとに多様となった。特に形式ばったことはせず、基本的にはどなたでもどうぞというスタンスでのぞんだ。内容的には、課題図書を設定し、まずその読後感想を各々述べ巡ると議論するといった読書会そのものであった。ただテーマは、前述したように大方「空海」である。勿論ときに、「三教指帰」（空海の著作で、仏教・道教・儒教の三教のうちで何が一番すぐれているかを論じたもの。空海は仏教とするが、空海が本格的に仏教への志向を宣言した書とされる。戯曲風に書かれており、仏教書というより文学書と言われる書物である）の話題になると、「道教」や「儒教」の話に流れ、それはさらに「孔子」へ、さらに「古代中国史」へと広がった。時間的には約二時間ほどだが、茶菓子などをぼりぼりかじりながら、夏の最中にはビールをやりながら進めた。評判としては、「気さくな教養講座」といった感じだった。一つだけ気をつけたことは、雑談風にはせず、議論が論理的に展開され意見の集約が明確になされることである。つまり、知的認識がいかに関与上美味しい果実かを知らしめることである。2004年早稲田大学に国際教養学部が創設された際、内田勝一学部長は「現在は異なる文化の人々と共生することが求められており、そこで重要なのは教養と語学。教養は卒業後も長く役に立つ」と語っている。また、「あらすじで読む日本の名著」の編集者である小川義男氏は、自身が校長をつとめる狭山ヶ丘高校に、「古文・漢文を読める知識人を目指せ」「英字新聞を読める高校生に」という垂れ幕をかけ、週4回、毎朝英文学の原書を解説し、「平和な生活を守るには利己主義を抑える必要があり、教養はその有効な手段である」と生徒を鼓舞している。東京大学の理工系の院生が、「先生、ドストエフスキーって誰ですか」とマジに聞いたという笑えぬ話がある。昨今のTV番組に、教養を材料にしたバラエティー番組が何と多いことか。単なる知識（＝情報）でない教養は、現代社会において最も求められている。また、知的認識＝教養が身に付くという感じは、「有意義な時間を過ごした」という至福の思いを残す。それに、教養は絶対

サロン化しない。それを心がけた。

ところで私には、秘かな目論見があった。それは、塾生としての使命でもあるが、連塾のサテライト塾の創設である。当初より、この学習会をそこに運ぼうと目論んだ。「文学塾」にすることは決めていた。やはり、好きこそ物の上手なれで、勝手が利くし何より長続きできる、とした。いくつかの戦略があったが、二つ重視した。一つは、権威である。これは無視できない。他一つは、同郷の同志である。実は、ずーと以前から（入塾当時から）この二つともが一石二鳥に叶う目星をつけていた。だから実際は、その到達点があり逆算的にこの二年があったといえる。

坂本遊氏、この人に出会わなかったら今日に至らなかった。彼女は、と言ったように女性である。私と同じく、真備町川辺に住む主婦である。出会いは、二年前の総社市文学選奨の表彰式会場であった。私は小説、彼女は詩で入選し式に臨んでいた。近所と言うことですぐお近づきになった。ただ、私の目論見を話したのは昨年7月だ。そして、こういう賭を提案した。それは、今年度の倉敷市民文学賞（小説部門）に二人で応募しましょう、そして二人とも受賞したら私の目論見に荷担して下さいと。結果は、彼女が大賞、私は優秀賞の1・2だった。その坂本さん、つい先日、「約束だから、しかたないわね」となった。それで、この修了論文も完成した。

西大寺鉄道にみる地域遺産の伝承と地域創生

福田 祐一郎

1. 地域遺産

両備バス株式会社は2010年に創立100周年を迎える。前身である西大寺鉄道(株)の創立から数えて100年である。そして両備バス(株)は本年(2007年)4月1日、グループ会社である両備運輸(株)と合併し、両備ホールディングス(株)として新たな歴史を刻み始める。

両備ホールディングス(株)設立は、両備グループの100周年事業の一環である。100年続いてきた会社をこの次の100年も続く会社でいられるよう両備グループ代表が決断したもので、21世紀型の会社となるべく体質強化、組織改革に取り組む。現に今日の両備バス(株)も、先人のいくつかの英断の上に成り立ってきた。

100年、200年と続く礎となった西大寺鉄道。私はこの100年という記念すべき節目に立ち会える者として、地域遺産としての西大寺鉄道に着目した。西大寺鉄道は産業遺産であると同時に地域に愛される地域遺産であると確信している。西大寺鉄道は西大寺を起点に後楽園のほとりまでの11.5キロを結び、明治43年から昭和37年までの52年間走り続けた軽便鉄道だ。鉄道ファンの間では日本で唯一の軌間3フィートを用いた鉄道車両としても知られている。

今でも地域の人是在りし日の西大寺鉄道を懐かしみ、沿線跡をたどったり、地域イベントで写真展を開催していただいている。「軽便鉄道ものがたり」という創作劇をしてくださる劇団もあるほどだ。遠方からも西大寺鉄道についての問合せがしばしば会社に寄せられ、2006年12月に発行された「西大寺鉄道」というタイトルの単行本は丸善岡山店で売上ランキング1位を記録した。

このように地域の方々や鉄道ファンの方々にもいつまでも愛されている西大寺鉄道。しかしながら一方で、後身のわが社が持つ西大寺鉄道を後世に伝えて行く手段は、当時の資料、写真、その後発行された文献、そして現存する車両でしかないのが実情である。インターネットが整備された現社会において、一見十分な資料に思われる。しかし地域遺産を正しく後世に伝えていくためには不十分であると考え。全ては物だからだ。物は失うことがある。

だが人と人との間で伝承された記憶は、人が生きる限り伝え続けることができる。だからこそ人と人がつなぐ地域遺産の伝承に着目する。地域遺産を守り伝えるのは、企業のみでは成り立たない。地域の応援があつてこそ成り立つ。

企業は地域の人に愛され、応援される存在であり続けなければならない。地域遺産を通してそれが実現すると考える。地域の人と企業が一体となって守り続ける地域遺産はコミュニティを生み、コミュニティは人を育て、人はまちをつくる。

西大寺鉄道にはその魅力がある。

2. 西大寺鉄道

かつて商業の中心地として栄えた西大寺は、便利な海上交通に比べて陸上交通は全く発達しておらず、農業の他に目ぼしい産業もなく、当時これ以上の発展は望めなかった。明治の終わり頃、時の町長、山口誠孝や松田與三郎(後の西大寺鉄道社長)によって、西大寺の産業と文化の発展につながる鉄道建設構想がたてられた。そして明治43年7月、町民の希望と大きな使命を担って創立されたのが西大寺鉄道(株)である。

施設工事も順調に進み、明治44年12月にまず西大寺―財田間が開通し、大正4年11月に最終区間の後楽園線が開通。西大寺―後楽園間11.5キロの全線が開通した。

当時の西大寺鉄道は「軽便(けいべん)」の愛称で親しまれ、黒い煙をはき汽笛を鳴らしながら備前平野を駆け抜けた。はだかまつりで有名な西大寺会陽の当日は、乗り切れないほどの多くの乗客が詰めかけ、屋根の上に乗せて運んだ。

蒸気機関車に変わってガソリンカーが登場した昭和6年ごろからは、岡山―西大寺間の市バスと激しい乗客の奪い合いをすることとなり最も苦しい時代を迎える。戦争に突入り極度のガソリン不足に

なった混乱期も知恵と工夫と技術力で駆け抜けた。そして昭和37年9月、国鉄赤穂線の開通により、西大寺鉄道はその任務を終えた。

その間52年間の偉業は地域の人々に讃えられ、その精神と使命は西大寺鉄道が歴史の中から育て上げた両備バスに引き継がれた。

両備バスは現在でも西大寺鉄道の車両を保存している。西大寺バスターミナルに置くその車両「キハ7号内燃動車」は、産業考古学会より推薦産業遺産として認定されている。

両備バスの歴史は、軽便鉄道の歴史でもあり、創業100年は西大寺の地域の方々にとっても記念すべき節目を迎える。

3. 伝承と地域創生

企業として創業100年という評価は信頼につながるが、地域遺産の観点からみると、100年という年月はかかりすぎた感がある。西大寺鉄道が幕を閉じた時20歳だった人も今は70歳。我われは急いで地域遺産伝承に取り組まなければならない。

西大寺鉄道を知る地域の人々と、当時の様子を知りたいと願う全ての伝承者、および全国に点在する西大寺鉄道ファン。これらをつなぐのは後身の我われ現社員の役目であろう。

語り合える場を設け、資料を持ち寄り、話題を提供する。イメージするのはいわゆる「井戸端会議」だ。その中から次代へ繋ぐ話題、繋ぎたい話題を探す。個人個人の観点で魅力を発見し持ち帰り、それをまた他の誰かに伝えて欲しいと願う。社員は主催者として細部にわたり記録し、次代へ繋ぐ資料とする。

あくまでも主役は地域の方々を中心とするそこに集う人々。世代を超え、地域を超え、西大寺鉄道を語り合っていただく。西大寺鉄道を通じて企業と地域の間にもますます強固な連携が生まれ、西大寺鉄道を中心に新たなコミュニティが生まれる。

例えば災害等で資料を全て失うことになっても、西大寺鉄道について語ることでできる人は日本のどこかにいてくれる。これこそ地域遺産が確実に伝承された証だと考える。

このように「温故知新」から年代や地域を超えた新たなコミュニティが地域創生を可能にしていくと考える。そのコミュニティが地域に活力を与え地域が元気にそして生き活きと暮らせるまちづくりに貢献できるのではないだろうか？

また、インターネットとのメディアミックスも考える。基本はあつて話す。しかしながら世界中のどこにいても通信できる利点を生かし、西大寺鉄道コミュニティの情報配信をしていき、コミュニティ参加を促す。会って話したい、沿線跡をこの目で見てみたい、と思わせる域までそのコミュニティが育ち、配信する情報に価値が生まれることを願う。

4. まとめ

私が生まれ育ったのは岡山県北部の柵原という町である。柵原は昭和30年代に全盛を極め東洋一の硫化鉄鉱の産出量を誇った柵原鉱山で栄えた町だ。その硫化鉄鉱を運搬する手段として片上鉄道が柵原～片上間を運行していた。私も高校時代には、この片上鉄道を利用して通学していて一方ならぬ思いを寄せている一人である。

しかし、硫化鉄鉱の需要の激減により鉱山は衰退の一途をたどり、片上鉄道も平成3年3月にその歴史に幕を閉じた。

現在、鉱山の歴史や片上鉄道の面影は「柵原鉱山公園」で展示されており月に一度当時の車両を使い模擬運行を行っているに過ぎない。

また、線路跡はサイクリングロードとして舗装されているが一部では民家が軒を連ねているところもある。そして、当時を語る人々も徐々に減少し片上鉄道で結ばれていた地域の連帯感も薄れてきている。

西大寺鉄道や片上鉄道のような例は岡山県内だけでなく全国にも数多く点在している。文献や資料、車両の保存や線路跡の活用などはもちろんのこと、当時を知る人々が世代を越え地域を越えて語り継ぐことが重要であり、これが真の意味での地域遺産の保存に結びついていくと考えている。地域遺産

は世界遺産のように世界唯一のものや大規模な遺産ではない。

しかしその地域が歩んできた歴史の証であり地域にとっては欠かせない遺産である。人に歴史があるように地域にも歴史があり、熱い時代を語り継ぐことで、熱い未来を創造していくことが出来るのではないだろうか。

私は、連塾の塾生として、そして両備グループに所属する一員として地域遺産の継承とコミュニティの形成に少しでもお役に立てればと考えている。

夢プロジェクト K <地域創生・人財塾> を目指して

藤井 清治

1. はじめに

近年、地域を取り巻く環境は著しく変化を遂げている。

「行政」に関しては、本格的な地方分権時代を迎え、地域間競争の激化、地方財政の窮乏などの厳しい状況の中、財源確保が大きな課題となっており、地域の自立化・個性化が求められている。

「住民」の側でも、ゆとりの豊かさが実感できる生活環境を望んだり、会社人間から地域人間へとライフスタイルが変化し、コミュニティの重要性が再認識されつつある。

また、NPO、NGO 等、地域や自分の興味の中で社会貢献をしたいという人々が増加しており、こうした動きは、地域づくり・まちづくりの観点からは新たな担い手となって現れてきている。

「産業・企業」においても、グローバリゼーションの進展などの厳しい変化に加え、ベンチャービジネス、なかでも地域社会への貢献を中心課題とするコミュニティ・ビジネスや SOHO などの、これまでとは異なる個人事業者が出現してくるなど前向きな新しい動きが出てきている。こうした動きは、新たなビジネス観、産業観、労働感の誕生といえ、地域社会とのかかわりが以前とは比べものにならないほど深くなってきている。

さらに、「地域全体」としても、コミュニティの再生・創造、環境保全・リサイクル、高齢者・福祉対策の充実など新たな使命が課せられてきている。

こうした、地域を取り巻くさまざまな変化に対応できるように、わがまち「児島」の地域づくり・まちづくりにおいても変化が求められてきている。それは、国の施策・方針に応じた外発型・ハード偏重型の振興から、地域独自の戦略に基づく内発型・ソフト中心の活動への変化である。

現在私は、「住み続けたいまち児島」の実現に向け、地域の実践活動（地域で学び、地域で考え、地域で行動）に携ってみて、気づいたことを検証してみました。

〔検証〕

- ① 現在の活動が、地域のニーズに基づいていると言えるか
- ② ニーズを常に確認しそれに応えるために、活動や体制を変化させているか
- ③ 地域をよりよいものに変えるために活動するというなら、地域の変化に応じてまず自分たち自身を変える意欲や力が求められている

このように気づいたことを調べたうえで計画し、それを試行してから実施し、その経過や結果を検証し、より多くの現場で共有するという流れが活動の運営をよりよいものにするための基礎（PDCA の経営サイクル）となりうる。

こうした活動を通じてきちんと成果を実現するためには、地域の資源を有効に活用し、特色ある発展を目指す「地域経営」という考え方と、素晴らしい「人財」づくりが重要である。

今後ますます激しくなると予想される地域間競争においては、「地域づくり・まちづくり」という考え方に基づく戦略的な地域運営、地域自身が自分たちでそれなりに自立して考え地域の問題・課題を解決する自己解決能力、日常の生活や環境を自分たちの手でよくしようとすることがそこに住む人々を元気にし、地域の生活の感性を豊かにする。

地域に住む人々が、「このまちをどうしたいのか」「どうあるべきか」といった哲学・思想（ビジョン）がないと魅力ある地域づくりはできない。

地域に特有の個性が求められるように、地域産業にも個性が求められる時代である。例えば観光業は、産業観光や商業観光という産業・ビジネスの融合化が進んでいる。地域は産業を融和さえ、融和した産業は地域固有のものとなる。これからは一次、二次ではなく、地域そのものが産業の固有名詞となる時代ではないか。地域づくり・まちづくりは人間と人間の、組織と組織の、コンセプトとコンセプトの、資金と資金の、そして、人間とコンセプトと資金などの新結合の結果として、新たな地域活力やビジネス創造の可能性が生まれてくる。こうしたパラフルな「地域力」を実現するため、私は「夢プロジェクト K（地域創生・人財塾）」を立ち上げ、魅力ある地域を創生する活動を開始する。

「夢プロジェクトK（地域創生・人財塾）」の取り組み

「地域経営」「人財」による地域創生（地域・コミュニティの創生）が今求められている。

「地域経営」

地域経営とは、地域の資源（地域固有の自然環境、歴史、文化、生活様式、農林水産業、地場産業、まち並み、景観、人財、ノウハウ、資本など）を活用して、地方自治体における地域政策の実行と各地域経営主体（経済団体、NPO、企業、地域創生リーダー、地域住民等）によって行われる活動が、相互に連携をもって行われること。——協働関係（お互いの違いを認め合い、共通の目標を実現するために対等の立場でお互いの特性、適不適に応じて役割分担して行うことにより、一足すーが三、四になるような関係）により、地域経営が効果的に行われる。これらが充分行われることによって、地域の諸問題の解決・地域の住民生活の向上が図られる。

〔効果的要因〕

「地域資源を活用したコンセプトの存在」

- ① 誰にでも分かりやすい目標、行動指針のようなものができあがり、事業実施に際して、利害関係者、地域住民、行政、各種団体などの関係者の同意・賛同・参画を得やすくなる。
- ② 地域・まちの産業政策に対するスタンスが明確になることで、事業者などが自らの将来像を描きやすくなる。
- ③ 特定の産業なり地域資源なりを強調することで、他の産業においても核となる産業との連携を強めようとするのが考えられ、そこに地域間連携が生まれ、地域内循環経済が強められる。
- ④ 当該産業の集積度がたかまり、新たな視点の切り口による再編成を促し、製造業者・加工業者・小売業者との事業連携の実現が図られる。

「地域一体性や継続性を有する強力な推進体制」

- ① 地域に存するさまざまな主体の関係である「地域全体の推進体制」
実際の事業を行う推進組織（事業実施機関）、これらの組織におけるリーダー、活動のための資金の新たな仕組みや枠組みが必要となる。

「プロセスの重視」

- ① 地域の課題の存在、まちづくりのニーズの把握（行政・住民の協働）
- ② リーダー・市民起業家の発見・発掘・登用・育成（広く地域・まち全体の利益のために責任をもち、積極的に行動できる人財）
- ③ 話し合いの場の創出（まちづくり協議会、ワークショップなどの開催）
地域という視点で、住民や他の利害関係者、関連する団体を巻き込み、多くのアイデアを終結し、当該地域の目指しているコンセプトの整合性をとりながら、今後さまざまな方法や仕組みの創出を図る。
そこで、思いもよらなかった異業種間（例えば工業と商業、商業と観光、農業と工業など）の連携の話や、ボランティア活動との協働関係（高齢化対策と検討している商店街とボランティア団体との連携など）が出てくるなど、地域の中で活躍するさまざまな地域づくり・まちづくり活動団体の新たな関係の構築が行われる。
- ④ 推進体制の確立（各主体の役割分担の明確化、および関係性の樹立）
- ⑤ 実施事業・活動や施策の決定
地域づくり・まちづくりの事業は多くの関係者が参加する・関係する事業であることから、それらのすべての人々の意思疎通をできるだけ図る意味でも、わかりやすいコンセプトの関係を説明することで行動に結びつきやすくなる。
例えば、観光産業を核としたまちづくりにおいて、その地域でとれた産品をその地域の業者で加

工し、地域内の商店街等を通して、その地でしか買うことのできない創意と工夫を凝らした傷心として提供する。このように産業間・主体間の連携に配慮する。

⑥ 事業実施

例えばイベントを行う場合、通常であれば商店街の活性化のため客寄せ的なものになるケースが多いが、これを地域住民（一般市民を含む。）ためになるようにするにはどうすればよいのかという発想で行うことで、多くの住民の参加が期待できる。（例えば、フリーマーケットやリサイクル活動など）

⑦ 効果測定、評価

活動の過程においてそれだけのことを実行したかが重要でない、どのような結果・成果を出せたかである。

地域の魅力を適切にアピールするとともに、地域の魅力を創造する活動をマネジメントしていくPDCA リサイクル〔計画 PLAN→実行 DO→評価 CHECK→必要な修正対応活動 ACTION〕の実践が重要である。

この繰り返しである。（継続は、力なり。）

「人財」

人財とは、自分の独自固有の長所を活かすことで、自分を活かし、他人を活かし、世のため、人のためになるような行動ができる人

地域経営におけるリーダー（人財）は、協働型の組織においてリーダーシップを発揮し、継続的に地域の組織と人を活かして活動していくことによって、地域に素晴らしい効果が創出されるのである。

(1) パラフルは地域力（経済資源・人的資源、社会関係資源、文化資源、環境資源の合力）を持っている人

- ① 奥行きのある専門性を持った経験
- ② 年を取っても意欲を持つ
- ③ ネットワークを大切にする。（精神の軸をしっかりととしてよそ者を排除するのではなくて、違う価値感を認めていく社会性を持ち、外部の人の力も借りていく。）

(2) 人間力を育む。

自分で学び、自分で考え、自分で答えを出していくことのできる生きる力

公共の精神があつて家庭・地域を大事にし、歴史や伝統文化を尊重し日本人としての誇りを大切にする人

(3) 組織をめぐる内外の諸条件の変化を明確に的確に捉えることのできる能力

(4) 認識した事実から問題を感じとる能力であり、物事に対する価値感である。

(5) 問題を捉え、検討し、実行し、その実行を統率していく力である。

(6) その人の人間性、人間的魅力を含めた人的影響力

(7) 独立独歩の志（目標には、それを達成するための役割分担や手法や明確な使命、時限が必要。）が高く、地域のために情熱的に取り組む人。

(8) 先見性のある地域リーダー

地域の将来を考え、地域に影響を与える重要な要素を的確に把握して目指す方向を打ち出し、それが実行され成果を出したとき評価される。

ものづくりを通して、グローバルに考えローカルに行動する人財

(9) 地域の人・地域サポーターのやる気・熱意を生かせる人

(10) リーダーは、常に学びチャレンジしつづける存在。

「気づく」ということがとても大切なのです。なぜかという、それによって新しい視野が広がる。それが「学び」へのきっかけになりますし人間性の幅を広げて奥行きが深まる。そして

「学び」がなぜ大切かというとはチャレンジのベースになる。みなさんが自分自身を変えたい、今の自分ではなくて、もっと進歩した自分になりたいと思ったとしたら、何よりも新しいことにチャレンジすることが一番である。そのためには、きちんと学んで足元を固めてからチャレンジすることが大切である。

(11) 自信を持つこと、死生観を持つこと。

自分を大切に、自分たちが世の中を変えていくんだと自信を持って生きていく。一度しかない人生をどのように意味のある生活にするのか、優れた才能と恵まれた環境のもとに生まれた人生をどう生きるのかに思いをめぐらせて充実した日々を送る。

(12) マルチな目（視点）を持ち、マルチに考え、マルチに行動する「複眼思考型人間」

いろいろなことに興味をもって、全く関係のないような事柄と事柄を有機的に結びつけて（多くのことを知り、理解し、それらをリンクさせる。）、新しいものを生み出していける能力を持った人

〔私のコンセプト〕

夢プロジェクト K<地域創生・人財塾>

夢・希望・志を持って、わがまち児島を改革する。

志民（市民）の皆様と行政が情報を共有し、その情報に共鳴し、共に未来を創る「協働、共生、共創、共学、共感」の地域づくり・まちづくりを推進。

児島の子どもたちに夢・希望を与えたい。児島から国内そして海外へ発進。

このロゴマークは、イニシアルである K（児島）、3（児島3白、いかなご・塩・綿）

+（+記号は、人と人とのつながり・人と自然のつながり・人と歴史のつながりをもとに、常にプラス思考による積極的な地域づくり・まちづくりを推進）



〔参考文献〕

(財) 中小企業総合研究機構. 『地域経営・まちづくり』

「束子 TAWASHI」の実践活動

藤井 裕也

私は、塾生として、地域創生を目指して、「トイレ掃除」を実践した。具体的には、大学で掃除同好会「束子 TAWASHI」をつくり、主に大学や地域の清掃に取り組んでいる。私がトイレ掃除を実践したきっかけは、トイレ掃除で、「人が変わった」「会社が変わった」という話を聞いたからである。トイレ掃除を実践することによって、学校では、荒れが収まり、地域では犯罪率が減少し、企業では、業績が伸びたという事例が報告されている。また、大学の清掃員の人が、学生が酒盛りの後トイレにはいたものを「近頃の若者は！」と不満を漏らしながら処理していたところを目撃したこともきっかけとなった。そこにあったトイレの掃除道具入れは殴られて破損し、ボコボコになっていた。

トイレでよく言われるのは、4Kである。4Kとは、「汚い、暗い、怖い、臭い」である。地域の公園などにある公共の場のトイレはまだまだ汚い。トイレが人の心を映すものだとしたら、トイレが汚いということは、トイレを使う人の公共心、道徳心の低下、後に使う人や掃除をする人のことを考えない自己中心者が増えてきているとはいえないか。人々の心の暗い闇の部分がトイレの汚れとして表面化しているのではないだろうか。

地域創生をなすためのポイントは、一人ひとりの心を動かすことであり、意識改革である。一人一人の意識改革によって、一人ひとりが少し行動を起こせば、地域は今より格段によくなる。私はトイレ掃除の実践を通してトイレ掃除が、人の心によい作用をもたらし、地域創生にとっても有効であるということがわかってきた。

イエローハットの創業者である鍵山秀三郎氏は、数十年にわたって、一日も欠かさずトイレ掃除を実践している。鍵山氏はトイレを掃除する理由として次のようなことを挙げている。1、謙虚な人になれる。2、気づく人になれる。3、感動の心をはぐくむ。4、感謝の心が芽生える。5、心を磨ける。(鍵山、2005) 鍵山氏は社員の心の荒みをなくしたいという思いから、一人でトイレ掃除を続けられたのであるが、今では日本全国否、世界までもトイレ掃除の運動は広がりを見せている。これは鍵山氏の、人の心の荒みをなくしたいという志と、日々の地道な実践が実を結んだといえる。私は昨年、鍵山氏と会う機会に恵まれたが、とても腰が低く、穏やかなお人柄だった。私も、鍵山氏を手本にして、地道に実践を積み上げようと決意した。

掃除同好会「束子 TAWASHI」は、清掃活動や学内外の団体との交流活動等を通して、一人ひとりが人間的成長を目指し、学生生活を充実させることを目指している。「束子 TAWASHI」の主な事業は大学や地域のトイレ掃除である。大学では授業が始まる朝の七時半過ぎから学内のトイレ掃除を始める。朝早いと、なかなか起きられないときもあり、途切れ途切れのときもあったが、なんとか実践を継続できている。なかなか朝起きられない私は、早起きの習慣を身に付けることも目標である。トイレ掃除が終わった後はなんとも言えないすがすがしさと、トイレの雰囲気も明るくなり、一日のスタートにはとてもいい。地域では、公園のトイレ掃除を行った。とても喜ばれ、掃除には、人と人との関係を良くする力があることがわかった。言い換えれば、人と人をつなぐ「連」をよりよいものにするのに、掃除は有効であるといえる。「束子」は清掃活動以外に、学内外のボランティア団体との交流活動にも取り組んでいる。私は、掃除同好会「束子 TAWASHI」を結成する際、鍵山氏が相談役である「日本を美しくする会」の岡山支部の「岡山掃除に学ぶ会」の例会に参加させてもらった。「日本を美しくする会」は、清掃を通して心を磨こうということで活動している団体である。今でも、「岡山掃除に学ぶ会」の例会に参加可能なときは参加させてもらっている。昨年度は、大学生協の学生団体が行った、東部クリーンセンターの見学に参加したり、県のボランティア支援センターが主催した「ボランティアをする学生の交流フォーラム」に参加するなどして、様々な団体と交流をもつことができた。交流活動でえたつながりを今後の活動に活かしていきたい。

今は、何事も無く活動することが出来ているが、「束子 TAWASHI」ができたところは大変だった。しかし、様々な人々の支えがあり、活動することができている。はじめは雑巾一枚でトイレ掃除をしていたが、なかなか雑巾一枚では長年たまった汚れはおとせない。そこで、「岡山掃除に学ぶ会」の方々にご指導を頂き、私たちはトイレ掃除をするとき、サンドメッシュなどの少し変わった道具を使用す

るようになったが、それらの道具は「岡山掃除に学ぶ会」からいただくことができた。また、掃除道具を保管し、乾燥させておく場所がなく、困っていたが、大学の清掃員の方が少し広めの掃除道具を保管し乾燥させる場所を提供してくれた。また、「束子」の活動資金はなく、チラシなどを印刷するときは自腹を切るしかないという腹に決めていたが、「束子」が活動していくための資金は活動に賛同して下さった大学のOBの方から志としていただき、とても助かった。さらに、宣伝などに使う「束子」のロゴマークをデザインのプロの先生が作ってくださるなど、多数の方々の協力があって、活動が成り立っている。言い換えると、「束子」の活動は「連」によって成り立っているということができる。

「束子」としての活動を始めてはや一年が経過したが、色々なところで変化が見られるようになった。例えば、大学のトイレである。大学のトイレの数は数えたことはないが、学生が一万人ほどいるのだから、ものすごい数の便器がある。その中で、私たちは主に12のトイレをぐるぐると周期的に回りながら掃除をしている。ある日、トイレにはいると一年前に比べてトイレが綺麗になっていることに気がついた。一年前と写真などで比べられないのが残念だが、目にみえる形でトイレに変化が出てきた。一年前トイレの床に散乱していたトイレットペーパーの切れ端は見かけないようになった。「継続は力なり」を感じることでできた瞬間だった。また、トイレを使う人が掃除をする人や、後に使う人のことを意識して綺麗につかっているかどうかは分からないが、汚れも少なくなり使う人の使い方が良くなってきたと感じることが出来た。最初のうちはすぐに効果は見えてこなかったが、一年たつてようやくトイレ掃除の効果を感じる事が出来た。私の目指していた「人と人との思いが行きかうトイレ」に少し近づけたのかもしれない。日本人ならほとんどの人が一日一回はトイレに行く。きれいなトイレが増えれば、たくさんの方がいい気持ちでトイレを出て行けるようになるだろう。また、他に一年活動をしてみて変化があったものは、自分自身である。「束子」の活動の目指すものとして、人間的成長がある。人間的成長が出来たかどうかをはかる一つの事例として、次のようなことが挙げられる。例えば、大学の廊下に紙くずが落ちている。一年前の私は、それに気づきもせず、通り過ぎていた。たとえ気づいていても拾わなかった。しかし、今では、ゴミが落ちていると自然にゴミを拾うようになった。これがトイレ掃除によるものかどうかは一概にはいえないかもしれないが、トイレ掃除によって、自分自身変わってきたと感じるのである。

昨年度は、地域のクリーン作戦を大学生が主体であることを企画していた。クリーン作戦といっても、単に清掃をするということではなく、ボランティアをする学生団体同士の交流を深めるという目的で計画していた。なぜなら、岡山大学にはボランティアサークル同士の繋がりが薄く、互いの情報も共有できてないため、クリーン作戦を互いのつながりを深めるきっかけにしたいと考えていたからである。あいにく、天気が下り坂だったので、やむなく中止になった。しかし、企画中に塾生の方に町内会の方を紹介していただいたり、様々な学生の団体と連絡をとることができたので、今まで接することの無かった個人や団体と繋がりもつことができた。今後の活動にここで得たネットワークを活かしていきたい。また、昨年度県のボランティア支援センターの行った「ボランティアをする学生の交流フォーラム」に「束子 TAWASHI」も参加した。フォーラムでは様々なボランティア団体と交流し、活動を知ることが出来たが、もっとも印象的だったのが、「ボランティアセンター」である。美作大学のボランティアセンターは、学生にむけてボランティアの情報を発信する拠点として機能している。学生ボランティア団体へ地域などから寄せられるボランティアの情報を発信するなど、組織的体系的にボランティア情報を発信している。岡山大学でも、「ボランティアセンター」にプラスして、学生のボランティア団体同士を結びつけるような役割をもったものを出来たら作りたいたいとも考えているが、人の数がまだまだ足りない。今後の課題である。

最近「束子」はトイレ掃除だけでなく、国際協力にも力を入れている。トイレ掃除で足元から実践していくことも大切だが、遠くに目をむけることも大切である。昨年は貧困を学びにフィリピンのスラム街やゴミ山を訪問してきた。目に入ってきたのは衝撃的な映像だった。極度の貧困は人から人らしい生活を奪う。フィリピンで見て感じた貧困のすさまじさをより多くの人に伝えなければならない、貧困で苦しむ人々を支えていかなくてはならないと強く感じた。私たちが、国際協力という形で日本と貧しい国を繋ぐ「連」になればこんなにうれしいことはない。貧困についてたくさんの学生に知ってもらうため、「束子」では今年の夏にネパールへのスタディーツアーを企画中である。

今、「束子」の活動は、トイレ掃除と国際協力の二本柱である。トイレ掃除で地に足のついた活動をしなが、遠いところにも目を向けるという意味で国際協力も行っていくつもりである。「束子」という名前には、将来、人を束ねられるような指導者になっていこうという思いがこめられている。活動の中で様々な人と出会い、様々な経験をし、「束子」にこめられた思いを実現できるようこれからも努力したい。

【参考文献】

鍵山秀三郎著 亀井民治編 (2005)『掃除道』PHP 研究所

鍵山秀三郎著 (2005)『あとからくる君たちへ伝えたいこと』致知出版社

地球温暖化と地域創生

松浦 省吾

1. 地球温暖化を実感する現状

地球温暖化に関する世界の研究者らでつくる「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」は2001年の第3次報告で2000年二酸化炭素CO₂濃度368ppm(産業革命前280ppm)が21世紀末540~970ppmに増加、その結果1.4~5.8℃の地球の平均気温の上昇予測されることを示したが、2007年2月の第4次報告では、人間が排出した二酸化炭素CO₂などの温室効果ガスが気温上昇の原因である可能性が90%以上の確率で確信できると断定し、このまま化石エネルギーに依存する社会が続いた場合、最大6.8℃の温暖化が予測されると更に上方修正した(※1)。

我々の身近な暮らしの中、例えば、桜の開花時期が年々早まり、紅葉・落葉の時期が年々遅くなっているなど、四季の変化がおかしくなっている状況、更には暖冬、集中豪雨などの異常気象と呼ばれる現象の出現回数が年々増加(※2)している現状からも実感できる。

このまま地球の温暖化が進んだ場合、一体どうなるのかについては、もう誰もが認識していることでいちいち列挙する必要もないが、要するに良いことは何もない。

化石燃料を燃やし続けて放出した地球上の二酸化炭素CO₂は陸の森林か海に吸収してもらうほかに、二酸化炭素CO₂の放出を抑制できたとしても、その影響は今後数世紀から数千年にわたるとも言われている(IPCCⅢ報告2001)

※1 世界のCO₂排出量は2000年現在で242億トンと推計され、1950年の排出量からは約4倍に、また1990年からは7.9%増加している。

※2 異常気象には異常高・低温、異常多・少雨に分けられるが1998年から2004年にかけて日本で発生した異常気象の件数のうち、異常高温がのべ1041件と最も多く、異常低温の発生件数の約8倍であった。

異常高温・低温は月平均気温の平年差が平年値の統計期間の標準偏差(数値の散らばりの範囲を示す値)の1.83倍以上となった場合を指す。異常高温が出現した回数は1940年代から徐々に増え、1990年代以降は過去100年間になかった頻度で季節を問わず出現している。

2. どうしてこんな事になったのか

こんなことになってしまった原因は化石エネルギーの使いすぎに他ならない。地球温暖化問題は基本的にエネルギー問題である

ひたすら物質的な充足を追い求め、大量生産、大量消費、大量廃棄を繰り返し、有限地球で繰り返してきた現代の大量物流社会がたどり着いた帰結である。

46億年前に地球が誕生し、20万年前に人類が誕生した。その長い時間の流れの中で、わずか数十年という短い時間で急激な地球環境の劣化が起きている。

地球上のあらゆる生物のなかで人間だけが持つ、ものに対する果てることのない欲望を満たすために、地球にものすごい負荷をかけて、地球環境の急激な劣化をまねきながら今日の豊かな生活を手に入れた。

しかし、この負荷は地球資源の自然循環許容量をすでに超えており、人類存続の可否さえも問われている危機的な状況であると言えよう。

このままひたすらに豊かさと便利さを追い求めるのが正しい生き方なのかどうか不安を感じるほうが、人間として健全な感覚であろう。

3. 地球にやさしい

『地球にやさしい』という表現をよく聞く。

地球環境に負荷をかけないという意味で使われるが、地球で人間が住むことのできるのは、巨大な岩石で構成された球体のごく表層の、水と土と空気のある部分である。

地球の大きさをサッカーボールの大きさに見立てると、地球大気の質量の80%が存在する対流圏は

0.2mmの厚みの膜に過ぎない。ましてや人間の住める空間となると更に薄い、0.05mmほどのものである。

人間が化石エネルギーを使いたいだけ使って影響を与えることのできるのは、せいぜいこの程度の薄い膜に例えた空間に過ぎず、人間がやさしくしようがしまいが、これから先何が起ころうが、この薄い膜が剥げ落ちたくらいでは地球にとっては痛くも痒くもない。

私たち人間は他の動植物や鉱物などと同じように、地球という物体の構成要素の一つにすぎない。その人間が、地球にやさしくしてやろうなどという傲慢で思い上がった考えを持つから、あたかも地球や自然を支配できるかのような錯覚に陥るのである。

私たち人間は地球の中で存在できていることに心から感謝し、愛情と畏敬の念を持って地球や自然と接しなくてはならない。

今こそ、モノを大切に作る心、自然への愛情と畏敬の念を皆が持たねばならない時である。

4. 国中にごみがあふれている現状

我々は年間に5200万トンものごみ(家庭から発生する生活系廃棄物が主体であるが、事務所や飲食店から出る事業系の廃棄物も含む)を排出している。産業廃棄物に至ってはその8倍の4億トンもある。

ごみの組成は、紙、布、木、竹、プラスチック、厨芥、不燃物などに分けられるが、不燃物以外のおよそ80%のごみは焼却処分されている。ここでもその処分のために化石エネルギーが使われ、そして温室効果ガスを出している。

ごみを焼却するといっても、可燃性のごみに単純に火をつけて燃えるにまかせるだけでは完全に燃え尽きることはなく、燃焼温度が低いため有害なダイオキシンが発生するので化石燃料を使ってより高温で処理する。(かつては単純に火をつけて燃やす構造の焼却炉が学校などにあったが、ダイオキシン問題で完全に姿を消している。厳密にはダイオキシン対策法という法律によって家庭で出るごみを裏庭で焼却するのもご法度。)

このようにして焼却しても大量の灰(焼却残渣)が出る。かつてはこの灰は埋め立て処分していたがもうこのままでは捨てる場所がないため、更に化石エネルギーを使用して高温で溶かしてガラス状(スラグという)にして減量化し、埋め立て処分或いは再資源化している。

昔(といっても、つい半世紀ほど前まで)は家庭から出るごみも僅かなもので、焼却処分しても発生する二酸化炭素の量は陸上の植物が充分吸収できる範囲のものであった。更に、江戸時代ではごみそのものが出ない、完全な使い切りの循環型社会であった。

私たちは、ひたすらに豊かさや便利さを追い求めた結果、世界有数の生産大国、消費大国となると同時に廃棄物大国にもなった。

5. 『もったいない』

今の私たちの生活は大量の化石燃料を燃やさなくては成り立たなくなっている。

にもかかわらず、日本のエネルギー自給率は極めて低く、その殆どを輸入に頼っており、世界情勢一つで生活が左右されるという極めて危ういバランスの上で成り立っている。

食料もまた然り。その自給率は30%足らずで、経済力にものを言わせて世界中から買い集めている。世界の先進国の中でこんなに低いのは日本だけで、殆どは自給率が100%を超えている。

食料の70%を輸入に頼るほどの日本で、その25%はごみとして捨てられている。しかも殆どは焼却処分されている。コンビニ弁当の売れ残り、宴会やパーティーでの残り、家庭から捨てられる食品、或いは食品メーカーから出る賞味期限切れの「まだ食べられる食品」(※3)など、昔から日本人が持っていた「もったいない」という美しい精神が劣化した結果がこれである。

※3 賞味期限切れといえ、今年1月の不二家のペコちゃん騒動がある。賞味期限が1日過ぎた卵を原料として使ったことに会社が潰れるほどのバッシングを受けた。

たしかにコンプライアンスという点では問題があるし、会社としての対応もマヌケであった。しかし、元はといえば現場の担当者に「もったいない」との気持ちが働いただけのことであって、会社を潰す程のものでもなからう。賞味期限という根拠のあいまいな数値を1日過ぎただけで捨てることの

問題も考えてよいのではなかろうか。

ごみの問題を考えるとき、3つのRの取り組みが必要とよく言われる。

① Reduce (減らす) ② Reuse (再使用) ③ Recycle (リサイクル) の3つであるが、3番目のリサイクルが環境問題解決の切り札のように言われているが、リサイクルも重要課題ではあるが、リサイクルすればするほど化石エネルギーを使って二酸化炭素を放出することを忘れてはならない。③の Recycle (リサイクル)は Refuse (断る)に置き換えられるべきである。

6. 今やれること

私たち人間は地球の中で存在できていることに心から感謝し、自然への愛情と畏敬の念を持って、人と人とのつながり、人と自然のつながり、自然と自然のつながり、これら命のつながりを大切にしなければならない。今こそ「もったいない」をキーワードにモノを大切にする心、自然への謙虚さが大切であると一人ひとりが思う時である。ただ思うだけでは何も代わらないと言われるかもしれないが、思うことが全ての第一歩なのである。

その一環として、私は今、自分がやれることとして、3つのR (Refuse, Reduce, Reuse)の観点からライフスタイルを変えている。

- 1) 「もったいない」という美しい精神の大切さを家族全員に繰り返し説いている。
- 2) ペットボトルの水は買わない、水道ですましている。缶ビールはやめて瓶ビールに切り替えた。
ペットボトルから作るシャツを着ない、薦めない。
- 3) 環境に悪いもの、ごみの発生源になるようなものは買わない、もらわない、使わない。
そして「もったいない」という美しい精神が大切であることを家族単位から地域単位へと広めて行きたい。

主たる引用文献

- IPCC. (2002). 『IPCC 地球温暖化第3次レポート』. 中央放棄出版
山陽新聞記事. (2007.2.3). p3
気象庁. (2005). 『異常気象レポート2005』

団塊の世代を呼び込み地域の再生を

守屋 基範

田舎暮らしブームの中で

2007年問題が社会現象としてクローズアップされている現在、その市場から人材を確保する施策を講じるか否かで今後の地域づくりは大きく変るといわれています。

私の仕事のフィールドは笠岡諸島。過疎高齢化の先進地として、日々いろいろな取り組みを行い少しでも人口減少に歯止めをかけたいと思って仕事を進めています。

平成13年にこの仕事について今年で丸6年になるが、団塊の世代の田舎暮らし特に「島暮らし」の要望は電話やメールの数が物語っているが、年々高まっているように感じます。

団塊の世代の生き立ちと退職後の動向

団塊の世代を地域に呼び込むにあたり、団塊の世代がどのような生き立ちで退職を迎えるのか、団塊の世代は何を考えているのか？その生き立ちを見る中で的確に抑え仮説を立て戦略をねることが必要です。

生まれた時から人口が多いということで、ずうっと競争にさらされ続けた年代といえます。小中学校では多人数クラスでもみ合い、進学や就職についてもいつも競争に明け暮れ、会社では高度経済成長期に入り働き蜂のように働き、家庭を持つころには住宅不足を招き、大都市近郊に核家族向けの団地が次々と建てられ、1960年代～1970年代の第二次ベビーブームが起き、生まれた子供たちは「団塊ジュニア」と呼ばれるようになった。

そして、2回のオイルショックを経験し、30代後半にバブル景気を迎え、中間管理職となった40代半ばにはバブル崩壊とIT時代が訪れ、そして50代には成果主義の波により、リストラや早期退社を経験した世代と言えます。

そんな昭和22年から昭和24年の3年間に生まれた世代の人口は約670万人で、そのうち約280万人が今年から順次定年を迎えます。

三田誠広著「団塊老人」の中で①団塊の世代は群れたがる。②団塊の世代は理屈っぽい。③団塊の世代は帰属意識が強い。として団塊の世代の特徴を指摘しており、老後を生き抜くポイントとして、①愉しく働く、可能な限り働き続ける。②自分の居場所を確保し、生きることの充実感を維持する。③少ない費用で喜びを得られる文化的な趣味を持つ。3点を挙げている。年金も少なくなり子供も当てにできない中で、これまで会社という独自の社会に帰属していた団塊世代がこの社会から定年を機にこれまでとは何ら変らないにも関わらず定年という理由で追い出される。

会社に代わる新たな帰属場所として生活費用も余りかからない昔ながらの田舎のコミュニティを用意して、団塊世代が生きがいを持って生活できる仕組みがあれば団塊の世代を引き込めるのではないかと。

笠岡諸島における取り組み

少子高齢化の先進地である、笠岡諸島。7つの有人等島に一番人口の多い北木島1300人から一番小さい六島86人の7島合計2900人余りの人が住んでおり、高齢化率も55%といういわゆる「限界集落」がほとんどです。

過疎高齢化の先進地ともいえる「笠岡諸島」を舞台に「地域づくり」を行っている「NPO法人かさおか島づくり海社」の事業を考察しながら考えてみたいと思います。

平成14年度よりNPO法人の前身である任意団体「電脳笠岡ふるさ島づくり海社」で空家対策事業に取り組み、2007年問題が言われ始めた頃マスコミへの取り上げなどの追い風を受けながら徐々に実績を上げています。

移住第1号を平成16年2月に高島に迎えたのを皮切りに、北木島、真鍋島、白石島とこれまでの3年間に17世帯38名の移住者を笠岡諸島4島に迎えています。

空き家へ移住者が入るといことは、その移住者がその地域で同じコミュニティの一員になるということ。

移住者が何を求めており、それが受け入れる島側が求めているものと一致しなくても近いものであればこの取り組みは今後も一層進むものと思われる。

笠岡諸島は住みよい地域？

団塊の世代に関わらず、人が感じる住みよい地域とは何だろうか。

島の住みよい条件として①生活費があまりかからない②自然豊かな中で生活できる。③隣近所の顔の見える関係などが上げられます。

実際、団塊の世代を島に取り込む戦略として上の3つの条件をより磨きアピールすることが必要であるが、地域の住民が移住者を迎えることによるメリットを認識し、同じ想いで取り組みをしないと地域の活性化は図れないと思います。

地域のメリットとしてNPO側は、人口減による精神的疎外感が日々増す中で地域に移住者を受け入れることで新しい風を期待すると説明しているが、反面地域にどのような移住者が来るか判らないという不安感の方が強いのが現状です。

島への移住をすすめる時に「島でないと出来ないこと」をする目的で島暮らしを考えることが一番必要なことではないかと感じます。それは島でしか出来ない特徴を活かすということにつながり、その目的を実現するために地域がサポートすることで移住者は住み良さを実感するのではないかと思います。

地域が求めるものについては、それぞれの地域で違ってくるが、それが地域全体の議論の中でのものでなければならない。移住者が求める「島でないと出来ないこと」が「島が求めているもの」と一致した時にその両者が想いを同じくして力を発揮できるのではないのでしょうか。

コミュニティ再生にビジネス視点を

少子高齢化社会をいくら嘆いても問題の解決にはなりません。そこに住んでいる人が安心できる生活環境や安心できるコミュニティをどう作っていくかという意識を持って活動することが必要です。

これまで地域のサービス向上のために行政が音頭をとってボランティアでやられて来た事業もかなりあるようです。しかし、長続きしません。地域を再生する活動を仕事でやれて、皆から喜ばれ、地域が発展していけたらどんなにいいのでしょうか。

コミュニティ・ビジネスの提唱者細内信孝先生によると、社会参加の場、働く場をいかにつくっていくか。それをコミュニティ・ビジネスでつくっていくというのが私の考えです。コミュニティ・ビジネスとは、地域コミュニティを基点にして、住民が主体となり、顔の見える関係の中で営まれる事業のことを言います。また、コミュニティ・ビジネスは、地域コミュニティで今まで眠っていた労働力、原材料、ノウハウ、技術などの地域資源を活用し、地域住民が主体になって自発的に地域の問題に取り組み、やがてビジネスとして成立させていくという事業活動です。大切なのはビジネス視点を取り入れて継続性や信頼性をつくっていくことで、そういうことが結果として個人の自分興しにつながっていったり、コミュニティの元気づくりにつながっていくと思っています。と書かれています。

今後の地域経営の手法としてこのビジネス感覚が一番必要なことではないかと思っています。

地域コミュニティの再生について

今後益々過疎高齢化が進む中で、既存のサービス確保のためにもそれぞれの地域で今一度移住者をも視点に入れた地域再生の観点からの地域経営を地域ぐるみで考えなければならないと思う。地理的

に海に隔絶された島地部については陸地部と比べ危機感が大きいといった再生へのプラス要因もあります。

過疎高齢化の進んだ地域にとって、今の田舎暮らしブームは千載一遇のチャンスである。この団塊の世代が持っている技術やノウハウを如何に地域に取り込むかで他地域との差別化が図られ、今後益々厳しくなる地域コミュニティに光を呼び込むこととなります。

必ずしも定住人口の増加にこだわることなく、団塊世代の交流人口の増加も視野に入れて、人材はもとより、技術・ノウハウが地域の再生に活かせる仕組みづくりが望まれます。

「コミュニティ再生工場」

少子高齢化の波を受け地域が徐々にその機能を失いつつある。この年末に北木島の豊浦地区で唯一の小売業者が廃業し、地区には店舗はなくなった。それ以後は、隣の地区の小売業者が仕入れの帰り道に30分程度、豊浦地区の道端で店を開く。その時間を逃すと5k先の店舗まで買いに行かなければなりません。

人口減少で採算ベースに乗らなくなった小売業者に替わって島おこしのNPOがコミュニティ・ビジネスとして新しい事業を検討しています。

それは「コミュニティ再生工場」という仮称の事業です。

幼稚園の空き教室を利用して地域コミュニティ再生のための事業を作り上げていく工場という意味でその工場は地域住民で育て、利益は地域活動に役立てる仕組み。そのサービスの一つとしては小売店の復活はもとより、地域の高齢者が育てた野菜や採った魚などを安く仕入れて販売したり、高齢者の相談相手や何でも屋的なお助け事業、皆が集える食堂等の給食事業、外からの観光客も視野に入れた石の里北木島の観光事業などのサービスを複合して行う計画です。

団塊の世代が地域で暮らし将来のライフスタイルを実感できる体験の場を

これまでのように空家に団塊の世代を当てはめる政策ではなく、地域で団塊の世代が気軽に体験居住できる地域密着型の生活空間を用意し、地域での生活体験を通じて自らの取り組むテーマを模索する仕組みが急務であると感じます。

そういった地域コミュニティのセンター的施設を「地域密着型の生活スペース」として団塊の世代の生活体験の場と位置づけることができれば、団塊の世代が地域で新たなビジネスを構築し、地域との連携を持ちながら生きがいある生き方をすることが可能になる。

今後、団塊の世代を地域に引き込み戦力とするためには、受入を希望する地域が今後どんなビジョンで地域を運営するかを考えることが必要な時期に入りつつある。それは、前でも述べたが公的サービスの限界が刻々と迫っており、地域の課題は地域で解決する必要があり、行政に頼る人的・財政的裏づけが徐々になくなっているからです。

人材と資金を調達し、地域を運営する仕組みづくりとして、NPOであったり地域の自治会であったりという組織のあり方をあらためて考える必要がある。そんな時に団塊の世代が培ってきた経験と能力は今後の地域の力になると確信します。

地域を運営する視点でのNPO・自治会と行政との協働

市場経済の基本は「自助」である。自助を補完し、市場の失敗を是正するのが国、自治体、すなわち「公助」である。しかし、今後は両者の中間ないし混合した領域として、新たな「公」が台頭してくる。そこには「共助」という考え方が必要となる。助け合いや協働の部分を拡大することで自助と公助の隙間を埋めていこうという発想で、これを「豊かな公」とも表現している。採算の難しい分野では民による官の肩代わりは難しい。その隙間を埋めるのが「共助」という第3の領域である。それには市民の社会参加やネットワーク活動の充実が必要である。と佐々木信夫氏は著書「自治体をどう

か変えるか」の中で書いている。

地域コミュニティがNPO等により経営感覚で新しい「共助」の部分を担当していった場合、行政はもっと大きなくりの部分でこれまでの国の政策・補助金頼みの事業実施ではなく独自の政策形成を行い、自立できる自身体づくりのために経営感覚を持って行政人としての責任を果たすことが必要だと考えます。

これからは地方の時代。「真の豊かさをトータルで求める人間優先主義の流れが必ず起きる。」と佐々木氏も指摘していたが、そのためには地域からの発想により全体の流れを呼び込まないといけない。「ローカルからグローバルへ」という松畑熙一氏の「ローバリズム」の考え方を今後も実践して地域創生の一翼を担いたいと思います。

参考文献

- ・日本都市センターブックレット「豊かさとゆとりを体感できるまちづくり」
- ・団塊老人 三田誠広 新潮新書
- ・自治体をどう変えるか 佐々木信夫 ちくま新書

地域創生における熱き想いのネットワーク

山本 敏明

1. はじめに

これまで連塾において多くのことを学んだが、“一滴の大河”という理論と“面白がる精神”が深くこころに残っている。それと何といても忘れてはならないのが“連”である。つながり・つなぐということだが、実に意味深い言葉であると感じる。

2. 推進力—好きこそもの上手なれ—

“面白がる精神”について実務上で経験した記憶に残るエピソードを紹介したい。

私は以前十数年、公共建築の設計・監理に携わっていたが、ある町の文化センターの設計・監理をさせていただいた時の事である。公共建築を造るという面で言うと、建物つまりハードは出来上がったが、その後はそれを使う人や使い方の問題であることはよく言われる。建築するという事は、役所の職員で構成される建設委員会と何度も打合せを繰返し、時には地域利用者の声を吸上げながら、旧来の不便であった所や手狭になった所、福祉的な面から使いやすい寸法を広さ・高さ等細部にわたって検討しながら諸条件においてベストと思われる方向を見出しながら進めていくのである。

さて、いざ建物が完成すると、そこからはその建物をどのように使ってその価値を発揮するのかだが、公共建築においてはどれだけ利用されるか、どの程度維持管理がなされているかというふうが大別できる。どれだけ利用されるかということには、どうやって利用してもらえるようにするかとか、どう利用しやすくするか、それをどう広報するかにかかっている。また維持管理についてはいつもきれいにしてあるという清掃の問題、照明のランプが切れていたら放置せずこまめに交換するといった事などがあてはまる。しかしこれらのことは即座にできる事でもなく容易でもないであろう。ところが以前自分の目で見たその人はこれらのことを以外にも簡単そうにこなしていた。

当時丁度、町長に話を聞く機会があったので尋ねてみると、その建物のためにスタッフを決める時、町内の職員の中で希望者を募り作文を課したそうである。また、町民の中からも希望者を募りやはり作文を課したそうだ。それで私は納得できた。実にピッタリとした人選に思えた。

みんな活き活きとしていて楽しそうでもあった。特に私がいちばん町長の目の素晴らしさを実感したのは、センター長の下で実際の運営管理をしている町職員のKさんであった。

Kさんは建物引渡し前の設備機器の取り扱い説明会でもスタッフの中で一番物分りがよろしくなかったのである。何度も基本的なことを質問してきた。正直言って大丈夫だろうかとか先が思いやられた。ところが少し経って私は反省することになる。Kさんほど適した人はいないと思った。Kさんは自分のよく分からないところをひとつずつ紐解き、何が足りないとか、何が必要だとか専門家の立場でなく素人の立場から既成の概念をチェックし直したのである。町内外の一般の人が使いやすいと感じるために、利用上の説明を分かりやすくするために、それらのことが役立った。

意図された事だったのかもしれないが、私にはだんだんとそうなったように思えた。Kさんは自分が学んでいくことや利用者に喜んでもらうことを楽しんでいて、事実、休日も返上して県内や県外の同種の施設へお忍びで出向いては勉強したり、改善点を発見してきたりしては自分の運営管理に活かしていた。

お陰でその施設は同種の施設では県内トップの利用率を維持した。これは1年後くらいだったと思うが町長室を尋ねた時に聞いたのだが設計させていただいた立場からしても非常に嬉しい事だった。Kさんは町職員としてではなく、その施設を自分の建物のように可愛がり、利用者の要望にも快く対応し、何よりも敷居が高くなかったのは、ざっくばらんな人なつつこい雰囲気を持っていたこともあると思える。見た目は田舎のおじさんなのである。

このことから言える事は、好きであること、楽しみながらすることは必ずよい結果に繋がるということだ。これは“面白がる精神”に通じ、“好きこそもの上手なれ”という私の好きな言葉とも共通するものである。

3. 「活かす」「つなぐ」— “一滴の大河” をめざして—

活性化、創生において「活かす」・「つなぐ」行為は重要である。

最近「作州を桜の国に」ということで大桜育成プロジェクトが進行中である。大桜シンポジウムや大桜探訪ツアーも開催されている。個人的に関心があるのはひとつには、自分自身でも桜について考えたことがあり、桜でいっぱいのところを創れたらという発想を持ったことがあるからだ。

何年掛るか気の長い話だと思っていた。それにはある人との会話の中でヒントを得たため、もっと大きな規模で春になると幸せ感をいっぱい感じられる場所がたくさんと言うより広く創れたらという発想であった。ある人というのは県庁の職員の方で、桜の話をした訳ではないが計画中の公共建築物の修景について議論していた時、いい提案をいただいた。しかしそこで提案に出てきた樹木ではなく桜にしたという事があった。その後たくさんこのような事は出来てないが、最近大桜育成プロジェクトが始まったことで、関心を寄せている。また、参画もしていくであろう。これなど正に地域資源を活かし、各地のコミュニティが連携することで実現するプロジェクトで、コーディネーターや保存会の人、関心を寄せ取り巻く人たちにより育てていくものである。

これからの展望として更に広まり、別の地域でも似たような桜の保存意識が生まれ、また、新たに植樹も行なわれることを期待する。

関心を持つ二つ目の理由としては、次の記憶による。

小学生の頃だったと思うが、いとこ達と一緒に親に連れられて現在の真庭市にある醍醐桜を見に行ったことがある。花は咲いてなかったと思うので夏休みだったのだろう。その大きさにびっくりし、いとこ達と手を繋いで幹の太さを計ったのを覚えている。6人くらいでやっと最後の手と手が繋がったように思う。その醍醐桜が十数年経った頃全国ネットのテレビで放映され、その後毎年時期になるとテレビや新聞に登場している。途中で樹木医による大手術が施され、周辺の管理もし、地元の人たちが保存をしてきた。樹齢が示すように長い間の言い伝えによって守られてきたものである。

山に囲まれる丘のてっぺんに一本だけ雄姿を見せている光景は圧巻であり、写真家は雪景色までも撮っている。

これも貴重な歴史であり、財産である。これらの事で、大桜プロジェクトに参画し、特に醍醐桜に関して「つなぐ」「活かす」を実践していくこととする。

さらに地域の活用すべき資源として県北の木材がある。近年、環境問題が地球的規模で話題になり、エコ、ロハス、スローな・・・、自然素材、自然食品などをよく耳にし、仕事上でもエコ、自然素材などという言葉とは毎日お付き合いしている。

また、バリアフリー、ユニバーサルデザインとも親友である。ユニバーサルデザインというのは、物のデザインだけを言うのではなく、心のUDという言葉があるように物事について考える時の、ひとつの考え方の基盤となるものである。岡山県北は全国でも有数の木材の産地である。自然素材というものを考えながら、有効な資源の活用をめざしてUDの考え方を応用して模索中でもある。

杉には杉の、桧には桧の活用を考えるがそこにユニバーサルな視点を持って、かつリサイクルに寄与する方法を検討中である。“一滴の大河”をめざして。

私は昨年よりユニバーサルデザイン(UD)のセミナーやアドバイザー会議の聴講をしているが、アドバイザーは有識者(実践についても第一線でされている方々)と経験をお持ちの県民の方で構成されている。会議の様子を見ると、専門的で的確な判断や見解の違いや県民の視点での疑問点などが様々議論されている。これらのことは大切なことだと実感しながら参加している。

一部の偏った意見だけで方向性を出すのは危険である。いろんな意見を出し合いながら、理由や解決策なども聞いた上で納得しながら方向性を出したり、決め事の採決をしている。これは地域創生においてもコミュニティの中で話し合いをする場面では不可欠である。現に小学校校区を単位としての連合町内会の安全安心ネットワーク会議では校長先生、現場の先生(校長先生も現場の先生ではあるが)、連合町内会長、各町内会長、父兄で行なっている。様々な意見が飛び出す、本当に飛び出すくらいの意見もあり、特に危険度の高い注意事項のような話の場合、その人が参加していなかったら、或いは自分が参加していなかったら聞けなかった意見だと思つくと、できるだけ多くの地域の人が参加し、意見交換することは大切なことだと実感する。

地域には昔ながらに伝えられた文化や祭りがある。私の実家の地域では最近では、若い人が少ないからと言って祭りも廃止になっている。では、若い人がいれば復活するのか。祭りを主催する人の意欲と思いだである。

高齢化してきている。高齢者が第一線から退いてしまった後はそれを引き継ぐ世代が必要。

年功序列で順次年齢の違う人がいればよいが、親世代と子世代と大きく分かれてしまっていては親世代が第一線から退いた後は一気に子世代にシフトする。

子世代でもたくさんいれば、コミュニティの中の“若者たち”でチームワークをきかせ引き継いでいくこともできる。

タウン・ウォッチングの手法を採り入れ、「つなぐ」「活かす」ことで新たに魅力を見出し、祭りの復活と継承と魅力注入を行ないたい。

4. おわりに

連塾で学んだ2年間、いろいろあったが、笠岡諸島 in 真鍋島での見聞は良き成功事例として頭に残っているし、その後の取組みも見逃せないものがある。折角のたくさんの人との出逢い、この「連」を有り難く思い、これからも影響し合いながらまずは“一滴から”という精神で更に前へ前へと確実に進んで行きたい。

高校生による地域創生活動

- 「Student Venture Project 商業高校の各校一品運動」実践報告 -

吉田 信

1. はじめに

今日、少子高齢化社会の到来、地域の教育力の低下、地域のコミュニティの崩壊、核家族化、欧米社会の生活スタイル、そして産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等を背景として、若者達を取り巻く環境は急速に変化を続けている。

そして、このような社会環境の中で若者たちの意識も大きく変化してきた。その結果、後継者不足により地元商店街はシャッター通り変わり、都会を求めて若者達が県外流出していき地域の祭など伝統文化の廃止に追いやられている。さらには、ニート・フリーターの増加、切れる若者たちの増加、コンビニ社会の波、携帯社会等の結果をもたらしてきた。今、まさに若者たちが岡山を理解し、岡山を愛し、岡山に貢献しようという意識を持ってもらうための取り組みが求められているのではないかと。そのためには我々大人達が岡山の素晴らしさを若者に伝承していくことが必要ではないか。そして地元岡山に貢献しようとする若者たちの力を積極的に受け入れる市民・行政・企業等大人たちの意識が今必要ではないだろうか。

2. 地域創生に燃える高校生たち

連塾1年目は、岡山市内の専門高校（商業高校、工業高校、農業高校、家庭高校）5校の生徒が集まり、岡山市表町商店街の一角にハイスクールカンパニー「高校生の店 岡山彩商店 オリμπピア」を出店した。この取り組みは、それぞれの学科が持つ知識・技能などの特色を活かしながら連携して、商品の企画・開発から製造、販売、会計処理、株主総会に至るまでの一連の活動について店舗を構えて実践した。

そして連塾2年目は、昨年の経験を生かし「Student Venture Project 商業高校の各校一品運動」に取り組んだ。岡山県内の商業高校が、それぞれの地域の歴史、風土や伝統、地域の特産品を生き生きとつし出して、個性を主張しようというものである。地域の資源や地域性を生かし、また地元地域の企業や専門学校・大学等の協力も得ながら、実体験型起業家精神教育の一環として岡山県下10校がノウハウの連携を取りながら各校一品運動を展開してきた。独自に開発した商品は「各校ブランド」として商品化を目指し、製造、販売するというプロジェクトである。

これらの取り組みは、①産業界を支える有為な職業人の育成を図るため、早期から新規産業の創出等に必要新しいものを作り出す創造力やリスクを恐れずチャレンジする精神、自己責任、問題解決能力、実行力、コミュニケーション能力等の起業家精神教育の高揚を推進すること。②高校生が地域に根付き、高校生が地元の活性化に貢献する。そして、個人及び企業の後継者育成をはじめ地域経済の発展に貢献する将来のビジネスリーダーの育成を図ることなどの願いを込めたものである。

3. 活動内容

(1) 起業家教育指導者育成研修講座

- ①日 時 平成18年7月15日（土）、16日（日）
- ②会 場 岡山県立岡山東商業高等学校
- ③内 容 会社づくり、市場調査、商品企画、事業計画書作成、商品プレゼンテーション、決算処理、カリキュラム作成などの学習会など
- ④参加校 各校一品参加10校の生徒及び教員、備前市立平井小学校の先生も参加
- ⑤その他 今後各学校でそれぞれ商品開発・販売に当たることを確認

(2) 中間報告会

- ①日 時 平成18年10月12日（木）
- ②会 場 岡山県立岡山東商業高等学校

- ③内 容 ア 事例報告（岡山東商業高等学校、笠岡商業高等学校、琴浦高等学校）
 イ 実施事例のポイントについて
 ウ 地域と連携したプログラム実施の事例紹介
 エ 各学校の進捗状況報告
 オ ディスカッション（各学校の工夫点や問題点・課題等の情報交換）
- ④参加校 岡山県下商業高校 10 校

(3) 参加校と「学校ブランド商品」

①岡山県立琴浦高等学校



表 1（瀬戸大橋祭での販売）



表 2（琴浦高校ペナント）

児島は繊維産業が盛んであり、そのジーパンの素材となるデニム生地を利用した「携帯電話のストラップ」と「マイバック」を開発。また、今年度で琴浦高校が閉校になることもあり「琴高ペナント」（表 2）も開発し商品化。素材の生地は高級ジーンズの端切れを再利用したもので手触りや質感も高い。連携は「わがまま工房」、「倉敷芸科大」「(株)モリフロッキー」など。販売はせんい児島瀬戸大橋まつり（表 1）、閉校式他。

②岡山県立岡山東商業高等学校



表 3（おちゃづ de 美人 醤油梅味）



表 4（おちゃづ de 美人 素焼き）

地産地消、岡山らしさ、社会貢献をミッションにした模擬会社「Mensix（メンシックス）」を設立。商品開発はインターンシップでお世話になった「畠山製菓(株)」、デザインは「中国デザイン専門学校」とコラボレーションし岡山県産の五穀（もち米（津山）、黒米（総社）、赤米（総社）、きび（高梁）、あわ（美作））を使用したおかき「おちゃづ de 美人（表 3・表 4）」を開発。商品名のおちゃづは岡山弁でおやつの意味。販売は、高島屋岡山店、サンさん岡山、県観光物産店が常設店舗。その他各地イベント（東商デパート、大誓文払いええじゃないか 2006、プレまなびピア岡山）等で店頭販売。

③岡山県立笠岡商業高等学校

地地元パン屋さん「メルヘン」と連携し、笠岡名物無花果を使った「でえれえパン」と「カブトガニパン」を開発。小さなアイデアからみんなで話し合い商品化。

④岡山県立岡山南高等学校

家庭科と商業科とのコラボレーションで、キーワードは「健康食品、身体にいいもの」ということで「豆乳おからクッキー」を開発。インキュベーションセンターの「夢石庵」との共同開発。

⑤岡山県立玉島商業高等学校

地元の桃やマスカット、ブドウを軸に9月にプリンの商品開発をしたが売れ行き不調。その後「良寛みそパン」もやってみたがやや弱かった。そして「ふりかけ」を考案。学校の食堂や職員に試験的に販売している。

⑥岡山県立新見北高等学校

「早寝、早起き、卵ご飯」をキャッチフレーズに、卵御飯用「醤油」を地元業者と開発し販売。文化祭等で販売の予定。卵・御飯・醤油のセット販売もあり。

⑦岡山県立津山商業高等学校

「TSUSHO 鯉 FARM」を設立し「錦鯉」を育て販売している。また「津商イノシシラーメン」を県立久世高等学校の食品製造科と共同開発。現在学校として有限責任事業組合（LLP）を設立しようと準備を進めている。

⑧岡山県立勝山高等学校

勝山ブランドとして地元の産業を生かしたものをと考え1学期市場調査。9月に「勝山はのれんの町」ということで「のれん」の製造を業者と交渉。しかし、時間がない。きちんとしたものができない。なかなかうまくいかないということで、現在は「木の町勝山」ということで、風倒木を利用した木の製品「法被ストラップ」を開発。

⑨岡山県立江見商業高等学校

地元特産の食材を使ったお年寄り向けのヘルシー弁当「弁当」を「たつみや」料理店と共同開発。コンセプトは、「地元食材を使い、普通では買えない」とし山芋・アマゴ・麦を使用。

⑩玉野市立玉野商業高等学校

模擬会社「順風満帆」を設立し、地産地消をテーマに地元の菓子製造業者と共同開発し玉野市番田地区特産品・紫サツマイモ（紫イモ）を加工したオリジナル食品「ボクので番田」というペーストを開発、販売。

(4) 販売

各学校の状況に応じて地域のイベント、文化祭、常設店舗等で販売する。

4. 活動を終えて

報告会で岡山東商業高校の生徒は次のような感想を述べている。「今思えば、自分は自信や誇り、別にやりたいこともなくただ高校へ通っているだけの生徒でした。しかし、この活動に参加し活動していると、私の中で何かが変わりました。毎日が充実し、一生懸命出来ることを見つけるとも忙しく辛かったけど、辞めたいと思ったことはありませんでした。私にとって「やりたい事」とは「一生懸命出来ること」でした。夢中で仕事に取り組み、自分で何が必要なのか考えるようになりました。それでも失敗してとても悔しい思いもしましたが、その悔しさを糧にして次の成功に役立てるようになりました。そこから、先を読み、準備をすることで失敗をなくし、周りを楽にすることでより自分を成長させることが出来るということ学びました。」参加した生徒達は、自分なりに確かな手応えを掴んでいる。また笠岡商業高校の生徒は、「地域について学ぶ中、より地元を知ることが出来、さらに地域を身近に感じる事が出来た。」と話していた。津山商業高校の生徒は、「自分たちの意思と実行力があれば何でも出来ることを体験した。」というように、それぞれ自立（自己決定による行動）と自律（あらゆる部面において他者に依存しないで自ら生きる）を果たしている。商品開発などは創造性がないと考え出せず創造性の発見もあったようである。

5. おわりに

参加した生徒達には、自ら地域に目を向け、自らの問題として、自分たちの力で問題を解決しようとする気概が現れている。それぞれが住んでいる地域を理解し、地域を発見し、自己を見つめることが出来たようである。そして、企画立案能力、マーケティング能力、問題解決能力、折衝能力などを高めるとともに、ビジネスの楽しさと難しさ、商品開発の楽しさを学んだことにより「起業家マインド」の醸成も出来たようである。卒業後社会人となったときには、地域経済の活性化に寄与してくれると信じている。

地域創生、地域再生、地域おこし、地域の活性化は、国や県・市の政策によるものだけでなく、それ以上に何よりも地域住民の意識と意欲にかかっている。地方分権のもと地域が自律と自立を果たすには、住民参加が必須である。そういった意味から、私にできる地域創生の取り組みとしては、このように限られた範囲でしかできないが、これからの地域を担ってくれる高校生たちに少しでも数多くの体験を通して地元岡山を知ってもらい、考えてもらう機会を積極的に提供し生徒と共に一緒に歩んでいきたい。

来年度は、今年取り組みをさらに発展させ農業高校、工業高校、家庭科高校等の高校生を対象を拡大させ、多くの高校生が地元を知り、地元を目をやり、地元に興味を持てるようなプロジェクトに取り組んで地域創生の一助としていきたい。

参考文献

- ・『Mensix 岡山県立岡山東商業高等学校（アントレプレナー講座）事業報告会』要項（2007.1.25）
- ・『Student Venture Project 商業高校の各校一品運動 最終報告会』要項（2007.2.20）
- ・本間義人. (2007). 『地域再生の条件』, 岩波書店

撫川城址周辺整備からはじまった撫川・庭瀬のまちづくり

太田 正孝

1. はじめに

地域が崩壊していると言われて久しい。私が住む吉備地区でも徐々にではあるが、地域が変容し、地域の結び付きは確実に弱くなっている。こうした状況を象徴するかのように昔ながらの庭瀬往来のまちなみが刃こぼれしたかのように家がなくなっている。何とか昔のよいものを残したいと地域から徐々に声もあがり、行政を巻き込んでのまちづくり運動になっていった。私も市議会議員として、このまちづくり運動を成功させたいとの思いから参画した。

長年に渡ったが、庭瀬往来をはじめ、庭瀬城周辺並びに撫川城址周辺が大きく変わりはじめた。それと前後して、住民間で繋がり、連帯感が芽生え出した。これこそ、正に「連」と感じるのです。この「連」ができる過程にあったての実践記録をまとめることが、今後の繋がりを強化する上で最も重要なことであるとの認識から、「撫川城址周辺整備からはじまった撫川・庭瀬のまちづくり」を表題にして、まとめた。この論文をまとめるに当たって、ご協力頂きました全ての方に感謝を申し上げますとともに、この論文が今後のまちづくりに何らかのお役に立てられるようなものになっていれればと願って止みません。

2. 庭瀬城、撫川城の歴史的背景と文化財

庭瀬城、撫川城に関する歴史を少し触れさせていただきます。庭瀬城は、毛利氏領国東側の防衛ラインを形成し、境目七城の一角を占め、織田軍団と毛利氏が本格的に直接対戦となった天正10年——1582年の中国の役で、羽柴秀吉の軍勢の攻撃によく耐え、守り通した。そして、中国の役後についても、この地は戦略的に重要な場所と考えられ、今日の庭瀬城跡と撫川城跡を一体として本来の庭瀬城が構築されたのだという説も伝えられています。庭瀬藩が立藩されたのは関ヶ原合戦後と伝わっています。その後庭瀬城の一郭の撫川城を戸川家が知行所にしたようです。このように庭瀬城・撫川城は古いお城ですが、とくに撫川城の野面積の石垣は歴史的価値が高く県指定史跡にされているほど珍しいものです。大きさは、東西77メートル、南北50メートルで、石垣の外側には幅約15メートルの堀がめぐらされています。この撫川城は沼城で、備中と備後の国境線上に位置し、足守川下流の穀倉地帯を束ねたかなめでもありました。

史跡と同時に、多くの宝物も残っています。立藩した戸川家と17世紀末以降明治維新まで藩主を務めた板倉家の歴史資料が今に伝わっています。なかでも板倉家の歴史資料は、庭瀬城跡内の清山神社に保存されていたことから清山神社資料と称されています。清山神社宝物には甲冑、太刀、装束から文書類、下賜品に至るまでの多岐にわたる一括した譜代大名の貴重な品が43品目、54点あります。中でも、ていきょう緑沈の甲冑1領、後光明天皇恩賜鳴戸と銘するすずり並びに箱は素晴らしいものです。清山神社資料の保存の仕方は、所有者の宗教法人清山神社と教育委員会とが寄託契約を結び、地元の保存会と協議を図りながら、吉備公民館で保管と一部の展示をするというやり方になっています。

3. 市民による保存運動

こうした古い歴史を後世に残したいということで保存運動が古くから行われていたが、平成7年ごろから、その運動の輪が大変大きくなっていきました。それに呼応して、平成11年、岡山市役所が、撫川城址及び庭瀬城周辺整備基本計画を策定。この中には町並み保存、歴史資料館の整備、堀のしゅんせつ等たくさんの方の企画が盛り込まれた。

地元の組織は、撫川城址に対する市役所の対応が先行していたことから、庭瀬城周辺の地域が挽回したいとの思いから最初に庭瀬城保存会（邸内町内会が中心）が設立された。この保存会は本「庭瀬城ものがたり」を出版、講演会の開催などして、保存運動を一気に盛り上げた。結果として、庭瀬城址周辺の農業用水の護岸工事が行なわれ、庭瀬城址公園では日本古来の竹垣である「金閣寺垣」を施工がされた。こうした一連の動きのなかで、私は撫川城址周辺の地域に組織を作った方が良いのではないかと思い、地域の方に提案をしたところ、地域の方も賛同してくださり、急いで撫川城址整備委

員会（下東・城之内町内会）をつくられた。また、この組織も積極的に活動もされ、庭瀬城址保存会とも同じような要望が多かったことから、岡山市から統一した活動をして欲しいとの要請が出された。この要請を受けて、庭瀬往来が通っている本町町内会も含めた三町内会で庭瀬城址及び撫川城址を含めた一体的な地域でのまちづくりが始まったのです。こうした一つの大きなうねりが出来ると、話はトントン拍子で進みます。

まず、平成13年に市長の提案で、撫川城址公園の外堀に地下水をくみ上げての清水導入がなされた。水量が少なかったため、次に、平成14年11月から翌年5月にかけて毎月2回ポンプアップで水量を補おうとした。方法は、撫川城址より4キロメートル上の足守川を取水口とする二つの東半郷水路・法万寺川の水量調整をして水位を高くしていくというやり方です。けれども、非灌漑期は、農業用水から月2回の補充ではすぐに水位が下がり、このやり方も十分ではありませんでした。簡単には解決できないということを痛感した次第です。

結果はでなかったものの、岡山市の積極的な対応に住民一同感激し、住民で出来るものは自分たちでやろうという空気が高まった。農家が少なくなって用水の底に溜まった汚泥を取り除く川掃除を、毎月三町内会で行うようになった。実は、このことが一番大きな成果であったのです。

その後、国のまちづくり交付金3億円を頂けるようになって、まちづくりは加速していくのです。

4. まちづくり交付金事業

先述の通り、平成11年に総事業費見込みで約11億円の撫川・庭瀬城址周辺まちづくり基本構想が策定され、庭瀬城の堀の浚渫や庭瀬城周辺の用水の改修がされたりした。しかし、市の財政難で当然ながら事業のスピードは鈍ったのです。これではいけないとする地域住民から市当局に積極的な働きかけがあったことも大きな援軍になり、市当局の国に繰り返し要望が稔り、国から3億円のまちづくり交付金が箇所付けとなった。この交付金は、市当局と住民が協働で原風景再生に向けて地域の中である程度自由に使えるお金です。このお金で、懸案の施設建設予定地の購入、撫川城址へのアクセス道路の整備、撫川城址公園の玄関口とも言えます石橋のバリアフリー化の改修工事をはじめ立ち止まっていた事業が動き出した。

これらの事業は、4つの事業の柱から成り立っています。その4つの事業とは、「街なみ環境整備事業」、「公園事業」、「回遊ルーと整備」、「アクセス道路の整備」です。その中の街なみ環境整備事業の中身は庭瀬往来の整備です。この事業は地域でまちづくり協定を結び、歴史的な町並みを整備・保全することが、今回の事業の一番の根幹をなしているようになっています。まず協定は、国との協議を踏まえ市が承認します。先進事例である総社商店街地区街づくり協定では、住宅等の整備に関する事項で、建物の色彩、屋外広告物、植栽、壁面、セットバックの件について決められていて、事業が進んでいたのを参考にしたのですが、庭瀬の場合、既に現代風の家で改築されている家も多く、現在歯抜けになっているような部分が存在し、また改築をされたばかりの人も多くいましたので、総社のようにはいかないので、地域の集まりでは侃侃諤諤の議論になったのです。後から思えば、これも必要な過程であり、庭瀬、撫川の事情にあった協定書の規約ができたのです。そして、少しずつ、昔の町並みを残そうとした建物に改築され始めました。長い時間がかかりましたが、本当に嬉しい話です。

また、下水道事業の幹線工事もちまちまちづくり交付金事業に連動させて、前倒しで事業開始となりました。これは、一度に行ったほうがコスト的にも、また美観的に良いと判断からです。ハードは一つのこと動き出すと、次々に連動して動き始めるという良き事例として理解できると思います。

今後は、19年2月に旧庭瀬港復元工事着手、平成19年度には旧牢屋川修景、旧大橋常夜灯復元等、平成20年度には町並み歴史ギャラリー整備、木戸（カンヌキ）跡整備等と庭瀬・撫川の原風景再生の事業が続きます。

5. まちかど博物館

毎年夏、庭瀬城周辺の地域では、庭瀬城址で大賀ハスの観蓮祭が開かれていました。地域興しの一つです。こうした動きをもっと大きくできないのかということで、7月下旬に行われる吉備中学校での吉備・陵南夏まつりを地域にもっと根ざしたものにしていこうということで、平成16年から冠に「木

堂まつり」をつけて夏まつりは再スタートすることになったのです。そして犬養木堂先生生誕 150 年となる翌年の企画の際、地域の方から、犬養木堂先生の遺墨が地域の家によく眠っているはずとの声が出たのです。そうすると、次々に私の家にもあるということになって、皆に見て頂こうということに企画が発展していったのです。こうして第一回目の開催時期は木堂まつりと同日に行われたのです。名称は、吉備まちなか博物館です。

メインは庭瀬往来で、往来の各戸、お寺、公民館等々で郷土の犬養木堂先生の書かれた額や、掛け軸、それから屏風など、多くの遺品が展示されました。来訪者は三千人とも四千人とも聞きました。そして、18年の第二回目は木堂まつりとは分離され、11月の開催に変更されました。規模が拡大され、33会場で木堂先生の遺墨展示はもちろんのこと、バザー、コンサート、出店などがなされて、住民総出の行事となっています。終了後の報告では、来訪者は前回よりも多かったとのこと。素晴らしい成功体験をうることができたのです。

6. まとめ

まちなか博物館のこうした盛り上がりになった背景は、古い地域でありながら町内会主催ではなく、実行委員会方式で行っていることが特長です。

これは、連塾の「旧山陽道を歩こう」と通ずる部分が多くあります。長老が動くのを待つのではなく、地域の良きものを発見した人が、自分の周辺にもしてもらおうという働きかけを行っていかうとする動きです。第一回の旧山陽道を歩こう会の奉還町から吉備津神社。第二回の吉備津神社から清音まで。大きな輪に広がっていたのは、良いものを知りたいという欲求が人間の中にはそもそもあって、そこにキチンと働きかけができると、その輪は広がるということです。輪は繋がってなければ輪になりません。一つの線が連続すると、輪になります。そのことを「旧山陽道を歩く会」から学びました。そして、吉備まちなか博物館が成功する過程の中で、ハード事業から、本の出版などのソフト事業等の様々なものが繋がっているということを実感しました。私が承知するだけでも平成7年から19年まで12年まで何らかの形で繋がってきたからこそ、成功があったのです。全ては切らせては何もかも終わってしまうということです。

2007年は戸川家が庭瀬藩主として庭瀬城をつくり405年になりました。撫川・庭瀬城址は400年の歴史とロマンを感じさせる貴重な文化遺産であり、そこに住む私たちは城址と水郷のまちの保存と創出に向けて良いものを残し伝えてゆく努力が必要です。

古い城址を訪れ、少し崩れかけた野面積みの石垣に、戦国時代の勇士の姿を思い浮かべます。立派な郷土をつくってくれた先人に負けないように、良き郷土をつくるために尽力してゆきます。

中島屋大橋家と大橋家住宅観光

大橋 典晶

はじめに

倉敷に大橋家住宅という国指定重要文化財がある。これは、中島屋大橋家の本家の住宅であるが、この住宅の見学を期に、大橋家の盛衰について調査してみた。その中で、第5代、第6代、第7代の3人が盛衰の時期にかかわった人々であることを知り、さらに資料や聞き取り等によって調査を行う中で、倉敷美観地区の観光と大橋家住宅の観光について考察した。

大橋家について

倉敷市史研究会(2003)及び大橋家住宅パンフレットによると、大橋家の祖は近江の佐々木氏といわれている。豊臣方の侍であった種紀が、豊臣家滅亡の後、京都五条大橋の近所に住んでいた。この五条大橋から大橋の姓を名乗るようになったらしい。その後、窪屋郡中洲村中島(現在の倉敷市中島)に帰農した。その五世の孫平右衛門剛重が、宝永元(1704)年に窪屋郡倉敷村に移住したのが大橋家の始まりとのことだ。

倉敷村へ移住してきた新しい百姓らは、次第に成員の多数を占めた。その中には、仲買い、肥料売り、問屋経営で財力を蓄え、それを利用して、質屋、高利貸しに手を広げた者たちがいた。これが「新禄」である。寛政5年(1793年)の史料には、児島屋大原与兵衛とともに、中島屋大橋平右衛門の名前が見える。新禄の数は30足らずであったようだ。

文政10年(1827年)の史料によれば、この年以前の倉敷村は、「古禄」と呼ばれる十三家が牛耳っており、草分け百姓の主だった者として倉敷村の村役人を独占し、村政を運営してきた。また、さまざまな特権を握っていたとのことだ。

倉敷市史研究会(2003)に大橋家の成長を記した記述がある。それによると、大橋家は手広く金融活動を展開し、藩領を越えて土地集積を行っていた。その所有地を地主として経営していたのが、大橋家の経営の大きな柱であった。文政6年から天保4年にかけての小作米勘定高の史料でも、このころには地主として大きく成長し、約50町歩の地主であったことが推定される。もうひとつの経営の柱は金融であり、文政8年(1825年)には、名主や村を対象とした貸し付け、それに周辺諸藩の武家に対する貸し付けも行っていた。第3の柱は、町屋の経営であった。寛政7年(1795年)の大橋家の倉敷村における町屋所持数は約20軒で、ここから家賃収入を得ていた。

また、大橋家住宅パンフレットによれば、大橋家は水田・塩田の開発で産をなして大地主となったとある。天保の飢饉の頃にはお金を献上して名字を許されたり、讃岐の塩田開発の功績で帯刀も許されたりしている。文久元年(1861年)には庄屋となり、倉敷の中心を担う家になっていた。

このように、大橋家は新興勢力として頭角を現した新禄であるが、古禄の衰退と新禄の台頭があった文政期(1820年代ごろ)になると、古禄と新禄が「村方騒動」という村政主導権争いを演じている。結末は、古禄側が村役人の独占を失い、繰綿問屋の特権も否定され、新禄が地域の新しい指導者となった。文久元年(1862年)から幕末・明治維新まで庄屋を勤めたのは大橋平右衛門(5代目平右衛門正直)、大原与兵衛であった。

新禄の勢力が古禄を上回り明治時代となるが、このころの新禄の町屋が現在の倉敷美観地区に残されているものだ。大橋家住宅もそのひとつである。なお、重要文化財に指定されている大橋家住宅は本家のものであり、美観地区の中には「東大橋家(分家)」の住宅もある。東大橋家住宅は、現在一般公開されてはいない。

ここで、大橋家の分家の状況に触れておくと、聞き取り調査によれば、大橋家(本家)は分家をたくさん持ち、東大橋家のほかにも、西、北、南をつけた大橋家、別家大橋家、川入大橋家などがあった。それぞれの分家も地主経営、金融業などを営んでいたとのことであるが、現在も残っているのは、本家と東大橋家だけであるとのことである。また、東大橋家は多くの親戚を持つようだが、本家のほうは以後分家せず家系の広がりはないとのことであった。

この大橋家の本家の住宅が前出の大橋家住宅で、代官所の許可がなければ造れない長屋門をもって

いるなど、往時の格式の高さと繁栄ぶりが感じられる造りである。

倉敷で有名な豪商と言えば、大原美術館でも有名な大原家であるが、大原家も新緑のひとつであった。大橋家は、全盛期には大原家をしのぐ家であったが、聞き取りによれば、後に投資の失敗により急速に勢力を失ってしまい、昭和のはじめに兵庫県芦屋市に移ったそうである。現在では大原家に及ぶべくもないが、大橋家住宅は依然として個人所有であり、大橋家の8代目当主が所有しながら一般開放しているものであるそうだ。

明治期から大原家が表舞台に立ち、大橋家が衰退していくのを倉敷市史研究会(2002)からまとめると、次のようになる。

明治維新以降の時期は、経済・社会状況が大変革を遂げている。大橋家の没落に大きな影響を及ぼしたのは、「松方デフレ」であったように見える。明治14年から19年(1881年～1886年)にかけての短期間に、全国的に急激なる農民層分解が進行し、大量の没落農民が発生する一方、地主的土地所有の拡大が進展して大地主が出現した時代だった。

明治元年から大正13年にいたる岡山県南七大地主の土地所有の動向を史料でみると、野崎家(味野村)が1,784→5,703(単位は反)、大原家が87→5,251(同)の成長ぶりである。そのほかの梶谷家、星島家、日笠家、溝手家、藤田家も1,000～2,000反の土地を所有している。ここで気がつくのが、文政から天保期にかけて約50町歩(5,000反)を有していた大橋家の名が消えていることである。倉敷市史研究会(2002)は次のように述べている。

これら大地主は豊富な資金量の下に、折柄のデフレを背景に、地租・地方費の納入に切羽詰った自作・自小作農の零細な所有地の質入・書入及びその売却の恩恵を受け、また金融逼迫のため破産していく豪農・中小地主、投機に失敗した大地主の所有地を掌握していった。

同書では、大地主の没落の例として内尾村の大地主岩崎家の例が出されている。そして、「投機に失敗した大地主」とは、大橋家のことではないかと私は考えている。その理由は、聞き取りから、倉敷紡績の設立(明治20年代初頭)以前に大橋家は北海道の鉄道開発に投資して失敗しているという伝聞と合致するからである。

ここまで大橋家の盛衰について概観してきたが、次に、岡山県歴史人物事典編纂委員会(1994)を基に、大橋家の最盛期から衰退までに関わった当主を概観しておきたい。

大橋家第5代大橋平右衛門正直

1810-1887。江戸末期から明治初期を生きている。通称は平右衛門であったが、後に平蔵と改めている。また、竹泉と号している。大橋家の最盛期の人である。経史、和歌、礼式、撃剣、算学、易、茶・華道、能、笛をよくし、医学にも通じた。19歳で村役人の公選により年寄り役に選ばれ、1834年には教諭所、後の明倫館の運営にあたった。1861年には庄屋になった。基金の救助、海防費、江戸城普請費にお金を拠出し、名字帯刀を許されている。

第6代大橋平右衛門直諒

1849-1922。明治初年に倉敷小田島の役人となり、諸会社、銀行、倉庫などを経営。紡績、鉄道創設、道路を開き、河川堤防工事にも関与し、その功労によって岡山県知事から褒賞を受けている。幼時より剣術に優れており、大橋徳蔵、佐々木諸助に学び、後に三島中洲に入門して学問をし、晩年は書画骨董を愛し、和歌、謡曲、浄瑠璃などを楽しんだ。

第7代大橋平右衛門剛吉

直諒の長男康之助は東京第一高等学校へ入学、後に米国の大学で文学士となり帰朝、京都郵便局通信員として勤務するも36才という若さで他界し、弟の平右衛門剛吉(昭和53年没)が跡を継いだ。現在の大橋家住宅を見学すると、蔵を改造した資料室に、平右衛門剛吉が1914年に自家用車とともに写っている写真、1921年に婦人が嫁入りしたときの写真などが展示されている。いずれも、当時の勢いを感じさせるものである。しかしながら、聞き取りによれば、第7代は投資に失敗したために、以後、家

が急速に勢いを失ったということである。どうやら、「お坊ちゃん的な」経営により行き詰ったとのことである。

大橋家住宅の観光に関する問題点

大橋家住宅は重文指定後、一部を公開していたが、改修のため一時中断し、平成7年から再び一般公開されている。しかしながら、聞き取りによれば、地理的な問題から、訪問者数は美観地区に比べて少ないとのことである。そこで、周辺の現地調査を行い、訪問者数が多くない原因を探ってみた。

まず、観光の中心である美観地区とは、道路（通称「古城池線」）で隔てられ、観光客の流れから外れていることである。このことを、大橋家住宅の受付の方も「地理的問題」と言われていた。倉敷駅からの人の流れは南へ国際ホテル角へと流れ、左折して東側の美観地区に入る。観光バス駐車場からは、地下道又は押しボタン式信号機で古城池線を東へ渡り、国際ホテル角へと北上して右折する。ほんの60～100mほどのことではあるが、この流れからははずれ、古城池線からは見えないという不利がある。

次に、案内板のわかりにくさであろう。古城池線からは、阿知南交差点を西に入るのであるが、古城池線西側の西向きに立っている案内板は、「↓」という矢印で、「あなたが立っている位置（東向き）から、後ろに進め」を意味している。わかりやすいとはいえないだろう。案内板自体も大きくはないし、道の反対側には案内板があるものの、路地の入り口の案内板は前述のものしかない。

さらに、大橋家住宅前にいたる路地は、幅が5mほどの狭い道である（美観地区の路地よりは、はるかに広いが）。周りの景観も、よくある住宅地と商業地の混在したところで、その先に重要文化財があるようには思えないところである。

以上が周辺を歩いて感じたことである。大橋家住宅の受付の方によると、訪ねてくる観光客は、インターネット等で情報を事前に調べている人か、隣のホテル日航倉敷に宿泊して、レストランから見つけてくる人かのどちらかが多いとのことだった。

おわりに

私の姓は大橋であるが、近所に大橋という親戚は住んでいない。一方、中島地区に住んでいる大橋はお互いに姻戚関係を持っている家が多い。親や祖父母の世代から伝え聞くには、近所では我が家だけが系統の違う大橋だということであり、昔は大橋家と何らかのつながりがあったらしいということである。今回の調査では、我が家の墓や位牌も調査し、大橋家の系図も調べ、大橋家住宅の受付に居られる方からの聞き取りも行ってみたが、私と大橋家のつながりは分からなかった。しかし、さまざまな資料をあたることで、我が家に伝えられている話の裏づけを取ることでもできた部分があるし、大橋家の当主についてさらに知ることができた。

一方、このような思い入れのせいもあるだろうが、倉敷を訪れる観光客にもっと大橋家住宅を見てほしいという気持ちも強くなった。私の考えでは、美観地区の中にある東大橋家の住宅を、庭と米蔵だけでもよいので一般公開できれば、そこを訪れた観光客が本家の住宅にも行ってみようという気持ちになっていただけのではないかと思っている。東大橋家の住宅は倉敷市に売却されているそうなので、市が整備し、公開してくれることを望んでいる。

参考・引用文献

岡山県歴史人物事典編纂委員会 (1994). 「岡山県歴史人物事典」. 山陽新聞社
倉敷市史研究会 (2003). 『新修倉敷市史 第四巻 近世 (下)』. 山陽新聞社
倉敷市史研究会 (2002). 『新修倉敷市史 第五巻 近代 (上)』. 山陽新聞社

資料

大橋家住宅. 『大橋家住宅』. (大橋家住宅入場者用パンフレット)

インターネット参考資料

地域創生論文集 第2号

吉原睦. 『レクチャー：東大橋家と倉敷の町並み形成について』.

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/semina/s0206/kur001.htm>

倉敷市. 『倉敷市による大橋家の紹介ページ』.

http://www.city.kurashiki.okayama.jp/bunkahogo/shitei/sub4_oohashike.htm

奉還町商店街の再活性化

小野 員之

1. 平成17年8月より、奉還町商店街再生プランのプランニングに参加以来、街造り協議会に参加して商店街の問題点と現状認識、再活性化の作組の為に連塾2期生に参加しました。誠に意義深い1年間でありました。19年初春も長きにわたる寒さと、長く咲く桜とで地球温暖化が普通的话题となる今日であります。進級のための論文作成も大変です。
2. 商店街の問題点と現状認識の為にベース作りとして、比較研究の為に他地商店街の見学と調査を1年間にわたってしました。

以下 調査地

H.18

- 1/15 国分寺五重塔、鬼ノ城（歴史的認識）
- 4/30 島根県浜田市（島根県立しまね海洋館アクアス）
- 5/21 高知（桂浜、高知城、日曜市）
- 5/28 愛媛県内子、大洲（内子座、上芳貨邸、商いと暮らしの博物館、大洲城、臥龍山荘）
- 6/11 徳島県脇町つるぎ、貞光（うだつの町並み、貞光の二層うだつ、土釜）
- 6/18 足守、美星（旧足守薄侍屋敷、近水園、旧足守商家藤田千年治邸）
- 7/11 井原（嫁いらず観音）
- 7/23 邑久、牛窓
- 7/30 しまなみ海道、大三島（大山祇神社）
- 8/6 丸亀、観音寺（丸亀城、荘内半島一周、紫雲出山、琴弾公園の砂絵）
- 8/15 倉敷
- 9/3 愛媛県松山市（松山城、道後温泉）
- 9/23 姫路→淡路島→鳴門→つるぎ市（姫路城、阿波の土柱）
- 9/24 高梁（頼久寺、高梁商店街）
- 10/1 淡路島→室戸岬（室戸岬、貝の博物館、日和佐うみがめ博物館）
- 11/3 鳥取（水木しげるロード、中国庭園「燕趙園」）
- 11/5 成羽（吹屋ふるさと村）
- 11/12 姫路（姫路城、書寫山、圓教寺）
- 11/19 玉島、広島神辺（円通寺）
- 11/23 真備、矢掛（まきび公園、矢掛本陣）
- 11/26 島根（島根県立しまね海洋館アクアス、石見銀山、出雲大社）
- 12/3 島根県倉吉市（赤瓦、白壁土蔵群）
- 12/23 勝山、隸山

H.19

- 1/3~1/5 京都（東寺、平等院、平安神宮、知恵院、八坂神社、円山公園、祇園、錦市場、西本願寺、三十三間堂）
- 1/21 兵庫県龍野市（聚遠亭、龍野城、武家屋敷資本館、三木露風立像、うすくち醤油資料館、赤とんぼ歌碑、文学の小径）
- 1/28 福山市（みろくの里、明王院、福山城、ふくやま美術館、広島県立歴史博物館）
- 2/4 京都（清水寺、高台寺、圓徳院、二年坂、三年坂、建仁寺）
- 2/11 京都（仁和寺、龍安寺、京都国立博物館）
- 2/12 松江（松江フォーゲルパーク）
- 2/25 広島県竹原（光本邸、照蓮寺、資料館、松坂邸、西方寺、善明閣、長生時寺、笠井邸、森川

邸)

- 3/11 竹原、音戸の瀬戸、江田島
- 4/11 浜田市（島根県立しまね海洋館アクアス、出雲大社）
- 4/15 鳥取（白兔海岸、鳥取砂丘、かろいち、浦富海岸）

以上、30ヶ所以上、約140万円の費用と延35日を要しました。

キーワードは、以下7題に集約されます。

- ① 商店街へのアプローチ（道）
- ② 商店街主の熱意
- ③ 公的機関（税金の減免）
- ④ 入店者（若者、バカ者、ヨソ者）に対する理解
- ⑤ 時勢（全体計画の大手の参入）
- ⑥ 地域リーダーの育成
- ⑦ 店主の更新

上記7題については、今期の課題とします。

地域創生、何にどう行動するか

千房 新太郎

1. はじめに

この国の社会が成熟し、その良い点、不足な点、又、歪みも社会で話題に上り、地域の重要性が地域の時代と言う言葉で認識され、その創生の必要性が問われ始めてから、かなりたつように思います。しかしその創生は官、民を問わず金銭的、社会的なバックアップを受けて来たとしても、容易な事では全国的には進んでこなかった事はご存知のとおりです。ここに地域の創生を難しくしている物は何であるのかを捉え、どう考えていけばいいのかが問われていると思います。

2. 私たちの社会

戦後、これまでの世代で作りに上げてきた社会は、欧米中心に目を向けて、その中の良いと思われた点を目指して作り上げて来た社会のつもりでした。

しかし明治の維新の時代と違い、すでに社会の多くのインフラは揃っていましたから、戦後その復旧と、ただひたすら物質の充実、社会の便利さを目指して、人社会の絆のありがたさ、大切さを大事に保つ事には注意を向けず、置き忘れて発展してしまったように思います。

つまり持っているその大切さは無くならない物として考え、それを持ったまま、そのまま目指す社会が来るように、早くそれを成し遂げる事に60年間余力を注いできたはずで

その途中、ヨーロッパ諸国の社会の古典的な良さや、人間関係の絆の持ち方には多くの関心を払いませんでした。戦後多くの援助もあり、政治的にも関係の深かったアメリカ合衆国社会の、羨ましき先端部分に照準を合わせて進んできたように思います。そして一時は諸外国、特にアジアの各国に目標とされるような経済発展と政治の安定を築き上げました。途中、先進各国からは、自分達の経済守護のためバッシングさえ受けるほど勢いを緩めませんでした。

そして経済の発展については格差その他色々の問題はあっても、かつて人々の欲求したような社会には、ほぼ達したように思われます。

2. 1 人々の社会への思い

今、私達の日本の社会は経済の状況はさておくと、何が人々に望まれている社会になっているでしょうか。政治、社会政策、経済、色々な面で、要求や望み、不満はあることでしょう。望まれている背景は何か、どのような生活面への影響があるのかを考えたいものです。

2. 1. 1 政治への関心

政治が一番、社会の根本を作り上げる要素であるにもかかわらず、この国の今は、先進諸外国に比べてなんと体制への不満や変動は盛り上がり欠け、おとなしいものなのでしょうか。日本人のこだわりのなさとも言えるのでしょうか。

古くは外国の例に漏れず、日本も又、多くの内戦を経験しています。明治の前後の激しい社会の変革は、並々ならない国民のよりよい政治体制への意識の表れでした。昭和の時代、敗戦からの立ち上がりには、多くの政治家達が抱負や希望を持って変革に挑みました。しかし余り左右への政治体制への激動はひどくはなく、マイルドに進んできたように思えます。

その後日米安保変革への社会の関心と盛り上がり、沖縄返還に関しての日本の領土への関心はありましたが、社会全体が揺れて人々の暮らしが大きく影響を受けるまでには至らなかったように思います。

2. 1. 2 経済への関心

人々の生活と密着している経済については、近代に入り、各分野の人々はその力を発揮して常に前進しています。戦後の発展期はそのエネルギーを多く石炭に頼り、その後は石油に移り、企業もそれに対応した体制で成長しました。

定着した年功序列、終身雇用の体制も人々は何の不思議も持たず当然の様に、受け入れて、多くの会社、企業で働く人々はそれを生活の基盤として働いてきました。世界経済の成長に合わせて、それが自然に受け入れられる社会だったのです。今、日本も世界の多くの先進各国と同じ様に、大体満足した経済生活を送れるようになって、ゆっくりと進み始めました。人々も緩やかな成長は望んでも、かつてのような急激な発展や前進は望んでいないと思います。

今は経済のバランスについては、社会の中で生まれているひずみ、たくさんの不公平感を是正して、長く安定した不安の少ない経済生活を望んでいます。

2. 2 人々の社会への要望

今、近代日本の中で、伝統的な色々な慣習は変化をしながらも少し残ってはいますが、人々とは別に生活の中の豊かな品々、行動する場合の速さや、便利さを享受して暮らしています。しかし同時に地域の中での、人々の触れ合いの少なさ、助け合いの少なさはよく実感しています。古き良き近所付き合いを知らない若い世代の人々さえも時にその良さを認めて、困った時にはそれを欲しいと思いつつ暮らしています。

そして今享受している豊かで便利な生活はそのまま保持した上で、人々の助け合える社会の生活があればいいと思っているようです。個人主義といわれるヨーロッパの国々の一部にさえ残っている、不便なところや豊かさを我慢しても、助け合いや触れ合いがある社会を目指しているようには思えません。多くの人達の価値観は、自分、家族の楽しい生活が送ればそれでよしとするところに優先順位があるのです。他の人達との助け合いや触れ合いのある社会は望んでも、その為に自分が動き始める事は少ないようです。豊かさや、便利さや、効率の良さを追求し、少しの努力でそれがほぼ手に入る社会では、地域の人々との濃密な助け合い、触れ合いは優先順位が落ちていかざるを得ません。ここに、地域の創生が社会的に強力に発展して行くのが難しい一番の原因があるのではないかと思えます。

3. 参加してきたボランティアを通して思う

私事です、今から15年位前からいくつかボランティアをして来ました。

国際交流センターでの諸外国からの留学生や企業人への日本語教師、ホームステイの子女や社会人のホストファミリー、老人保健施設での書道のお相手、

そして今は、色々な施設や団体での仲間との音楽演奏、シニアの為に開校しているスクールの事務、教務補助などです。

ホストファミリーをしてみても思うのは、各家庭の人々は積極的にはホストファミリーに成りたがりません。単一民族国家の中で過ごしてきた人々の社会では、あまり異民族の人と付き合う機会、必要性がなかったので慣れていないのです。それを行ってくれる人々は、国際化の意識が定着した今でも、そう多くはありません。この国自体が外国からの人々の受け入れには、かなりの制限を設けているのも、遠因の一つかも知れません。

今も、シニアの為にスクールで事務、教務の補助を行っています。今、全国には文部科学省のバックアップを受けて、幾つか開校されています。ここ岡山県は全国に先駆けて平成16年の秋から開校されました。現在は3つのシニアスクールの教室があります。岡山市の小学校に2教室、中学校に1教室、鏡野町の小学校に1教室の3校です。その発端は荒れる中学校での生徒や先生の為に、地域のシニア世代の人々が同じ学校内で、生徒の教室の近くの教室で授業や実技を楽しみながら、時には生徒達に話しかけながら見守って育てていこうと言うものでした。4年を経て、生徒達は落ち着き、荒れた教室も無くなりました。

シニアと小学生、中学生の生徒達の色々な交流行事も続けられています。

子供たちの家庭環境は様々で、恵まれない子供たちもたくさんいます。しかし先生ではなく、つまり自分達を何かの基準で評価する人ではない、年配のおじさんや、おばさんの身近な存在は、子供達

に何か安心を与えるものようです。一緒に給食を食べたり、一緒に音楽を歌ったり、戦争の経験の話を交流授業で聞いて教科書の中のお話を実感したり、一緒にお掃除をしたりする時間は、授業の時間とは違う子供たちの時間です。ここでは子供と見知らぬ人達との触れ合いが繰り返されているのです。いつの日か大きく成長した、子供たちの心の中で、この思い出がきっと何処かで生きる日があることと思います。

一方で、スクールに通うシニア同士の一体感、連携も生まれています。多少摩擦があるのは一般社会と同じですが、地域で何かの力になることで自分達の満足感も達成される機会もあるのです。手前味噌ですが小さな地域創生の一步の様にも感じられます。

4. 地域の創生を目指すために

地域の創生は人々が望みながらも中々発展、浸透が難しい問題です。一期生の方の論文にも多くの意見がありましたが、地域の創生は行政のバックアップの意思協力も無論、不可欠な事ではあるのですが、塾長が言われるように、地域がどのくらい必迫性を持って、それを望み進める意思が継続することが出来るか、そこに必要、有能な人材が存在するかどうか、いなければ育てる事が出来るかどうかにかかっていると思います。

そして創生にはいくつかのアイデアを地域の各場所にに応じて設定する必要があります。

4. 1 創生の為にまず、何を設定するか

地域創生の為に、設定を必要だと思われる場所に『地域創生協議会』を設立する必要があると思います。地域の学校関係者-PTA、町内会の責任者、公民館の関係者、地区の民生委員、福祉関係者などを初めの主導者として声かけを行い、設立していく事が発端になると思います。その協議会において、どのような創生を行うのがいいのかを話し合い、組織の大まかな原型を決めて、責任者、もしくは担当者を選任し、各地域のリーダーを育成するところから始めるようにすることが必要だと考えます。地域の特性によって協議会の構成、方針の内容が変わることは言うまでもありません。

協議会での最初の課題は、該当地域での地域生活での問題点、改善点、将来への希望といった点を、掘り起こして集約し、その為にはどのような組織造りが必要かを把握する必要があります。

4. 2 創生を牽引する場所

創生を牽引する場所は地域によって、特色が出る事は考えられますが、基本的には以下のような場所が普遍的に必要であろうと思います。

- ① 家庭の役割・・・各家庭においてどんな創生を望んでいるかを町内会、学校などを通して協議会に伝える
- ② 地域の学校の役割・・・生徒の保護者達と地域創生のニーズを意見交換集約する
- ③ 地域を管轄する公民館の役割・・・行政の一環として創生の為の宣伝、イベント協力などを行う
- ④ 地域の町内会の役割・・・町内での創生へのニーズ把握と伝達協力
- ⑤ 地域所定の警察、消防の役割・・・地域での要望、問題点、安全な暮らし等の解決を創生に結びつける
- ⑥ 地域の会社、企業の役割・・・地域への利益還元により地域の創生への協力を行うと共に、地域の要望を聞く

5. 各場所、個人はどう行動するか

具体的にどう行動するかは、創生協議会、または分科会での案に沿っていくことになります。

1. 創生を牽引する役割を担う 4.2 の各場所からの意見を、協議会で検討に入る体制の人員構成準備をする。
2. お互い重複、関連がある項目もあるでしょうが、その場所ごとにアイデアを個別、かつ並行的に出して討議してまとめていく。
3. 大事な事は、地域の創生を目指すために、自分達の今までの豊かで便利な暮らしに多少の変化があ

っても受け入れる事の心構え、必要性を皆で討議し、それを地域に伝えてかなりの賛成を得る必要も生まれてきます。

4. 摩擦を最小限にとどめる為にも、近い未来の目標設定と言った事が必ず、必要になってきます。

6. おわりに

現在は地域の核家族、高齢者家庭、同居家庭、みんなそれぞれに地域が連帯して暮らしやすくあればいいという必要性は感じています。しかし具体的に何処に依存すればいいか、行動すればいいのかは、相談さえも出来ない状態だと思えます。家庭から地域全体までが地域協議会を支えに、意見や相談が出来る社会に到達して、機能し始める事を願うものです。

子供の声のする地域を目指して

地域創生は小さなひとりの意識から大きな Wave となって

難波 好江

はじめに

「連塾」という地域創生リーダー養成塾に身を置くこと1年間、塾長の情熱的なリードのもと、実にたくさんの地域で活躍しているリーダー達に出会うこととなる。地域を愛し、もっと安全で活気のある住みやす場所にするにはどうあるべきか、と常に思案し、問題を投げかけ、実践する人々のことだ。昔から真のリーダーは、故郷を愛し、世を憂い、国が栄えるために命をかけてきた。現在の社会秩序の乱れ、自然環境の破壊など不安要因は数知れずあるが、どの時代にもそれはあったと思われる。ただ嘆かわしいと論じているだけでは日が暮れるだけだ。まず諸先輩方々に学び、それに续きたい。

この度は一個人に何が出来るか、実践できることはないか、というテーマを与えられ、この論文を書くに当たり、深く考えるよい機会となった。「保存・再生・創生」というキーワードに基づいて、次世代を担う子供をとりまく環境について考察してみた。

問題意識

私は、人材派遣という仕事をしている。たくさんの方と接する機会をいただきながら、主に20代から50代の女性の力を借り、岡山市中心部を拠点に動いている。スタッフ研修やパーティー、その他会合、営業先での職場内、打ち合わせなど、出会う女性は生き生きと社会で活躍している。ほとんどの女性は身なりも整い、立ち居振る舞いも洗練され、世界的に見ても日本の女性が美しいと言われることに納得する。美しさを保つためには、人から見られているという意識と、経済力と、手間隙がかかる。

子供に関する事を論じる上で、母親となる女性の存在抜きには語れない。個人的な背景は詳しくわからないのだが、既婚者もいれば独身の女性も、シングル・アゲインの方もいる。子供をめぐる環境パターンはさまざまで、複雑に家庭環境や社会的背景、個人の事情や意思が関わってくる。おおまかに分類すると、下記のようなになる。

- 既に子育てを終了され、これからの女性を応援する側にまわる方
- おおかた子育てを終えて余裕を見せ始めた方
- 子育て真っ最中の方
- これから予定のある方
- 子供を持つ機会に恵まれない方
- 全く考えないということはないが、子供を持つことをためらっている方
- 男性との出逢いに恵まれないため、子供を持たない方
- 経済的、またはその他の理由があって選択できない方
- はじめから子供は好きではないから持ちたくない方
- 複雑な理由により子供を持つてはいるが、一緒に暮らしていない方
- 死別
- その他

など、子供を産み、育てる選択よりも子供を持たない選択が多いのではないかと推察する。また「持ちたくない」若い世代のムードが存在することも判明した。

「少子化」という活字を見たり、耳にしたりする機会が多い中、この「子供を持たない（あるいは持てない）」選択をせざるを得ない多くの方達の声は意外と取り上げられていないが、「少子化」という言葉により、不愉快な思いをする方は少なくない。

「子供を持たない」理由について考えてみると、現在日本が抱えている問題点が浮かび上がってくるのではないかと。そもそもなぜ政府が少子化対策をせねばならないのか。

日本政府の対策案

将来の日本が高齢化社会となるに伴う、社会保障が今のままでは危うくなるのが理由だ。少子化の要因としては、「親世代の人口規模の縮小」と「子供の生み方の変化」があげられる。晩婚化、未婚化、また夫婦の出生力そのものの低下という新しい現象も局面としてある。

昨今、急務として、すべての子ども、すべての家族を、世代を超えて国民みなで支援する社会の実現を目指すものとして「子どもと家族を応援する日本」を重点戦略と策定している。

＜2007年2月6日少子化社会対策会議決定＞

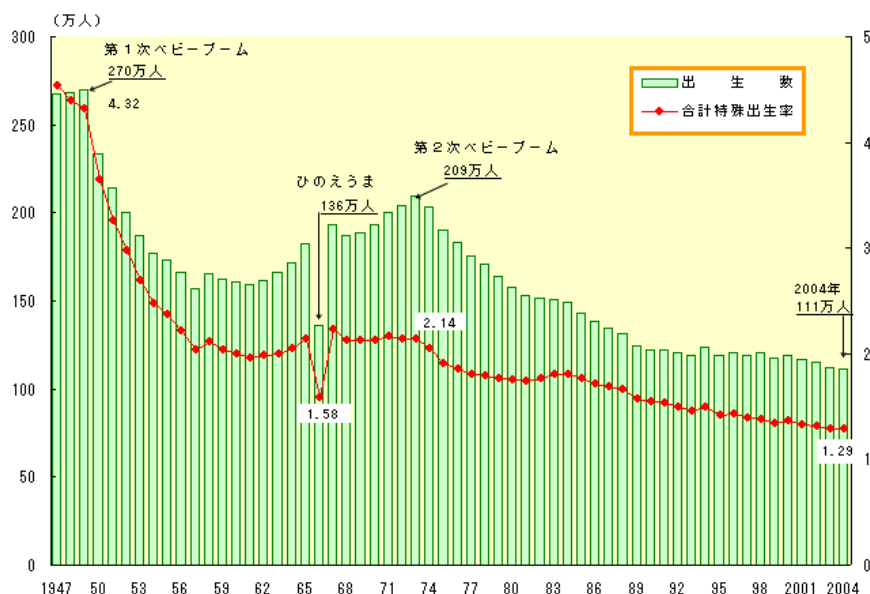
その理由としては、『わが国における急速な少子化の進展は、経済や社会の存立基盤に重大な影響を及ぼします。昨年末に公表された新人口推計では一段と少子化が進み、50年後の総人口は9,000万人を下回る見通しとなり、本格的に少子化に対抗するため、制度・政策・意識改革など、あらゆる観点からの効果的な対策の再構築・実行が求められています。』とある。

基本施策

- ・ すべての働きながら子育てしている人のために
- ・ 子育てしているすべての家庭のために
- ・ 次世代を育む親となるために

その目的は“子どもを生みたいと思う人が理想どおりの数の子どもを生み育てることができる社会の実現等を目指す”となっている。ちなみに、平均1.26人という数字は女性ひとりが生涯に生む命の平均だということは語られて久しいが長期的に人口を維持できる人数は2.07人である。

やはり何らかの手を尽くしていかなければ日本の将来は深刻に悩ましいのだが、問題は次世代人口の数ではなく、コンパクトになったらなったりの、別の方法があるのではなからうか。



世論と本音の矛盾点

政府は、少子化対策のため、多角的に調査をしている。しかし、これから子供を産み育てる世代の考え方が世論調査などからすべて把握できたであろうか。実際、スタッフや親子会、ネット上の声などひろって見た。政府が児童手当の乳幼児加算新設などを盛り込み、2006年度予算より12.3%増と、

金銭面で手厚くしてみても、結果はどうなることかと心配になる。以下のような意見もある。

- ・ 自己中心的な団塊世代が自分達の老後のために、子供を産めと言っているように聞こえる少子化問題の本質は老人問題ではないか。
- ・ 「産むことはこんなに素晴らしいよ」と思っただけでも、それを素晴らしい、となかなか言えない。
＜その裏には産みたくても産めない人への配慮が欠ける発言だからという理由がある＞
- ・ 産んで苦労するのはあなたじゃなく、私自身なのだから、とやかく言われたくない。
＜その背景には、子供を持つと「苦労する」というイメージを拭い去れない現実が語られ過ぎている
例：雇用不安による生活不安・学歴社会により、掛かる学費の負担・いじめや自殺問題など＞
- ・ 医療の発達により、寿命は延び、世界の人口が減っているわけではない。
- ・ 環境問題やエネルギーや食糧の問題も含め、これから安易に子供を産み育てることは生まれてくる子供にとってもかわいそう。
- ・ 好きで産んだのに子育ての愚痴を言う親が多すぎる。そんな人間を見てうんざりする。
- ・ 自分のことで手一杯なのに、これ以上のストレスを抱えることになり、そんな無責任な状態では子育ては無理。
- ・ 親にとっても子供にとってもサバイバルな環境にあり、何の保障もなく、生きづらいのでは。
- ・ ウザい。

マスコミが偏った報道をし、情報を鵜呑みにしてきた世代は、かなりマイナス思考であり、言論の自由とは言いながら、自分が発言することへの反論に対し、ナイーブになり過ぎているきらいもある。人からどのように見られているか、評価されることに敏感なのだ。民間番組で、発言力のある方が語っていたが、自分が贅沢をしたいから、子供そっちのけで見栄をはるためのお金稼ぎに精を出してきた結果が今のツケとなり、問題化しているのではないかという意見もある。

しかし、もちろん若い世代全員が、上記のような傾向にあるわけでもなく、子供を産み、育てる母親の奮闘ぶりにも注目したい。子育て事情も昔とは大きく様変わりした部分があり、団塊の世代以上の子育て経験者から見ると時代の流れを感じざるを得ないだろうと思う。これから生まれ来る子供達の心配もおおいにあるが、私たちがこれから、どのような社会を創っていくかで、また違ってくるのではないか。まずは生まれた子供達がどのような状況におかれているか、その子供を育てる親の世代がどのような生き方をしてきたのか把握しておきたい。

親の世代から子の世代へ

東京オリンピックが開催された頃に生まれた私達は、まさに高度経済成長期の成熟期にあたり、平均的な典型的日本人の生活スタイルを体験し、その流れを見聞きして成長した団塊ジュニアだ。物質的に豊かで、世の中が活気付いていて、より上質の生活を求めてみんな夢や希望に燃えていた。男はモーレツに働き、女は家庭を守る図式も浮かんでくるが、それは過去のスタイルだと、がんばる女性が社会進出を試みてきた。生意気だと言われながらも生き甲斐やステータスを優先させてきたせいか、いつの頃からか核家族化も進み、共働き家庭が増え、鍵っ子と呼ばれる子供達が親の帰りを待つようになる。親達は少しでも良い生活をしたいと家族計画会議を開き、子供の数を減らし、その分良い教育をしてエリートの道を進ませてやりたいと望む。親は、実現できなかった自分の夢を子供に託し、子供のお稽古事や塾通いに余念がない。遊びたい盛りの子供達は、その気持ちに伝えるため一生懸命良い子を演じるが、小学生の高学年あたりから、親の期待と自己能力の間にギャップが生じ、抑圧が強かった子は反発することになり、鬱憤が外に出せない子は鬱積して内にこもる。不登校、ひきこもりや鬱、大人になりたくないシンドローム、自立できないニートやゆがんだ親子関係から生じる殺傷事件などの社会現象が起り始める。これらの過去から学び、自分達は、二の舞はしたくないと、独自の子育てを試みる。

子育ての多様性

- ・ ワーク・ライフ・バランス型 男性が育児・家事に参加するのは、当たり前になってきた。子育てに関わりたくないと願いつつも、まだまだ育児休業はとりにくいのが現状。
日本男性の育児取得率 0.56% (厚生労働省 H16 調査)
- ・ パラサイト型 パラサイトシングル [(和製) parasite+single] が親と同居する独身者で、住居や家事を親に依存する [parasite は寄生する意。1997 年 (平成 9) 社会学者山田昌弘が用いた。--goo辞書より] なら、結婚してもずっと一緒に暮らし、子育ても依存するパターン。サザエさんの家族形態だ。姑と付き合うより、気心の知れた自分の母親となら子育ても気兼ねなく頼れるというわけだ。
- ・ 早期自立型 子供を自立させられない親が多い一方で、早くから子供を手放し、「教育のプロ」に託すパターン。少子化は贅沢な子育てをも可能にし、海外への留学でも小学生からと低年齢化している。
- ・ フランス型 育児休業は、しっかり取り、その後当たり前のように職場復帰し、子育ては保育園や子育てサポートさんに任せ、＜フランスでは産休の給与保障が社会保険からされ、3 人目以降の出産になると産休日数も飛躍的に延びる。これに職場復帰保障がつく＞ 短時間でも密接な子供との時間を楽しむ。しかし、日本の現状では、ママさん同士お互い助け合ったり、シェアしたりできるコミュニティに頼るなど経済的負担軽減の工夫も必要。まだまだ出産後専業主婦となる割合は 6 割以上。

まとめ

意識は変わりつつある。古き良き時代の良い習慣 (大人たちが子供を見守る目を持ち、地域全体が子育ての役割をするなど) が見直され、かつて父親が子育てに熱心だった時代のように、子供への関心が向けられ、社会全体で家族という最も小さい単位の集団の大切さに気づき、失いつつあった家族の絆やマナーやコミュニケーションを取り戻せば、新たな時代へと変わっていくように思う。これから政府が設ける制度をうまく活用しながら、よりよき次世代が作られるよう期待したい。

今後の課題

政府や自治体の施策を待っているのではなく、ほんの小さい石でも水面に落とすと波紋となり、ウェーブとなって響いていくように、わたくし自身一人の市民として、また子育てする一員として次世代が、過ごしやすい社会となるよう、何らかの役目を果たし、発言できることはし、声を掛け合い、一石を投じていきたい。

参考文献：藤原正彦 著 「国家の品格」新潮社

新渡戸稲造 著 矢内原忠雄 訳 「武士道」岩波文庫 2006

安藤香織、伊藤ゆかり、鳥山奈々 編著 「ワーキングママの本音」 ナカニシヤ出版 2006

厚生労働省統計表データベース参照

国立社会保障・人口問題研究所データ

・「少子化情報ホームページ」 <http://www.ipss.go.jp/syoushika/>

内閣府 (Cabinet Office) ホームページ <http://www.cao.go.jp/>

「男女共同参画フォーラム」への参加を通して

野島 淑子

1. はじめに

昨年4月、「男女共同参画フォーラム実行委員募集」の広告を「くらしき広報」で見ると早速応募した。数週間後、委嘱の通知を受け取った。昨年3月、永年勤めた中学校を退職し、何か社会貢献できることはないかと探していたことが応募の動機である。

在職中は、最後まで日々追いかけるような忙しい生活を送ってきたので、学校の事や生徒達の事以外の外部の出来事については、多くのことを知る機会や関心を持つことができない状況の中にあつたことは否めない。「男女共同参画フォーラム」が20年ほどの歴史をもち、特に多くの女性達が熱心に活動をしていることを実行委員になって初めて知ったことは、実に意義深いことであつた。

学校教育は、生徒達に男女が互いを尊重しながら協力して生きていくことの大切さを教える場であるが、現実の学校現場はなかなか理想通りにはいかない。生身の人間である教師集団が生徒達に教えることと現実の自分自身の思考や習慣の間にはまだまだ目に見えない大きな壁があるからである。30数年前の新任教員であつた当時と比較すると、学校現場も風通しがよくなり、特に、ここ数年はセクシャルハラスメントが声高に叫ばれるようになって目に見えて意識が高まった気はする。

しかし、長い日本の歴史上に綿々と横たわってきた男尊女卑意識からの脱却には、まだまだ長い時間を要すると思わざるを得ない。長年片隅にいつもあつた思いが男女共同参画への活動参加を通して語り合えそうである。男女共同参画実行委員として、なかなか客観的な立場から抜けきらない中での活動を振り返ってみたい。

2. 「男女共同参画フォーラム」開催に向けて

<倉敷市男女共同参画都市宣言>

男女は人として平等であり
性別にとらわれず個人として尊重されなければなりません
私たちは
あらゆる活動の場に共に参画し
一人の人間として個性と能力をいかし
だれもが心豊かに暮らせる倉敷市をめざし
ここに「男女共同参画宣言都市」となることを宣言します

平成12年10月21日 倉敷市

上記は、平成12年に掲げられた倉敷市男女共同都市宣言の全文である。考えてみると、倉敷市の男女共同参画の歴史は、まだ10年にも満たないことになる。宣言文にあるように、一人ひとり真の意味での平等感をもつにはまだ時間がかかりそうである。

「倉敷市男女共同参画課」から、委託料1,271,000円を受け、「2006年男女共同参画フォーラム」開催に向けて、6回に渡って実行委員会が開かれた。実行委員のメンバーは、地域活動、福祉・奉仕活動、職業関連活動などの代表者、及び市民公募の25人（女性21人、男性4人）から構成された。

昨年度、日時と開催場所はすでに決定済であつたので、実行委員の仕事は、開催テーマの決定からフォーラムの活動内容の検討、ポスター作成と広報活動などの準備と当日の進行・運営等の役割分担が主なものであつた。1つ1つの決定における過程で、今までにない新鮮な意見に学校現場ではないのだと実感することもあり、長年の活動実績に基づいた女性たちの積極的な行動に圧倒されることが多かつた。

「'06 暮らしき男女共同参画フォーラム」の概要



日 時：平成 18 年 11 月 18 日（土） 10:00～15:30

場 所：倉敷芸文館

<日程>

10:00~11:45 **ワークショップ**

A：「岡山の女性たちのあゆみ ～昭和・平成の歌声にのせて～」(イーブ暮らしきネットワーク)

B：「言いたくても言えないわたし 脱出作戦！」(プリティウーマン)

C：「あなた 人生の後半をバラ色に…！ ～家族を楽しもう～」(Yu-me<夢>)

13:30~13:50 **ミニコンサート**

箏曲演奏 ………山路 美穂

14:00~15:30 **講演**

講師：遙 洋子 演題：「みんなが輝いて生きるために」

当日の入場者は、やはり女性が多かったが、午前の部は 230 名 (A:130, B:50, C:50)、午後の部は 550 名であった。午前中のワークショップは、男女共同参画セミナーなどで研修された方々や地域の方々が結成されたグループの日頃の取り組みの発表であった。

フォーラム後のアンケートによると、ワークショップの部では、「参加型の企画でよかった」「これからの人生を考えることができた。」「前向きに活動している人を見て自分も頑張りたいと思った。」など、参加者がそれぞれの立場で楽しみ、心の糧になったと評してくれていた。山路さんの琴の音は、心に響く素晴らしい演奏で、午後の一時をリフレッシュさせてくれた。また、遙さんの講演は、実体験に基づく身近な内容をユーモアを交えて話され、それぞれが勇気や元気をもらった時間になったことが伺えた。

フォーラムの参加者に、「参加したことで男女共同参画の意識をもちましたか。」の問いに、ほとんどの人が「はい」の解答であったことは、大いに意義深いことであった。また、このフォーラムが知人、友人、または公共団体やグループの案内で参加した人が多く、新聞やポスター、広報紙などを見ての参加者はわずかであったことを思うと、まだまだ興味や関心が薄いと言わざるを得ない。

そういう自分も例外ではなく、今までこのような企画を全く知らなかったのである。意識の高い女性たちが、地道に啓発活動をして来られたことに敬意を表すると共に、あらためて、広報活動の重要性を再認識したのである。

社会に根強く残っている不平等意識は、無意識の中に存在するものも多く、男女通して指摘されないと気がつかなくなってしまうものもある。無意識に存在し伝えられていくものこそが、実は解消されなければならないことであり、これは女性だけでなく男性の方々に大いに意識の変革をしてもらわねばならない。昨今の厚生大臣柳沢氏の「女性は産む機械」発言は、無意識の中に存在していた思いが吐露されたものであろう。女性が女性としての特権を生かし、未来の国を背負う子供たちを安心して育てるためには、すべての人が、男女共同参画意識を持たなければ成し遂げられないことである。そこから、ハード面やソフト面での政策や工夫・協力が生まれてくるのであろうと思われる。

3. 「ぶどうの会」の結成に向けて

「男女共同参画フォーラム」の準備と並行して、倉敷市男女共同参画課の主催で「平成18年度男女共同参画セミナー」が実施され、6月から8月にかけて合計6回の研修に参加した。

このセミナーは、「男女共同参画社会とは？」というオープニングから、「話し方・聞き方トレーニング」、「心理学に見る男女の違いと共生」、「国際社会に見る男女平等意識」、「DV・セクハラの実状と課題」、「少子化と男女共同参画」、「ネットワークづくり」、「メディアリテラシーのすすめ」など多岐にわたる内容を含み、問題や課題が多い現実を知ることになった。

その中で、新鮮で興味深かったことは、男女の脳の部位に発達の違いがあることが分かったということでした。女性は言語中枢を司る左脳の神経細胞が男性より多く、話したり聞いたりする情報のやりとりが優位にあり、反対に男性は空間認識を司る右脳が発達しているため、地図を見るのは得意なんだそうです。日常における男女の習性の違いは科学的根拠があったようです。

修了式をした8月、早速14名の修了生で活動団体として「ぶどうの会」を結成し、登録が許可された。メンバーは、男性2人、女性12人の構成で、年齢は30代から70代の各層のそれぞれ関心をもった者の集まりである。第1回の発足会を10月、第2回の会合を1月にもち、会則や今後の活動計画を話し合った。セミナーに偶然に終結した者たちのグループで、何が出来るか先は見えないけれど、無理なく地道な活動をする方針を立てた。そして、まず互いをよく知るために、「私を語る」「私が大切にしていること」などの主題で発表会をもつことにした。それぞれ長い人生を歩んできたメンバーがどのような思考や経験をもって集ってきたのか楽しみである。そこから、「ぶどうの会」としての活動が具体化してくるかも知れない。そして、男女共同参画社会の理念を少しでも広げる活動に発展できればと思っている。

松畑塾長の、「一人から始め、つなげていく」「まず自分から」ということばを支えに、「自分一人に何が出来る」からの脱却を図ってみたい。



第6期 男女共同参画セミナー終了式

4. おわりに

この1年、自分にできることを求めて模索してきたけれど、それぞれの場所で自分の得意とすることにキャリアを積み、いきいきと活動し、学んでいる方々に出逢って大いに刺激になった。まだまだ学ぶべきことやするべきことがたくさんありそうである。好奇心を持って自分のできることに挑戦していきたいと思っている。

温暖化に歯止めを

藤原 忍

はじめに

科学、経済、技術が飛躍的に発展した物優先の時代だった20世紀のさまざまな負の断面が指摘され、ようやく物から心へと少しずつ方向転換の兆しが見えるものの依然として経済優先の社会構造は根強く残っております。

その状況を踏まえ、21世紀は人間と自然が融和、共生出来る社会へと大きく舵を切りなおすときが来たことを昨年の連塾での学習会（平成18年5月27日）にてまなびました。

さて最近の大規模な自然災害にみられる様に地球の温暖化による異変は今後、人類が永続的に生存、発展出来るのかどうかという大変な疑問を投げかけております。

この事実を素直に受け入れ予想される最悪の状況を克服する責任と義務を果たすことが現代人に課せられた大きな仕事であります。すべての人々がその自覚の上に、一致協力して行動することこそ人類の発展と生存が保証されることと思えます。

“温暖化に歯止めを”

すでに広く周知されておりますが温暖化による深刻な事象はさまざまところに現れております。その事例を新聞の掲載記事を参考にいくつか取りあげてみたいと思います。

- ・昆虫の分布の変化（日本など）
- ・ロッキー山脈の氷河の溶解と減
- ・氷床の溶解（南極）
- ・海水の減少（北極）
- ・氷河の溶解と減少（アルプス）

その他、巨大ハリケーンの発生、海岸の浸食、豪雨、熱波、巨大竜巻、永久凍土の溶解など多くの事象がかくにんされております。この様な一連の温暖化現象について国連の「気候変動に関する政府間パネル」の第1作業部会は、2007年2月1日に「1750年以降の人間活動が温暖化の一因となっていることを強く確信した」と分析の結果報告を発表しています。ちなみにその骨子は次の通りである。以下2007年2月3日付毎日新聞朝刊による一

- ・大気、海洋、氷河などの観測から地球温暖化は明白だ。
- ・1906～2003年に年1.8ミリの割合で海水面が上昇した。
- ・20世紀半ば以降の気温上昇は、人間活動による確立が90%以上。
- ・20世紀末に比べて21世紀末の平均気温の情報は1.1～6.4度。
- ・21世紀末の海面上昇幅は18～59センチメートル。
- ・猛暑や熱波、豪雨の頻度が増える可能性がかなり高い。

と発表されております。その他、今後予測される事象が数値やグラフによって掲載されており、専門家ではくとも大変憂慮するところであります。

さて本題から少しはずれますが私は以前から歴史小説や時代小説が大好きで「鬼平犯科帳」や「剣客商売」などは常に身近において愛読しております。東京の深川江戸資料館などにも足を運び江戸時代の暮らしや風俗にふれて、小説の内容などをも出だしては合づちを打っております。

温暖化の防止はやはり一人一人の意識の変革が大きく左右することと思えます。昔の暮らしを今にはめることは出来ませんが自然との共生、調和が取れていた江戸の暮らしにはヒントがあるかも知れません。ちょっとのぞいてみることにします。

「おまえさん、早く起きなよ、夜が明けちゃうよ」と女房にたたき起こされた大工の留吉は表で汲んで来たきれいな水で顔を洗い梅干とミソをおかず朝飯をすまし、「寄り道をするんじゃないよ、早くお帰りよ」と女房の声を尻目に「気持ちのよい朝だなあー。空気がうめえや」と日の出迄に現場に到着するためにはまだ薄暗い道を忙ぐのである。朝は早い現場の仕事は休憩が多く、一日の労働時

間は4~5時間位であり、正月、盆、祭りの日とか雨の日も入れると週1回の休日を与えられる現状のサラリーマンよりはいくらか少ない年間の労働時間であったようです。一日の仕事が終わり午後のハッ半頃（現代の午後3時半頃）にはすでに帰路についており表通りの“居酒屋”などを横目に見て少ない給金を握りしめ、“江戸っこでい、宵戯の金は持たねー”（持たねーのではなくて持てない）などと啖呵を切って晩のおかずを仕入れて長屋へ帰るまだ半人前の大工の留吉であった。あんどんの油やろうそくも節約して早めに就寝して一日の終わりです。江戸の人々の大半が留吉と同じような生活であったと思います。江戸時代のエネルギーは云うまでもなく太陽エネルギーがすべてであります。太陽光で育った植物や、小動物を日々の糧とし、動力はほとんど人力及び牛馬の力と水を活用した簡単な工作物でしかありません。しかしながら当時としては世界的にも例のないほど上下水道の設備に工夫が見られ庶民の暮らしは結構安心な平和な日々を送っていたものと想像できます。お金の使い方は勿論着物や下駄、ぞうりに至るまであらゆることに応用して大事に使い最後は燃やして灰は肥料に使用する等、われわれが忘れかけていたことを思い出させるまさに自然と共生、調和した生活がありました。

過酷な労働の始まりは明治の文明開化以後であって、江戸の頃には該当などの普及はなく夜の暗がりではどんな仕事もやりたくても出来なかった。石炭をはじめやがては石油という非常に効率のよい化石燃料の出現により江戸時代までの数千年の人類の歴史上経験したことのない、大変おそろしい時代の到来です。

目先の便利さほどこわいものはない

楽な道を選びたがる人間の本性に従い我々は石油エネルギーという化石燃料を酷使して安楽な生活にどっぷりと浸っている内に日々の生活が出すごみさえも捨て場がなくウロウロしている廃棄物大国、そしてほんの40年程の間に変化するはずがないと思っていた地球までも変えてしまうとは誰が想像できたでしょうか。これこそ人間の欲望のマイナス面が問われる大問題であると思います。

『江戸のくらしぶりや内容の表現については2005年1月15日第1刷発行の石川英輔著「大江戸庶民いろいろ事情」を参考にしました』

現実に目を転じて経済優先の社会を環境優先の社会に転換する努力はどうなっているのでしょうか。まだまだ物足りない動きではありますがその一例を主に交通・輸送などの分野に見ることが出来ます。

云うまでもなく温暖化現象は化石燃料の大量消費が大きな一因であることは明白であります。原子力エネルギーの安全な運用あるいは次世代の新らしいエネルギーの開発・発展が見込まれるまではなんとしてもその消費量の抑制に努めなければなりません。その一貫として次の事がらなどが考えられています。

私は大いに推進・拡張していくべき事とおもっております。

その第1点 公共交通機関の充実

第2点 輸送システムなどの転換

第3点 市民一人一人の意識の変換による生活習慣の見直し

(公共交通機関の充実)

温暖化もさることながら高齢化にも大変に必要なことです。私達の住む岡山市においても路面電車の延伸が考えられていますが是非早期に実現してほしいことです。ただ現時点では暗礁に乗り上げている様子です。バス路線の整備なども含めて全口的な規模で拡大していくことが出来れば大変よいことです。

(輸送システムのなどの転換)

現在の大型トラックによる大量輸送から延巨視輸送の主役を鉄道に変換することをモーダルシフト

と呼んでいます。この点については社団法人「鉄道貨物協会」を中心に推進中であり国の施策としても転換率を50%(2010年迄)とするなど取り組んでおります。

その他さまざまな取り組みもあるようですがここでは割愛させていただきます。

(意識の変革と生活習慣の見直し)

上記第1点、第2点等については行政、企業による取り組みが主体であるが第3点については我々個人の行動が主体となるのです。派手な運動や目に見えるものはないけれども大切なことでありこれが大きな流れになれば予想をはるかに越える成長があることを確信します。昨年(平成18年10月)、岡山県として公共交通機関利用実験を行ない1200人余りの人が参加し、アンケートなどを参考に将来の施策に活用する方向で取り組んでおります。このような発動も全口的に拡大すればこれまた大変によいことと思います。

東京に本部を置く国連大学のハンス・ファン・ヒルケン学長を招いたシンポジウム「持続可能な社会作りを目指す大学教育」が2006年10月15日岡山大学で開催され、その基調講演にて同学長は「自然環境の負担を軽減しながら人間生活を維持する新しい、バランスが必要であり、それが行政や企業、市民のあらゆる意思決定に反映されなければならない」と強調されています。

大工の留吉が仕事に出掛ける朝、「気持ちのよい朝だなー。空気がうええや。」と大きく息を吸い込んだあの空気は今はどこへ行ったのでしょうか。市街地には2度と帰ってこないと思われまふ。経済の成長、科学の進歩がそして技術の向上が人間の発展そして幸福へとつながるものと思ひ込み、一途に歩んだ結果が今とんでもない状況となって人類に大問題を突きつけております。江戸や明治といわずともどうでしょう。昭和40年頃の生活に石木田でも戻してはいかがでしょうか。私の記憶によれば不便さもあまり感じなかつたし、余分な贅沢も今糧ではなかつた様に思ひます。庶民の多くは自らの分に従い身の丈に合った日常を送っていたと思ひます。

飾った世界に流されず、使い捨てやムダなゴミなども生活の中でよく考えて暮らすことこそ最も重要なことであると思ひます。

健全な素晴らしい地球があつてこそその人類の発展であり幸福であります。大災害や、海水面の上昇などで都市は災害で瓦礫と化し足元に海水が押し寄せて来たのではどうしようもありません。今こそ大きく舵を切り直していかなる施策よりも大きく予算を使つていただきたいものです。世界中の国々が自国の利益にとられることなく英智を結集してこの危機を乗り越えていかなければなりません。私達は小さな力ですが以下のことを実行していくことを目指します。

- ① スローライフ、又は環境問題等に取り組んでいる団体や企業との連繋を計りその活動への支援や協力
- ② 学者や専門家を招き、講演会や学習会の企画や運営を通して広くメディアをはじめ一般市民へ訴える
- ③ 国をはじめ県・市など行政へ働きかけ当面の施策や対策を前進させる

実行するには程遠い内容ばかりですが、松畑塾長ならびに塾生の皆様の御力添えやご協力をたよりに実践コースへと進んでまいります。

すばらしい自然を愛して

三澤 初子

1. はじめに

私は、岡山県婦人経済クラブと云う、女性のクラブに昭和54年4月より入会致しました。この会は昭和30年、当時の三木知事が、「これからは女性も社会へ進出する時代が来る。」と云うことで働く女性の会を作っておさつと聞いております。

会則の中に本会は、会員相互の親睦、触和を図るとともに、会員の教養を高める。とあります。その意味から一年の内6ヶ月は講師をお招きし、行政・文化・教養等について、勉強しております。

松畑先生との出会いは私共の会に、一昨年講師として、お招きしてからです。その時のお話の中で、地域創生学研究所・連塾を知り、二期生として入塾させて頂きました。

健康とそして人との出会いを大切に、40分程度歩いています。

春夏秋冬の自然を、思うままに書いて見ました。

2. 春

桜の花が、満開で、桜並木の下を、ゆっくり時間をかけて歩きました。

桜の花も、残り少なくなり、「又来年も美しい花を咲かせますからね。」とささやいているようです。

桜の花びらも、ほとんど葉桜となり、風に乗って一ひら一ひら舞い散るのも又風情のあるものです。私は新緑が大好きです。すこしずつ新緑を目にするようになりました。

共は、みどりの日。中国高校野球が行われていて、多くの人達で賑やかです。

出会う人に言葉をかけるのが難しい。十日ぐらい前、後から走って来た男性に「おはようございます」と声をかけられました。それからは、どの方にも「おはようございます」と声をかけることが出来るようになりました。

ぼたん色・白・うすピンクと、つつじの花が競うように咲きみだれています。

あたりが、ぱっと明るくなった感じ。

3. 夏

淋しそうな顔、悲しそうな顔、今にも笑みがこぼれそうな顔、優しそうな顔、道を行く人々それぞれですね。

私は何時もやさしい顔で歩くことを、心がけよう。とつつじの花が終わった、そう思いながら歩いていますと、アジサイの小さなつぼみが、「次は私の番よ。」と云っているようです。

今日は池のそばを通りました。睡蓮の花が咲いてきました。クロード・モネの水練の絵を思い出して静かにたたずみました。

今日も睡蓮の花に逢いに行きました。敷きつめられた緑の葉の上に、白い清楚な花々が「今日も咲いていますよ。」と云っているようです。

アジサイの花が雨にぬれて美しい、アジサイの花には、雨がとってもよく似合っている。今年初めて朝顔の花を見つけました。蝉時雨の中で、あさがおの花！夏の風情を感じるひとときです。

暑いので奉還町通りをよく歩きます。20才ぐらいの男性が窓ふきをしていました。ちょうど後を通りかかった時、ふり返り「おはようございます」と声をかけてくれました。暖かい気持ちにしてもらいました。

朝一人の少女に逢いました。前を歩いていたその少女が、くるっとふり返り、にこっとしました。私が「おはようございます」と云いますとオオム返しに「おはようございます」と…「何年生？」と聞きますと2本の小さな指を立てて「2年生」と笑顔で答えてくれました。この頃は子供の事件が多いので、元気で大きくなってね。と心の中で云いました。

4. 秋

久しぶりの総合グラウンド。メタセコイアの木も緑の葉をしっかりと繁らせ、天高く聳えています。“メタセコイア” この木は木の化石をして発見され、世界で話題となったそうです。

睡蓮の花が、一りんになってしまいました。「又来年お逢いしましょうね。」それまでごゆっくり！

美しい落葉を見つけました。秋本番です。桜の木も、メタセコイアの木も、すっかり紅葉になっています。いちょうの黄色、楓の赤色、その落葉の道を歩いていると、まるでシャギーの絨毯のようです。自然はすばらしくうれしい。

5. 冬

すみきった朝です。今年は暖冬とか。あまり冬を感じさせない、歩きやすい一日です。

冬の総合グラウンドは灰色です。所々見られる常緑樹に、ほっとさせられます。目メタセコイアの木も大きいだけによけい淋しそうです。

池の水もまだ寒そうに感じられますが、暖かい日差しに、水鳥がたくさん泳いでいます。

老夫婦や親子づれも、多く見かけられます。

梅のつぼみがふくらみ、春も目の前と云った感じです。何の木か知りませんが、若葉が芽吹いています。一日一日春の足音が聞こえて来るようです。

6. おわりに

自然は素晴らしい。そして、このすばらしい自然を生かすのも壊すのも人間ではないでしょうか。

- ・人間は、行動した後悔より、行動しなかった後悔の方が大きい。
- ・市あわせは使い果たすものではなく、溜めるものである。
- ・人は誰かと連なり合って初めて自分を見つけ出せる。

私は、今年“合い”と云う言葉を大切に年間をすごしたいと思っております。

めぐり合い、助け合い、はげまし合い、いたわり合い等々です。

塾生に学びの場所を提供して下さった松畑塾長のお心に感謝し 74 才 (24 才?)からの奉仕活動を頑張りたいと思っております。

地域の宝さがし探検隊

～子ども達のパワーを地域行事に～

宮本 由美子

1. はじめに

地域づくり、まちおこしはこれまでの行政主導のハード整備を主体にするものから、地域で暮らす住民が主役となって、地域にある資源を見直し、磨きをかける、といった地域ごとの特色ある取り組みが必要である。そのためには、住民のみんなが、地域で話し合いながら、その地域の将来を考え、自らできることから実践することが何より大切であると思う。次代を担う子ども達が自分たちの住んでいる地域について知り、そこに住む人々と関わり、地域に誇りと愛着を持つことが大切であると考え、子ども達が地域の資源さがしの活動に取り組み、情報を収集し情報を発信していくことから始めたい。

2. 観光ボランティアの方と地域の宝探し

足守地区は吉備路の一角を占め、木下藩の陣屋敷をはじめ、さむらい屋敷・近水園・足守文庫（緒方洪庵直筆の書・寂庵和尚直筆の屏風・秀吉の妻ねねが使ったと言われる道中風呂などがある。）緒方洪庵生誕地・木下利玄生家跡等があり、歴史的文化的環境に恵まれている。しかし、意外と自分たちが住んでいる地域にどんな歴史があるのか、先人達がどんな文化的足跡を残したのかを知らない。「地域の宝さがし探検隊」という活動を計画し、自分達の住んでいる地域を知ることからスタートした。

観光ボランティアガイドの方に協力していただき、探検カードを片手に、足守の見所とエピソードを聞きながら巡ることになった。事前の打ち合わせで、ガイドをなさっている方々とお会いして、みなさんとてもお元気で生き生きとしていらっしゃるのに感心させられた。「足守藩の当時は偲ばせる町並みを残そう、そして歴史を活かしつつ、足守の町おこしに何かできることはないかと考えたの。足守の良さをもっと多くの人に知ってもらいたいよ。」と寺地さんは、ニコニコと笑顔で話してくださった。



『自分のふるさとにどんな宝があるかを見つけよう。』という課題を持って、子ども達とボランティアガイドの方、そして保護者の方々と一緒に探検に出発した。大光寺→足守プラザ→備中あしもりまちなみ館→藤田千年治邸→緒方洪庵生誕地→足守歴史庭園→近水園→足守文庫→木下利玄生家跡→さむらい屋敷、約2時間半の行程であった。それぞれの場所でガイドの方からの説明を聞きながら、メモをとったり写真やビデオ撮影をしたりして探検した。

3. まとめ方と発信方法

探検して見つけたことをどんなふうにもとめるのかを、子ども達と相談して決めた。子ども達の経験の中から新聞づくりとパンフレットづくりに決まった。新聞は学習班で協力して作成した。探検カードメモをもとにして記事を書き、デジカメで撮った写真を貼った。完成した新聞は、まず、校内に掲示した。オープンスクールの時に保護者の方々や地域の方々に見ていただいた。

パンフレット作りは、近くの中学校と協力して日本語だけでなく、簡単な英語の説明を付けたものも作るようになった。足守を訪れる人に、自分たちの住む足守という地域のよさを知ってもらいたいという願いを持って、一つ一つの写真を選び、文章を考えた。その文章を中学校の選択授業で英訳してもらった。

発信方法として、二つのことを考え、作成している頃、地域の祭りに小学生ボランティア募集の依頼があった。祭りに来られた方々に、足守のよさを知ってもらうための町並歴史ウォークラリーのガイドである。

4. ボランティアとして地域の祭りに参加

足守メロンまつり実行委員会に参加して、観光ポイント（備中足守まちなみ館）でのスタンプ押しと地域の宝さがし探検隊で見つけたことを説明することにした。まとめた新聞は備中足守まちなみ館に掲示することになった。

陣屋町あしもい再発見！
第17回足守メロンまつり

当中学校区最大のイベント、「足守メロンまつり」が**町並歴史ウォーク**を加えて、大きく生まれ変わりました。
みんな！ボランティアとして参加してみませんか？

以下は、子ども達が説明した内容である。

- 1 わたし（ぼく）達の足守小学校の近くには、緒方洪庵生誕地があります。
- 2 1810年備中 足守藩の藩士 さえきこれよりの三男として生まれました。
- 3 備中 足守藩は、今の岡山市足守に置かれた藩で、二万五千石でした。
- 4 一年間にひとりの人間が食べるお米の量が、一石でした。
- 5 二万五千人が食べることができるお米ができていたということです。
- 6 緒方洪庵先生の小さいころの名前は、せいのすけと言います。
- 7 洪庵と名乗るのは、26才の時からです。
- 8 洪庵先生は 蘭学を学んで医者になりました。
- 9 1838年八重さんと結婚しました。
- 10 そして、大阪で蘭学を教える適齋塾 を開きました。
- 11 多くのすぐれた人物を育てました。
- 12 その中には、一万円札になった福沢諭吉という人もいます。
- 13 足守小学校では、洪庵先生の命日に洪庵祭をしています。
- 14 6年生の人たちが、洪庵先生について調べたことを発表してくれます。
- 15 実行委員の人たちがクイズをしてくれます。
- 16 侍屋敷 には、三つの門があります。
「お殿様の門」
「お客様の門」
「家族の門」です。
- 17 侍屋敷 の屋根はかやぶきで、夏はずずしく冬はあたたかいそうです。
- 18 侍屋敷 の玄関のかわらの上には、かめがのっけていて、江戸の方向を見えています。
- 19 江戸にいるお殿様の健康をおいのりしているそうです。
- 20 冠山 には、昔のお城の石垣が残っています。
- 21 いくさの時、たくさんの方が亡くなったそうです。
- 22 石碑のうらに、亡くなった人の名前がほってあります。
- 23 大光寺には、足守藩のお殿様だった木下家 のおいはいがならんでいました。
- 24 木下利玄さんのお墓もあります。
- 25 大光寺は、1701年に建て直しました。ねねさんのしょうかんのうのおずしがあります。
- 26 秀吉のおずしもあります。
- 27 藤田千年治邸 は、おしょうゆを作っていたところです。
- 28 大豆や小麦や塩を入れておく倉庫があります。



- 29 大きなおけがありました。
30 中庭には、井戸があります。
31 正面には、旧足守商家と彫ってある石の柱があります。
32 近水園の足守文庫には、よろい や じゅう があります。
33 秀吉の奥さんのねねさんが使った道中風呂があります。
34 木下利玄さんが、生まれた家です。
35 体育館のすぐ横にあります。
36 木下利玄さんは、足守藩のお殿様だったおじさんがなくなったので、
37 5才の時 養子 になって、東京に行きました。
38 東京大学に行って、勉強しました。
39 短歌をつくるのがとても上手だったそうです。
40 足守文庫 には、寂庵さんの書いた 習字 があります。
41 寂庵は、字の上手なお坊さんでした。
42 近水園には、かめ島とつる島があります。
43 つる島には、利玄さんがつくった短歌がほってあります。
はなびらを ひろげつかれし おとろへに ぼたん重たく がくをはなるる



5. おわりに

地域の行事に参加し、行事に関わっている人々との交流を通して、自分たちが地域の一員であるという帰属意識を持つことのきっかけ作りができた。自分達の住んでいる地域に、観光客が訪れる場所があり、地域のよさを知らせたいと活動している方々がいて、地域を大切にしてみんなで力を合わせて盛り上げようとしている人々が大勢いることに気付いたのである。また、自分達の活動が、多くの人達に認められたことで、次の活動への意欲を持つことができた。そこに住む人々が町並を大切に保存しようとしている姿や、住みやすく温かいまちづくりをしようという気持ちに触れて、自分たちの住む足守という地域に誇りと愛着を持ち、地域の一員としての意識を持って積極的に主体的に地域の問題に関わっていく（参画）ことができる場を、地域と連携して作っていきたい。

「坪田譲治作品初出目録」の構想

『坪田譲治書誌』への布石

劉 迎

一

日本芸術院会員にもなった岡山出身の坪田譲治(1890~1982)は大正期・昭和期を代表する作家として、「魔法」「お化けの世界」「風の中の子供」「子供の四季」など数々の名作を発表している。その文学は所謂純文学から児童文学、通俗文学に至るまで、その多彩多岐にわたる創作活動の広範囲な点において、また幼少から老若男女に及ぶ読者の裾野の広さにおいて、「国民的な文学」であり、端倪すべからざる作家と言うべきであるが、われわれの時代の文学観の偏向と近代日本児童文学研究の歴史の浅さから、基礎的な調査研究さえ整備されていないのが現状である。

周知の通り、近代日本児童文学研究に資する坪田譲治の研究を進めるにあたり、その前提となるのは、まず文献面から研究基盤を整備することでなければならない。既存の文献解説には拘らず、その資料の真偽や文献史上に占める位置・価値を自ら確認することなど、文献面から研究基盤を整備することは、研究としての基本であり、研究者の責務でもある。

こうした研究基盤となる調査を、私は数年にわたって行ってきたわけであるが、過去の資料の中には、坪田譲治と無関係の文献を採用したり、先行研究をそのまま孫引きして間違いを踏襲したりするといった例が多く見られるほか、発表誌を突き止め得なかった坪田譲治の作品が次々と明らかにされるとともに、これまでその存在自体ですら知られていなかった作品の数々が新たに発見されることから、坪田譲治の時代を超えた思考、柔軟な感情は今後も様々な教訓を我々に与え続けてくれるものの、かなり狭い範囲内で坪田譲治が研究されていることが分かった。

「坪田譲治作品初出目録」は、『坪田譲治書誌』の核心をなすものであることから、坪田譲治によって書かれ作られたすべての仕事を徹底的に調査し、量の多少・内容の軽重は問わず収め、坪田譲治文学の全貌を指し示す初めての「坪田譲治作品初出目録」の作成を目標とする。

二

作成するにあたっての基本方針は次の通りである。

1. 作品の初出確認：明治・大正・昭和期における雑誌及び新聞、単行本について独自の調査を行い、坪田譲治作品の初出を確認する。
2. 生原稿資料の所在確認：岡山市収集資料・吉備路文学館収集資料をはじめ、全国に散逸している生原稿の所在を特定し、リストを作成する。
3. 以上の成果を踏まえた著作目録・参考文献目録・年譜を作成するとともに、坪田譲治研究に新たな地平の開拓を試みる。

まずは作品の初出確認についてであるが、これまでの「坪田譲治著作目録」の致命的な欠陥は初出誌・紙の踏査を行っていないことである。たとえば新潮社版『坪田譲治全集』全一二巻の「編集後記」に記された収録作品の初出は、単行本や随筆集などの記述によっているために、多数の初出未詳の作品をはじめ、誤りが多く、表題は不正確で、甚だしきに至っては他人の作品まで含まれてもいる。無論脱漏も多い。

そのため、私は先学の労作を追跡確認して、現に存する多くの遺漏を指摘するとともに、その誤りを正し、不備を補い、一点ごとに実物を確認する。一部、コピーで確認したものもある。実物を見られなかったが、実在性が高いと判断したものは、未見資料として関係文献の最後にまとめてある。

実物調査については、文字通り実物を手にとって調査作業を行ってきたわけであるが、私が調査した限りでは、関係資料の総量は大幅に増えており、作品の数は従来知られているものの約3倍、1600点に達し、単行本の総点数は従来の約2倍、400余点となっている。さらに約1200点(書簡・色紙・短

冊を含む)の原稿や写真が確認できている。

採録対象の作品を、基本的には、明治45年－昭和59年にしぼりたいと考えている。明治45年6月、小川未明主宰の雑誌『北方文学』に掲載された小説「苦き友へ」が確認し得た坪田譲治の処女作であった。明治39年の文芸誌『趣味』に作品を発表したという情報があったが、未確認である。下限のほうは、坪田譲治の亡くなられた翌年(1983)の3月、童話雑誌『びわの木学校』に掲載された童話「無用の手紙」である。また作品の排列は、文芸研究を念頭に置くことから、執筆時期を照らし出す排列をする。坪田譲治は大正一二年から昭和二〇年頃まで克明な創作ノートを残しており、この間に創作された作品の執筆時期および順序を知り得る。

坪田譲治の作品をその性格像ごとに時系列に並べてみると、作品の発表や評価の変遷を辿ることができ、真の坪田譲治像を覆っていた蛻殻の部分が明らかになってくる。そのためには、坪田譲治文学を特徴づけているいくつかの主要なテーマを設け、通時的に概観すると考えている。

私は、坪田譲治の文学を、①戦前期(大正期・昭和初期) ②戦時期(昭和二〇年頃まで) ③戦後期の3期に分けて考えている。またそれぞれの時期の性格像を細かく分別すると、

①戦前期=A. 宗教信仰期:「亡き兄の自画像」、「樹の下の石」、「西方浄土」などの作品は宗教的感情と密接な関係をもっている。B. 「絶対自由」追求期:「森の中へ」、「崖」、「何を砕かむ」などは、社会的システムへの反撥反感を吐露して、一筋の赤いライン上の作品である。C. 通俗作家期:「自殺の代りに」、「恋を喰ふ」、「激流を渡る」、「美しい仮面」などでは、大衆作家をめざした坪田譲治の姿が伺われる。D. 童心主義文学期:「正太の馬」、「枝にかかった金輪」、「河童の話」、「母ちやん」、「引つ越」、「魔法」、「でんへ蟲」などは、子どもの無垢とエネルギーを理想とする童心主義の性格を描いた作品群である。E. リアリズム文学期:短編「お化けの世界」、中編「風の中の子供」、長編「子供の四季」の三部作をはじめ、現実と空想の結び合う純化された世界をリアルに描写する一連の作品を創作した。

②戦時期=A. 国策への同調協力期(日中戦争期):中国戦線視察・満州旅行そして南方徴用を経験した坪田譲治は、「中支点描」、「易島の兄弟」、「包頭の少女」、「満洲・絵ばなし」、「南進の日本男子」、「私の軍艦生活」などといった戦争賛美を基調とした作品の創作によって、戦争一色の文壇における発言力を一層増幅させたことになる。B. 昔話発掘期(太平洋戦争期):「鶴の恩返し」、「桃太郎」など約150編に及ぶ昔話の再話作品を世に送り、近代日本児童文学の発展に大きく寄与した。

③戦後期=A. 民主主義文学期:「サバクの虹」、「汽車の中の子供」、「少年の日」など社会問題の作品を世に送った。B. 回想題材文学期:「せみと蓮の花」、「雲煙四十年」、「老いては」、「昨日の恥 今日」などは、「人間はみな死ぬる。わかり切ったことである」といったように、ふたたび「死」の問題に向かい合う。

こうした視点から考えれば、坪田譲治の作品にはそれぞれの時代的空氣が深く刻み込まれている。ただ同時に忘れてはならないのは、それが同時代の日本児童文学界にも大きな影響を与えたことである。したがって旧来の枠組みを問い直し、研究の扉を大きく開放していくことがきわめて重要である。

また生原稿資料の所在確認のほうであるが、岡山市収集資料・吉備路文学館収集資料をはじめ、全国に散逸している生原稿の所在を特定し、リストを作成する。私の事前調査では、小説や童話、随筆の原稿、習作原稿及び手紙など坪田譲治の作品研究を進める上で見逃せない生原稿資料の存在も確認している(その一部がすでに入手している)。そこには、活字化される以前の、まぎれもない坪田譲治の筆跡や、執筆中の苦心の跡がそのまま再現されている。その内容を解読した上で、近代児童文学史的な立場から該当作品の発表時期を特定し、その資料性を判断するとともに、校異作業を行うことによって、坪田譲治が児童文学や小説などを創作する過程を、きめ細やかにたどる。児童文学者の中でも、坪田譲治の原稿にはことに多くの推敲が施されている。推敲の跡は文学者の創作の謎を解く鍵の一つである。こうした坪田譲治が営々と築いた文学世界の生成を、自分なりに辿ってみる。坪田譲治はなぜこの表現を修正し、この語句を挿入したのか、またなぜこの語順を変更したのか。推敲の跡をさぐることによって、坪田譲治研究の新局面が展開してくると私は信じている。加えて、私も協力した岡山市「坪田譲治データベース」制作チームは、坪田譲治の親族から未発表の写真資料や作家交遊関係の手紙の提供を受けている。その調査・分析を通して、師事した小川未明・鈴木三重吉・川端康

成・山本有三や、作家の仲間である佐藤春夫・井伏鱒二・尾崎士郎・内田百閒・浜田広介ら、主宰雑誌『びわの実学校』同人として育った弟子としての松谷みよこ・大石真・あまんきみこ・寺村輝夫・砂田弘らとの多彩でダイナミックな交流関係を浮かび上がらせる提示を可能にする。

作品研究については、私は、従来の坪田譲治の研究においては欠落していた戦時下及び戦後における坪田譲治の文学的・思想的な営為についての調査・研究を進めているところである。坪田譲治は戦争中、中国をはじめ海外への渡航が三回もあったため、それを題材にした小説や童話、随筆などは数多く作られているが、先行研究が手薄なため、今後さらに深めていくべき課題も多く残していると思われる。私はすでに「坪田譲治文学における〈戦争〉—易県での二日を中心に—」「坪田譲治文学における〈戦争〉—上海視察をめぐって—」などの研究発表をしているが、坪田譲治の作品を新たに発掘することにより、坪田譲治とその文学の全体像を追究し、具体的な作品に即した詳細で正確な論証を展開させることにより、近代日本児童文学の形成とその特質を解明する。さらに坪田譲治研究を地域文化的な視点から追究するのみならず、国際的な視点からもその理解及び考察を深めていく必要があるように思える。

いずれにしても、この「坪田譲治作品初出目録」の作成は、坪田譲治の作家及び作品資料を一元的なデータベースに構築することにより、坪田譲治の文学を取り巻く時代性に深く注意し、またその息吹とも言える文芸様式の消長を立体的に再現することを目的とする。

三

「坪田譲治作品初出目録」の作成は、実際に手がけて見るとなかなか辛い仕事であり、また一人の力では限界があるので、九〇余年を生きた坪田譲治の博大かつ多彩な文業を完璧に覆い得たわけでは決してない。従ってこの初出目録は、後から来る人々のための一つの指標であり、今後のほとんど無限に近い作業への新しい出発点でもある。この意味において、この初めての初出目録が坪田譲治文学の真髄を明らかにし、発展させる一助となることを切に願う。

<編集後記>

地域創生リーダー養成塾として2005年4月に開講した「連塾」の第1期生が所定の2年コースを修了し、世に送り出すことになりました。当初より原則2年制を打ち出していましたが、都合により2年目の実践コースを修了されなかった方々もある中で、本論文集掲載者はめでたく全員所定の課程を修了されたこととなります。ここに『連塾地域創生論文集第2号』として刊行する運びになった喜びを皆様と共に分かち合いたいと思います。

「連塾」第2期生の基礎コース修了論文も本論文集に掲載しています。2年目の実践コースにおいて、更なる充実発展を期待するものです。

なお、「連塾」第1期生はここで修了されましたが、地域創生活動に終わりはありません。今後は各自の活動に期待するところ大ですが、2ヶ月に一度程度は「連塾トップリーダーズセミナー」を開催して互いに情報交換をしながら、更なる地域創生活動進展を図っていく予定です。トップリーダーズの皆様には、可能な範囲、連塾の後輩の指導にもあたっていただきたいと願っています。

本論文集が、今後の各種地域創生活動の一つの指針となり、各地の地域創生活動が発展していくことを祈念するものです。

塾長・所長 松畑 熙一

連塾・地域創生学研究所 地域創生論文集 第2号

初版発行 平成19年3月31日

発行者 松畑 熙一

編集者 佐藤 大介

印刷所 高尾印刷

製本所 アリヨシ企画 株式会社

発行所 **連塾・地域創生学研究所** 〒700-0015 岡山県岡山市京山1-2-21
TEL/FAX 086-251-4615 HOMEPAGE <http://www.renjuku.org>

